

---

# ハヤテのごとく! ~ 超不幸な青年の物語 ~

デビルマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく！〜超不幸な青年の物語〜

### 【Nコード】

N3334S

### 【作者名】

デビルマン

### 【あらすじ】

東京練馬区に一人の青年がやってきた。これはその青年とその周りの人達のドタバタラブコメディである。

## 第0話 くプロローグく（前書き）

どうも、デビルマンと言います。

この小説は今メインでやっている小説の息抜きで作ったものなので、駄文が多いかも知れませんがよろしく願います。  
ではプロローグ、短いですが、どうぞ。

## 第0話　〜プロローグ〜

あなたは知っているだろうか、東京の練馬区のとある場所にすごく  
でかいお屋敷があることを……。

あなたは知っているだろうか、そのお屋敷に住むお嬢様と不幸な執  
事の少年を……。

その二人は天然で、勘違いをして喧嘩したりしながらも、深い深い  
絆で結ばれている……。

そんな人達が住んでいる練馬区に、一人の青年が現れる。

この青年の登場により、練馬区は、そしてお嬢様と執事はどうなっ  
ていくのか？

開幕の鐘が今鳴る……………。

第0話 くプロローグく（後書き）

はい、短くてすみません……。

次の投稿はできれば四月以内になりたいと思います。

では、また次回にてお会いしましょう。

**第1話 運命って時に非常な選択を強いることがある(前書き)**

お待たせしました!!

約束を守ることができました。

とりあえず、楽しんでくれたら幸いです。

では、どうぞ!

## 第1話 運命って時に非常な選択を強いることがある

「はあ……」

一人の青年がベンチに座りながらため息を吐いていた。その息は白くなつた後一瞬にして消えた。

「どうしてこんなこと……」

そう言つて青年は手元にある一円玉六枚を見つめる。そしてまたため息。

「今年がまだ始まつたばかりなのに、どうやってこれで乗り越えるんだろうか？」

そう、今の時期は年を越して、一月上旬。まだTVではいろんな正月番組がやっているだろう。

この時期はこたつにもぐるのがベストだな。

「いや、それただのぐうたら野郎ですから……」

はりのないツッコミを披露する主人公。

「はりがないとか言わないでくださいよ。ツッコミは得意じゃないんです」

それは言つてはいいのか？と思つたがあえて無視した。

「無視するな!」

そう、さっきからこうしてため息ばかりでベンチに座りながら落ち込んで、この青年こそ、今回の小説の主人公、御剣 桂馬である。彼が何故こんなに落ち込んでいるのか、何故、手元にあるお金が原作の主人公よりも六円安いのか。それは今日の朝からさかのぼることにしよう。

1月5日

「……これでよし」と

おんぼろアパートのとある一室。ひびが割れてる鏡をみながら満足げな顔をしている青年、桂馬の姿がそこにはあった。

「ふう、朝食も食べたし、お金も持ったし……これなら今日こそは受かりそうだ……」

一息おいてからまた呟く。

「会社の面接に」

そう彼は18歳。普通なら社会人か、大学生としての道を行く頃だろう。

しかし、彼は違った。

「まったく、なんで神様は僕を受からせてくれないんだろうか」



そう、桂馬はまったくいいほど、会社に受かったことがない。まるで何かに呪われているように……。

「しかし、今日もそれで終わりだ。今日こそは受かる、そんな気がする……」

しかし油断は禁物だ、と桂馬は心の中で自分に呟く。玄関にある今日だけに用意した革靴を履き、扉を開ける。

「さて、行くとしますかな」

少し不安がまじっていたが、桂馬はそう呟いた。

#### 練馬区、快劇会社の一室

「……よし、今月の分はこれで終わりね」

「今日もありがとうございます、吉村さん」

「ありがとうなんて言う必要はないわよ」

少し微笑みながら桂馬の前にいる女性は言葉を返した。

彼女の名は川島藍理<sup>かわしま あいり</sup>。ここ、小説を生み出す会社、快劇会社で仕事をしている人である。主な仕事は小説家をサポートするマネージャー。

「しかし、ついにここまでできたわね。とりあえず先に言っておくわ。十巻目達成おめでとう」

「いえ、ここまでこれたのはさんのサポートがあつてこそです。こちらこそ、ありがとうございます」

そう、桂馬はこの会社、快劇会社の専属小説家である。今はイチハラカズトとして、小説を出している。ちなみにジャンルはライトノベルである。

「それにしてもあなた、その黒スーツ姿、もしかしてまた面接？」

「はい」

「もうやめたほうがいいわよ。どうせ受からないんだし」

「今日は気分がいいから大丈夫です。それに不安を煽るようなこと、言わないでくださいよ」

「だって今までだってそうだったんだから、事実でしょ？」

「それはまあ、そうですね……」

事実が事実なため反論することができない桂馬。

「しかもあなたにはもう小説家という立派な職業があるじゃない」

「いや、これは所詮副業なんです。今どきの小説家は小説家を副業にして、本業は大企業で働いていたり、専門家だったりするんです」

「まあ、確かに今の時代多いけどね」

「そう、それができて僕は多分、初めて本当の社会人になれると思うんです!!--」

「そう、なら頑張ってね」

「はい!!!--もう頑張りまくりですよ!!!--」

やる気を出した桂馬に心配の眼差しを送る監理であった。

「……なるほど。それが我が社に入ろうと思った、あなたの意見ですか」

「はい。そうです」

あれからしばらくたち、面接が始まった。落とされているといっても、何回も面接の空気も味わっているため、緊張もしなかった。しかし、今日は朝から何かが違う、と思っっているのかかなり胸がドキドキしているようだ。

「よくわかりました。もう下がっていいですよ」

「はい、ありがとうございます」

そう言って、部屋を出る桂馬。

「きたぞ。今までのなかで一番の出来だった……あとは結果を待つ

だけ」

早く出ないかな、と思う桂馬。その顔はすがすがしかった。

「……まさか受かってるだなんて」

あれからしばらくして今は昼の1時18分。桂馬は面接に受かった。最初は信じられなかったが、後々になって受かった実感がわいてきた。

（久しぶりに仕事ができる。そういえば、ちゃんとした仕事ができるのはバイト以来だな）

よほど嬉しかったのか、物思いにふけり始める桂馬。

「さてと早速向かうとしますか……」

嬉しい感情を表に出さないように抑えながら他の受かった人と一緒に会社の中に入ろうとした瞬間、

「お願いです、私を受かせてください！」

「はなせ！なんなんだ！」

「ん？なんだろう？」

会社の玄関の前で声が聞こえた。覗いてみるとそこにはスーツ姿の男の人が二人、何かで言い争っていた。とりあえず周り人たちに事情を聞くことに。

「あの、どうしたんですか？」

「ああ、なんでもあいつ落ちた奴らしいんだけどさ。ここの社長にお願いしてどうしても入れてもらいたいんだと。まったく往生際がわるいぜ」

「そうですか……」

気持ちはわからなくもないけど、と桂馬は呟く。今までだって自分がそうだったから。しかし今、こうしてみてもなんだか悲しくなってきた。しかし結果は結果なのである。そこはきちんとけじめをつけなきゃいけないだろう。

（仕方ない、僕が行って来るか……）

誰も止める気配がないので、桂馬が止めようとしたそのとき、

「いい加減にしろ!!」

「ぐはっ!!」

「!?!」

その社長は、さっきから迫っていた男を押して、そこに蹴りを入れたのである。

「…………うあ…………」

どうやらそうとう入ったらしく、蹲っている男。

「大体、まずは頼み方というものがあるだろうが！！貴様はこの社長に向かって何様のつもりなんだ、ええ！！」

そしてまだ社長はその男を蹴り続ける。

「謝れ！！まず私にあやまれ。土下座でな」

「！？」

「嫌なのか？嫌ならしょうがないな…………。せっかく考えていたのに」「くっ！！…………申し訳ございませんでした」

「よくできたな、ほれ、ご褒美だっ！！」

「ぶはっ。い、痛い…………」

「まったく犬の分際でこの私に触れおって…………。バイ菌がついたわ。返ったら消毒しとかなきゃいけないな、これは」

「じゃ、社長、いくらなんでもやりすぎなのは…………」

さすがに見かねたのかその社長の部下の一人である男が言った。

「貴様、こいつを庇う気なのか？ただの部下のくせに」

「い、いえ。別にそういうわけじゃ」

「そういえば貴様、つい最近はいったようだな。よし、わかった。お前はクビだ」

「え?」

「えっ、じゃない。言った意味がわからなかったのか? 貴様はクビと言ったんだ。明日から来なくてもいいぞ」

「そ、そんな!」

男は抗議するが社長はまるで聞いていないかのようにその男の目の前を通り過ぎて行った。

「まったく、近頃の若い奴らときたら……。それにしてもこんなによごれてしまった。今日は早く帰ってクリーニング屋にでも出さなければつぶは!」

「……………」

今日の予定の変更を独り言で呟いていた社長を殴ったのは桂馬だった。

「えっ? な、何が起きたのだ?」

今の状況を社長は理解することができなかった。なぜなら自分の顔が地面についていたからだ。

しかし、しばらくすると先程の状況を思い出したのか、その社長は

桂馬に向かってしゃべりだした。

「おい、貴様!!どういつつもりだ!」

「……」

「私はこの会社の社長だぞ!!その社長に向かって殴るとはどういう見だ!!」

「というか、貴様先程面接に来た奴だな」

「……だからなんですか?」

「なんですか、か。随分と威勢がいいな小僧」

「僕、もう青年なんで、せめて若造と呼んでください」

「どっちでもいいだろ!!」

「まあ、よしとしましょう」

「何故貴様が決めるんだ……ってとにかく貴様は即刻クビだ!私の顔を殴った罰だ。クビだけですんだことにありがたいと思え!というわけで、謝ってもらおうぞ」

「……」

「さあ、先ほどのあの男のように謝れ。謝らなければお前の」

「……確かに、あの人はけじめをつけなかった」



社長の言葉をさえぎるかのように桂馬がしゃべった。

「は？貴様、なにいきなりしゃべって」

「先程の男性の方は落ちたという自分の現実を受け入れなかった。例えどんな理由があろうとしても……。だってそれは皆平等だから」

「ふん、貴様。わかっているではないか。ならば」

「だけど、あなたはやりすぎた……」

「なに？」

「謝る必要はあったのかもしれないけど、なにも土下座させる必要もないし、それに蹴る必要もないじゃないですか。それに関係のない人をいきなりクビにしたり……」

「ふん、私に逆らったんだ。何が悪いというのかね？」

「……じゃあ、聞きますけどあなたは先程の人の人生とか考えたことはあるんですか？」

「そんなこと知ったことか。私がそれを気にする必要もない……」

「そうですか……。それがあなたの答えなんですね？」

「だったらどうし」

「残念ならば、不合格です。もう一度人生をやり直してきてください……」

「ぶはっ!!」

質問を終えるなり桂馬はそう呟き、その社長の顔を力いっぱい殴りつけた。あまりにも殴った衝撃が強かったのか、社長は気絶してしまった。

「……」

「あ、あの……」

「……なんですか？」

「ありがとうございます」

礼を言ってきたのは、さっきまで土下座してた男性。

「別に僕は当たり前のことしただけです。礼を言われるほどでもありません」

「しかし……」

「それに、あなたにも非はあるんですよ？」

「そ、そうですね、これからは気をつけます……しかし今月はどうしてもお金が必要で……」

「なにか理由が？」

「実は……」

桂馬はその人から事情を聞いた。どうやら今まで入っていた会社が倒産してしまい、自分も何故か借金を稼ぐことになってしまった。今までお金を貯めていたおかげでほとんど払い終わったのだが、どうやらあと5万5230円必要らしい。しかしちょうど資金もつきかけていた。そんなときこの会社のことを知ったようで、今に至る。ちなみに何故そんなに中途半端な鐘になったかは聞かないことだ。

「なるほど……ご家族は？」

「とりあえず実家に……。でもやっぱり心配してきてるみたいですね。ははは、情けないですよ」

「親戚から借りるとかはできなかつたのですか？」

「私、どうやら親戚から嫌われていまして……」

どうしてかはわかりませんが、と男性は苦笑いをしながら答える。

「……あなたの奥さんや息子たちには何もいってないんですか？」

「ええ。これは巻き込まれたとはいえ私個人の問題なんです。そこに何の関係もない家族を巻き込むわけには行かないんです」

「……しっかりしてますね」

「そうですか？」

「だからって、先程のは駄目だと思いますがね」

「うう……。そのことは忘れていただけたら」

「冗談です。もう言いませんから落ち込まないでください」

「しかし困ったな……。あともう少して借金取りが来る時間だ……。早く家に帰らないとな」

「でもどうするんですか？」

「言い訳するしかないでしょうね。でももう何回も言い逃れてるから今度こそは無理かもですね……」

そう悲観的に男性は答えた。目には少し涙がたまっていた。よほど悲しいのだろう。

「……とにかく私は最後に君にあえてよかったかもしれない。もし君に出会えなければ僕は人間として駄目になったいたかもしれない……本当にありがとう」

男性は深々と頭を下げた。

「……ではこれで」

「あの、勝手に終わらせないでくれますか？」

去ろうとした瞬間桂馬が男性に向かって納得できない顔をしながら声をかけた。

「私になにかまだ？」

「これを」

そう言つて桂馬は自分の財布を出して中から5万5230円を出した。

「二のお金つて……」

「使ってください。僕には使いようがないので……」

「そんな！だめですよ……」

「いいんです。とにかく受け取ってください」

無理矢理お金を渡す桂馬。男性はわからなかった。なんでこんなにもしてくれるのか、と。

「何故、ここまでしてくれるのですか？」

桂馬はしばらく黙っていたが、後ろに振り替えながらしゃべりだした。

「……嫌いなんですよ、理不尽な不幸つて。まあ、自分のことはいんですが他の人を見てるとなんだか理不尽なことが多くて……。なんだかそれつて嫌じゃないですか。

まあ、僕がそう思うだけかもしれないが……。要はお節介なんです。他人からは親切とも言われますけど。それだけです」

「そんな理由で……」

「でもそれが僕の決めたルールですから……ではこれで」

そのまま去ろうとする桂馬。

「……せめて名前だけでも」

男性はそう答えるが桂馬は首を横に振りながら言った。

「名乗るほどのものでもありませんよ。それより、これからは家族を大切にしてくださいね」

「……はい！」

そう言っただけで桂馬は去った。そのときの顔はとてもすがすがしい顔をしていたに違いない。

Fin

「勝手に終わらせないでください！それに終わり方中途半端すぎです！小説にあるまじき行為ですよ」

暗くなった空に誰かにはわからないが、言うようにして叫ぶ桂馬。  
なんだか周りから見れば、ただの変な人である。

「あなたのほうが変です……とにかくどうしようか、これから」

あれからもう既にかかなりの時間が経っていた。というか回想をしていたらすっかり夜になっていた。

「長すぎるんですよ回想が……」

まあ、やってしまったものは仕方ない。

「はあ、とにかく本当にどうしましょうか？」

もう一度手を見る。そこには一円玉六枚があった。

「六円か。うまい棒ですら変えないじゃないか……家にはもう帰れないし」

そう彼は今家を追い出されたのである。理由は次に書くとおりである。

お金をあの男性を渡した後、アパートに戻った桂馬だったが、いきなり大家さんから、今すぐ出て行け宣言により追い出された。ちなみに荷物は三日以内に出せ、だそうだ。

「先程より短いですね……ってそれは置いといて。……今日の朝に戻れるなら戻りたいな」

この世界にはドラ もんはないから、タイムマシンは借りれない。

「そんなことわかってますよ。もしも、です。……今日はとことんついてなかったな。せつかくの小説十巻目記念だったのに……」

ほんとに散々な一日である。

「……さらに雪か」

空から白い綿が落ちてきた。正体は雪。普通なら綺麗だな、とかいってるんだろつが、今は、追い討ちをかけているとしか思えない。

「そういえばふるって言ってたな……なんだかもういやだな」

傘も家に置きっぱなしだ。しかし、もう家には戻れない。

「……もう、休んでもいいかな？いいよね。僕、それなりに頑張ったつもりなんですよね、これでも……。だから、いいかな？ねえ、プトラッシュ……」

色々な不幸がありすぎて、ついにおかしいことを言い出してしまった桂馬。このままじゃ、1話にして完結してしまう。というかプトラッシュとは？

「……なんだか暖かいな。なんでだろう？」

いつのまにか冷たかった雪が止んでいた。

「……まあ、いつか。どうせ僕はもう死ぬ運命にあるんだし。今更考えたって……」

「何故死ぬ運命なんですか？」

「それは今までの経緯を見てたらわかりま……ってえ？」



あきらかに自分とは違う声が聞こえた、と思った桂馬はあたりを見渡す。しかしその必要もなかった。

「雪も降っているのに傘も差さずにいると風邪を引いてしまいますわよ?」

目を上に上げるとそこには自分の上に傘を差しているメイド姿の女性がいた。

このメイドさんとの出会い　マリアとの出会いによって、桂馬の運命は大きく変わることになる。

歯車はすでに回り始めている……………。

## 第1話 運命って時に非常な選択を強いることがある(後書き)

どうも、最近なんだか憂鬱なデビルマンです！

いかがだったでしょうか？

とにかく主人公、桂馬君には超不幸にさせたくもりです。

ちなみに快劇会社のことについてはこの世界でのオリジナル設定です。決してこんな会社は存在しません。(あったらいいな、とは思  
う)

これについてはある程度お話がたまったら設定として投稿するので、その時までお待ちください。

感想、評価、質問等いつでも受け付けておりますのでよろしく願  
いします。

では、また次回で！

ちなみに、次回投稿は早ければ四月中にできるかもしれません。

第2話 落ち込んでいる時はポジティブに……（前書き）

今回はなんだかすらりと執筆できたので、早く投稿できました。  
やっぱり、オリキャラとキャラの絡みが難しい……。

それではお待たせしました！！楽しんでいってください。どうぞ！  
！

## 第2話 落ち込んでいる時はポジティブに……

前回のあらすじ。

超がつくほどの不幸青年御剣桂馬。会社の面接に行って受かったものの、色々あり、入る寸前にクビにされるという最悪なことになってしまった。家からも強制退去させられ、もう死のうと思った矢先、突然目の前にメイドさんが現れたのだった……。

「雪も降っているのに傘も差さずにいるなんて。風邪を引いてしまいますわよ?」

「えっ、あ、すみません……」

とりあえず桂馬が謝るとその女性はかまいません、と笑顔で答えた。その笑顔にドキツとしながら、桂馬は気になっていることを質問した。

「な、何故僕にそんなことを?」

「いえ、たまたま公園を見かけたら傘も差さずになんだか悲しそうな顔をしている人がいたものでしたから……」

(この人、すごく優しい人だ!)

桂馬はこのメイドさんに感動していた。なぜならこんな親切は最近

ではなかったからだ。

(それにしても、綺麗な人だな)

改めてマリアの顔を見る。とても綺麗な肌。瞳は真珠のように透き通っている。

少し幼さを見せている顔立ち。どれもこれも悪いところが一つもない。普段雑誌に出ているモデルさんとかよりもいい、と桂馬は思った。

(年齢的には、僕と同じ年かそれより下かな?)

理由はまだ残っている幼い顔立ち、と勝手に推測してみる桂馬。

(しかし、何故だろう。この人に年齢を聞いてはいけないような気がする……)

聞いた瞬間全てが終わる。そう桂馬は判断した。

「とにかく、ありがとうございます」

「そんな礼を言われるほどじゃないですわ」

「いえ、礼をしないと僕の気がおさまりません」

「そうですか……。なら素直に受け取っていただきますね」

その女性はニッコリと微笑みながら答えた。

(……本当に綺麗なひとだな／＼)

それからしばらく、彼らはそこでたわいのない話をした。

### 1時間後

「そうなんですか、マリアさんはその三千院さんのところでメイドをしているんですか」

「ええ」

あれから二人はすっかり仲良くなり、お互いに名前を呼び合うようになった。

「それにしても災難ですね……」

「ええ、まあ。でもこれは自分の意思でやったことなので別に後悔はしてませんよ……。まあさっきはやばかったですけど」

「そうですね……。なんだかハヤテ君と似ていますね」

「ハヤテ？」

「この前新しくナギ……三千院のお嬢様の執事になった子です」

「へえ、ちなみにどんな子なんですか？」

何故か気になったので聞いてみた桂馬。

「えつと……とにかくとても不幸な子ですね。クリスマスイブに、両親に1億5680万4000円で売られてしまって。しかも聞いたところ、そのとき所持金が12円だったそうです」

(……なんだろう、すごく共感できるんですけど)

何故だか共有間を持てる、そんな気がしてならない桂馬。それは境遇が同じだからであろう。

「でもひどいですね。自分の息子売るなんて」

「私もそう思いました。でも本人はあんまり気にしていないようで

……」

「すごくたくましい子ですね」

「ええ、ほんとに。で、今、その借金を支払うために執事の仕事を」

「それでも借金を返すその心意気、ほんとにしっかりしている子です  
すね……」

感心したように頷いた桂馬。

「……これからどうするんですか、桂馬君」

マリアが真剣な顔で桂馬に聞いた。

「僕ですか？まあ、なるようになりますよ。まあ、まずは仕事探しからですね」

「……あの、もしよかったら」

マリアが何かを言おうとしたそのときだった。公園の前に黒い車が止まっていた。その車に金髪ツインテールで背が低い女の子が黒い男に連れ去られるようにして、車とともに去って行ってしまった。

（もしかして誘拐！？）

「いけませんわ！またあの子誘拐されて」

「……もしかして知り合いですか？」

「ええ。私が使えている主です」

「あの子がそうですか……ならば助けに行くしかありませんね！！」

「無茶です！相手は車なんですよ！」

「ご心配なく、例え何かあってもギャグ補正とかそういうので何とかなりますんで……」

マリアは心配そうに言うが桂馬はまったくと言っていいほど動じていない。

「では、行ってきますー！！」

声をかけようとしたマリアだったが、すでに桂馬の姿はなかった。その場にマリアはしばらく立ち尽くしていたが、はっとすると、ポケットから携帯を取り出した。



「……とにかくハヤテ君に連絡を」

「おい、貴様ら！私の扱いにはもっと慎重にしろ！」

ここは先程の黒い車の中、犯人に向かって文句を言っているのが誘拐された三千院ナギ。

金髪のツインテールで、ツリ目が特徴なアニメが好きで引きこもりの13歳である。

「おいおい、ここでプロフィール紹介するなよ。するんだったらもつとまともなところにする」

ついでなので。というか引きこもりのところにはつつこまないのか？

「ってそんなことはどうでもいい！おい、さっきから聞いているのか、このハゲ二人！！」

「ハゲとか言うな！！」「」

ナギのハゲ発言にぴつたりと突っ込んだ二人組み。

「いいじゃねえか！！ハゲの何が悪い！」

「そうだ、そうだ。しかもハゲって見た目的に強いし！ボスキャラじゃ、絶対に一人はいんじゃない！」

「……お前達、何もわかっていないようだな。いいか、ハゲキャラは大体のところ最初に出てくる悪役に使われるんだ。そしてすぐにやられていなくなる。」

ナパを見てみる。あれがいい例じゃないか」

「ナツのことは忘れるよ！！しかたなかったんだよ！大体あれは悟が強くなりすぎたのが原因なんだよ！ツパに罪はないんだ！」

「でもそれからというもののハゲキャラというものは必ずやられるではないか。」

クリリ だつてそうだっただろ？」

「クリンは特別だったんだよ！仕方がなかったんだよ！だつてクリンってそういうキャラだから！」

「キャラだけで生きていくなんてもはや昔のアニメの話！今の時代は作品にこそ力を入れるべきなのだ！」

「この子、いきなり関係ない話し始めたよ！キャラって言葉出しただけで反応しすぎでしょ！！しかも今もそんなに変わってないから！」

「まったくめんどくせえガキだぜ。こいつが本当にあの三千院家の令嬢なのかよ」

一人のハゲ男がだるそうにしながら言った。

「まちがいねえよ。このプロフィール通りにちゃんと調べたんだから」

もう一人のハゲ男が一枚の紙をペラペラと空中で動かす。そこにはナギについてのことが決め細やかに書かれていた。

「しかしここまでうまくいくとはねえ……これでたんまりお金が手に入るぜ！」

「これで俺たちはようやく借金地獄から解放される！」

やったり感のある二人を見てナギはふんっ、と鼻で笑った。

「残念だな。その借金地獄からは逃れられそうにないぞ？」

「なんでだよ。まさか、助けがくるとでも思ってるのか？」

「ああ、そうだ」

「はっはっは！こいつは傑作だぜ！いいかよく聞け小僧！」

「いや、私女だから」

「まず今、この車は時速134kmで走っているんだぜ。普通じゃ追いつけない。それに奴らは手出しできないはずさ。何せお前がいるんだからな」

「ふん、そんなこと関係ない。私のハヤテなら必ず助けしてくれるからな」

「そこまで言うんだったら見せてもらおうじゃないのさ！もっとも無理だろうがな！はははは！」

(ハヤテなら着てくれる……。絶対に)

心の中でナギはそういうふうに呟く。

「…………あれ？あのさ」

と言ってバックミラーを指で指すハゲA。

「なんだよ？今展開的に最高のところなんだけど」

「見てみるよ。なんかくるぜ…………」

そう言われたハゲBは仕方なくバックミラーを見る。すると何か黒い服を着た人がものすごい速さで走ってくるのだ。

「なんだよこれ。き、気のせいだろ。無視無視」

「いや、でもこれ明らかにこっちに着てるんですけど…………」

「気のせいだって！怖いこと言うなよ！こっちは猛スピードで走ってるんだぜ。それに走ってついてこれるわけがない」

「ハヤテ…………ではないようだな」

少し残念な感じで、ナギは呟く。だんだん近づいてきたらわかったのだが、髪の毛の色は黒い炉で、ハヤテよりも背は高い。執事服ではない黒のスーツ。どれもハヤテには似ていなかった。

「おい、お前。もしかしてこいつがハヤテとか言う奴か？」

ハゲAが信じられない顔をしてナギに質問する。

「いや、違うが……どっちにしろこれでお前らは終わりだな！」

「うるせえ！まだ終わってねえ！調子に乗るのもいい加減にしろよガキー！」

そう言っつてハゲBはナギに手を伸ばす。

（ハヤテ助けてくれー！）

そのときだった。

「その車、止まってくださいー！」

声が聞こえた。

「なんだ！声が聞こえんぞー！」

ハゲBはキョロキョロとあたりを見回すが、誰もいない。

「どうなってやがるー！どっから声が……」

「……ですよ、……」

「……!?」「……」

三人は目の前を見る。そこにはフロントガラスにしがみついでいて乗っている桂馬の姿があった。

「お、お前……どうやってそこに」

「え？ああ、普通に走ってた途中でジャンプして乗っただけですよ」  
「普通って……」

ハゲ達は驚愕していた。常人ではありえないことを普通と言っているのだから。

「う、嘘だー！」

「嘘でもどっちでもいいじゃないですか。だってあなたたちは……」

一息ついて、

「僕に捕まるんですから」

ニツコリとそう答えた。

(綺麗だな／＼)

ナギはその笑顔に思わず顔を赤く染めてしまった。

「ふん！上等だぜ！その前に振り落としてやるー！」  
車はさらにスピードを上げる。

「や、やめろー！これ以上あげたら死んでしまうのではないか！」

「うるせえ！なりふりかまっている暇はねえんだよ！……そうだ、

この際もういい。事故に装ってこいつを殺してやるっ」

「やめろ！」

ついにヤケになったハゲA。

「おい、バカ！このままじゃあ人質まで殺しちまうぞ！！」

「大丈夫だ、すでに手を打ってある」

そういつといきなり扉を開けるハゲA。

「まさか……ここから出るのか！？」

「ああ、そうだ。大丈夫だ。俺たちは受身だけは完璧だからな」

「受身だけはって、俺らはいじられ芸人か何かかよ……」

しょんぼりするハゲAをよそにハゲBは説明を続ける。

「俺が合図したら飛び降りるんだ。人質ごとな」

「わかった」

(このままではあいつが死んでしまう！！私には何もできないのか  
！！！)

何もできないのが悔しいのか、強く拳を握るナギ。

「後もう少しだ……」

「早く車を止めてください。そうすればハゲだけは助けてあげてもいいですよ」

「なんだよハゲだけって!? どうやって助けるんだよ!？」

「いまだ! 飛べ!」

そうやってハゲAは飛び降りた。

「仕方ねえ!」

続いてハゲAとナギも飛び降りた。

「くそつ。逃がしませ」

「ふつ、死ね!!」

運転者がいなくなった車はそのまま真っすぐに進み、電信柱に勢よく突っ込んだ。

「……おい、大丈夫か」

「あ、ああ。なんとかな。にしてもいてえぜ、さすがに一人多いと」

「……あ……」

ハゲ達がしゃべっている間にナギは突っ込んだ車の方を見つめる。車の原型は失われていて、事故の際にでたガソリンから火が出ている。



(わ、私のせいで……)

地面に手をついて四つん這いのポーズをとるナギ。そして目にはうつすらと涙のつぶができていた。

「おいおい、泣くなってガキ。仕方なかったんだよ。あれは事故だったのさ」

あざ笑うように言うハゲA。

「っ!?!何が仕方がなかっただ、殺すとか言ってたではないか!?!」

「まったく何言ってるんだかわかんねえな」

「知らぬ顔をするな!?!」

「ま、まだガキだ。精神的に追い詰められて幻聴を見ていたのかも  
しれない」

「幻聴などではない!?!あれは」

「まあまあ、とにかくあいつは死んだんだよ。残念だったなあ」

「何勝手に人のこと殺しているんですか?」

「!?!?!?!?!」

声が出てきたほうを見る。するとそこには服はボロボロになってはいるが二本足で経っている桂馬の姿があった。

「お前、生きてたのか!!」

ナギが叫ぶ。

「ええ」

「ど、どうやって」

ハゲAが質問する。

「そんなことより、さっさとお縄についてください」

こちらに歩み寄りながら言う桂馬の姿。

「く、くそつたれ!!」

追い詰められてか、ハゲBはナイフを持って突っ込んでいった。

「ふう、わかりました。来るといふなら全力できてください」

「余裕こいてんじゃね!!」

「危ない!!」

ナギがそう叫ぶも、もう時すでに遅し。そのナイフは桂馬の体に突きさす

「……あれ？」

つていなかった。それどころか先程まで桂馬がいたところには何もいなかった。まるで最初っから何もなかったように。

「どこに……！」

動揺しているのか、ハゲBは辺りを見るも何もいなかった。

「どこに行きやがった!」

「ここにいますけど?」

「っ!?!」

後ろから声が聞こえる。できれば振り向きたくなかった。そうハゲAの本能が告げている。今振り向けば自分は殺されると……。。

「どうしたんですか?汗がだくだくですよ?」

「い、いつからそこに」

「だから先程からずっといましたよ」

「く、くそっ!?!」

化物だ、ハゲBは心の中で悔やみながら叫んだ。

俺たちは化物が守っていた姫様に手を出してしまったと。

「ではしばらく眠ってもらいますね!」

「ぐはっ!?!」

男がこちらに振り向いた瞬間に拳を相手の溝内に入れた桂馬。  
ハゲBはそのまま気絶して倒れた。

「ば、化物!!」

とにかく逃げなければ、とハゲAは思った。このままではあいつの  
ようにやられると。

「だから逃がさないといってるでしょう」

「ひいいいー!!」

しかしそれはかなわない願いだった。気づくと目の前には桂馬がい  
た。

「た、頼む!おとなしく捕まるから!だから助けてくれ!」

土下座をして命乞いするハゲA。

「……分かりました。じゃあ、今警察を呼びますからおとなしくし  
ておいてください」

後ろに振り向いて携帯を取り出し、警察に連絡しようとする桂馬。

「バカめ!そう簡単に降参するとも!」

ハゲAは、ポケットに持っていたナイフで桂馬の背中を突こうとす  
る。

「やっぱりこうなりますか」

しかし桂馬にとってそれは予想済みな行動。向かってきた相手の手を掴み、ナイフを落とし、

「とりゃー!!」

そのまま流れるように相手を投げつけた。

「ぐふっ!!」

ハゲAは地面に衝突したあと、そのあまりにも衝撃の痛さに気絶した。

「捕まってもう一度人生をやり直してください。あなたにはまだ時間はあるのだから……」

もう気絶していて聞こえていないハゲAに言う桂馬。

「お、お前大丈夫なのか？」

心配な顔をして聞くナギ。

「ええ、大丈夫ですよ。こういうときの場合、たいていの主人公は丈夫に作られて」

言いかけたところで前から倒れてしまう桂馬。

「全然大丈夫ではないだろう!!」

「ははは、そう見たいですね……」

どどん力が抜けていくのを桂馬は感じていた。

（やばい、意識が朦朧と……最近節約してて飯を食ってなかった時に、全力で走ったのが原因かな？）

「とにかく私を助けてくれてありがとう！その礼といってはなんだが、なにかほしいものとかないか？」

「じゃ、じゃあ、僕に……仕事をく……だ……さい」

「うむ、その願い、この三千院ナギが引き受けた！！」

それを聞いて安心したのか、桂馬は意識を失ってしまった。

「おい、今すぐ救護班を頼む。いいな、五分で来い。じゃ」

携帯で救護班の要請をした後、ナギは桂馬の顔を覗き込んだ。

「は、ハヤテほどではないが、かつこいいではないか／＼／」

顔を赤く染めてナギが呟く。と、そのとき、

「ナギ！」

「お嬢様！無事ですか！」

「お、ハヤテにマリアか」

「まったく、ナギ！また誘拐されて」

「仕方ないだろう。いきなりだったのだ」

「大丈夫ですか？どこかお怪我とかは」

「大丈夫だ。そこにいる奴が助けてくれたからな！」

「っ！？桂馬君。大丈夫ですか！」

桂馬を見た瞬間に青ざめた顔をして駆け寄るマリア。

「大丈夫だ、マリア。気絶しているだけだ。それに救護班も呼んである」

「そうですか……」

ほっと一安心したマリアであった。

「どうやら救護班がついたようだな。よし、早速屋敷に連れて行く」

「……ナギ。一つお願いできますか？」

「？なんだ、マリア？」

「あの、この人のことなんですけど……ナギの新しい執事にしてくれませんか？」

一瞬の沈黙が場面を走る。しかしそんなのはほんとに一瞬であった。

「安心しろマリア。願いはすでに聞き入れている……」やつを三千院家の新しい執事にする……！！  
とりあえず、ハヤテ！運んでくれ」

「はい、分かりました」

そういうとハヤテは横たわっている桂馬をお嬢様抱っこし、そのまま救護班のヘリの中に運んでいった。そのままナギもヘリの中に。

（よかったですね桂馬君。いい仕事、見つかりましたよ）

そんなマリアの祝福する思いも知らず、桂馬は眠り続けている。  
歯車は絡みだした。

「おい、結局さ……」

「ああ、俺たち……」

「最後まで名前なかったな」

その後、このハゲ二人組みは警察に捕まった。



第2話 落ち込んでいる時はポジティブに……（後書き）

というわけで、ついに主人公がナギに拾われ執事になりました。

これからどうなるか、楽しみにしててください。……皆さんに楽しませる文章を書けるだろうか？

次回はついに桂馬君が三千院家に！！

では、これで。感想等もお待ちしております。

次回は早ければ四月中に。遅ければ五月の初めに投稿したいです。

第3話 知らない天井って言葉を一度は使ってみたい(前書き)

早く執筆できたので投稿することにしました。

しかし早く書きすぎたせいか、なんだか自分的にはあんまりいい感じには仕上げられませんでした。

ではそんな感じのデビルマンですが、今回もよろしく願います

!!

ではごっごぞー！

### 第3話 知らない天井って言葉を一度は使ってみたい

うーん、あれ、「こごと」？

「まったく、お風呂で寝てしまっただけはいかんといいたであろうが」

「あ、お爺ちゃん……ごめんなさい」

「まあ、まだ三歳じゃからの、仕方ないの。じゃが次は気をつけるのじゃぞ？」

「わかりました、お爺ちゃん。ところでお爺ちゃん、壁に張り付いて何やってるんですか？」

「ふん、そんなこともわからぬとは……これからの御剣家が心配じやの」

「そ、そんなに大事なことなのですか!？」

「……しかしまだ桂馬もまだ三歳じゃから、わからないのは仕方ない」

「何をしているのかを教えてくださいませんか!? お爺ちゃん!」

「うむ、その好奇心に免じて教えて進ぜよう。……これはな」

「「これは?」」

「……隣にある女風呂を覗いておるのじゃ!?!」

「……………」

「お爺ちゃん……………それは、色々と駄目ですよ……………って夢か」

まだ少し眠たい気持ちを抑えながら桂馬は目を開けた。

「……………知らない天井だ」

色々なところで使うネタ発言をする桂馬。

「いや、タイトルでも書いてあるじゃないですか？使ってみたくって……………それに僕も一度は言ってみたかったですよ。しかもこれも小説のネタに使えますね」

これ自体小説だろ、というツッコミは言わないでおこう。

「それにしても懐かしな……………」

体を起こしながら先程の夢を思い出す桂馬。

「……………お爺ちゃん元気かな？」

少し寂しそうな、そんな顔をして窓の方に目を向けた。

「……いや、あひと変態なら大丈夫だな……それよりも」

思考を変えてあたりキョロキョロと見回してみる桂馬。

(……ここどこ?)

自分の見たことないものを見てそう呟いた。

「といつかなんで僕ここで平然と寝ているんだ？確か僕は……」

うーん、と首をかしげて考える仕草をする。

「そうだ、思い出した。会社の面接に受かったんだけど、色々あつて落ちてそれから公園で……」

忘れかけていた記憶を次々と口に呟く桂馬。ハタから見ればかなりの独り言もいいところである。

「うるさいですよ。えっと、それで確かマリアさんと会って……そうか僕、ナギって言う女の子を助けて倒れたんだっ」

ようやく全てを思い出したようで顔がすっきりとした表情になっている。

「……ということは僕って死んだのか？」

最後にすごい勘違いをしまっているようである。

「それにしてもなんだか生きてる心地するなあ。ま、それも仕様  
ってやつかな？多分天国側の天使さんたちも配慮しているんでしょ  
うね。そういうところに感謝ですね」

訂正する、すごいではない、かなり勘違いしている。

「でも目をあけたら確かにここは天国ですね。今までは目を開け  
たらいきなり縄で縛りつけられてるうえに崖の上に縛りつけられて  
たり、いきなり知らない森に放置させられたり……とにかく禄など  
ころじゃなかった……」

色々つつこみどころ満載なところは見逃してくださいb y作者。

「しかし、もうそんなのもおさらばですね！こころゆくまで天国  
を楽しみましょう！」

拳を作りガッツポーズをする桂馬の姿はなんとも輝いてる光景だっ  
た。

「……そういえばなんだか体が汗でべちょべちょだ……風呂にでも入  
ろうかな？」

そう言つて、何故か柵にあったバスタオルを持ってどこにあるかも  
わからないお風呂を探しに行った。

「もう目を覚ましていますかね？お嬢様」

「そういえば医者及早ければ今日中に目が覚めると言っていたな……」  
三千院家のお屋敷の廊下を歩いてい男女がいた。名前は三千院ナギと綾崎ハヤテである。

「僕の場合はプロフィール紹介なしですか……」

「あらかた作者がめんどくさくなったとかそんなのだろ？ 気にするなハヤテ」

「そうですね」

ハヤテがうんうんと頷く。

「って話は元に戻して、その……御剣さんはどんな人なんですか？ 僕は担いだときしか見ていないので」

「私も直接話したわけじゃないが、マリアはすごくいい奴、と言っていた。実際私もそう思う」

「見ず知らずのお嬢様を助けたくらいですもんね……」

ナギは感謝の意を、ハヤテは感心して呟いた。

「……まあ、時速134kmの車に走って追いつくのはどうかと思うけどな」

「普通ではありえませんか……というかボル より早くないですか？」

苦笑いになるハヤテ。

「とにかくあやつとは約束したからな。ここで約束を破っては三千年家の名が廃れる。それに助けてもらったお礼もある」

「そうですね。僕もお礼を申し上げたいですし……」

そうハヤテが言い終わると同時に桂馬が寝ている部屋の扉のドアをナギが開けた。

「……おい、ハヤテ」

「なんですか、お嬢様？」

「いない」

「え？」

「いない……桂馬がいないぞ！」

「え!？」

「とにかく探すぞ!外にはでていないはずだから」

「そ、そうですね、ではお嬢様はもしもの時のためにここに残っててください!」

「う、うむ。わかった……では頼んだぞ、ハヤテ」



「わかりました！お嬢様！」

そんな感じで二人が慌てふためいてる頃、我らが主人公はというと、

「ふう〜、いい湯ですね〜。やっぱり温泉はいいですねえ〜」

お風呂でリラックスしていた。

「いや〜、さすが天国式のお風呂。湯加減とか完璧に調節されていますね〜」

自称天国式お風呂を満喫しているようだ。

「しかもこの広さで一人とは……驚きましたね。こんなところ昔よく入ってた銭湯以来ですよ」

確かにこの桂馬自称天国式お風呂場、もとい三千院家のお風呂はすごくてかい。しかも装飾も施されている。

「それにしても本当に癒されますね。僕としてはもう満足ですよ」

そんなことを呟いたとき、

「？なんだ、あの影？」

少し先の方に黒い影を見つけた。湯煙でよくわからないがそれは人間くらいのでかさの影だった。

（もしかして……ここに住んでる人？ということは何もないのは

僕の早とちりで、実は他に先客がいたってこと？)

思考をめぐらせ考える。

「とにかく謝らないと……すみません、勝つてに風呂に入ってしまった……。次からは気をつけま」

「え？桂馬君？」

「え？」

聞き覚えのある声を見て下げていた頭を見上げるとそこには、マリアがいた。

「あ、れ？マリア……さん？」

「け、桂馬君……」

桂馬は理解できなかった。何故天国にマリアがいるのかと。逆にマリアも理解できなかった。何故ベットで寝ていた桂馬が目の前にいると。

「きゃああー!!」

「わわ、う、ごめんなさいー!!」

とりあえず自体の状況を把握した二人は体を湯船に沈める。

「す、すみません、マリアさん!!まさかマリアさんがいるなんて思っても……/ / /」

「い、いえ。私も寝ている桂馬君がいるとは思ってもいなかったの  
で……／＼／＼」

二人とも顔を真っ赤にしながら話す。

「し、しかし驚きました。まさかマリアさんが天国の住人なんて…  
…」

「え？」

桂馬が言ったことがよくわからなかったのできよとんとするマリア。

「すると三千院家とは天国の貴族様みたいなものですか。なるほど  
それなら納得します」

「あの、何を言っているんですか？」

「いや、何をとぼけたことをおっしゃっているんですか、マリア  
さん」

「？」

さらにわからない顔をするマリアをよそに桂馬は話し出す。

「僕にはとぼけてももう隠せませんよ。実はマリアさんは天国の住  
人で僕を迎えに来た天使とかそんなところでしょう。しかし本当に  
感謝していますよ。ここじゃなきゃたぶん天国でも変なところにい  
るところでしたから……」

「なんだか桂馬君の中ではとんでも設定があるようですが……」  
「どうやら色々と勘違いしている桂馬に気付いたマリアは桂馬に真実をはなしてやることにした。」

「あの、桂馬君」

「はい、なんでしょうかマリアさん」

「あなた……死んでませんよ？」

「……え？」

いきなりのことを言われてびっくりしている桂馬。

「もう、何言ってるんですか。冗談はやめてくだ」

「冗談でもアメリカンジョークでもなく本当のことですよ」

アメリカンジョークはかましていないが、とにかくマリアの顔は真剣そのものであるため、桂馬もそれ以上何もいえなくなった。

「……じゃあ、こんなにお風呂がでかいのも」

「まあ、三千院家の権力なら簡単に作れますね」

「ベッドが雲のようなふわふわ感があったのも」

「まあ、最高級の綿生地を使っていますからね」

「実は作者が好きな女の子のタイプは清純派だということも」

「何故ここでそれを？」

「実は作者が最近になって、うたわれるのにはまっていたりするもの」

「名作ですからね」

「全て、本当のことだというのが――！！」

いきなりの真実に驚愕の桂馬。というか僕をいちいち使っな。それと今更でもいいじゃないですか。

「まあ、最後の方は置いて……とにかく全て本当のことです」

「そうですか。ま、天国に行くのはまだ早いということですか……」

「そういうことですよ」

少しがっかりしながら話す桂馬に対してマリアはフォローの意味もこめてニツコリと笑顔になる。

「……とりあえずこのままではさすがにまずいので上がりましょうか」

「……そうですね」

確かにこんなところに誰かが入ったりしたら何か勘違いする可能性は否定できない。それこそ漫画的なお約束展開が待っているに違い

ない。

「先にマリアさんから出てください。僕はもうちょっとあとでますから……」

「そうですか？ではお言葉に甘えて先に上がらせてもらいます」

そう言うとマリアはお風呂から出て行き脱衣所に行った。

「……僕はまだ生きてるのか……。だったら精一杯生きましょうかね！せっかく助けていただいたんですから」

胸を張って堂々と決意を新たにした桂馬であった。

「あの、マリアさんそろそろいいですか？」

「あ、あの桂馬君……そ、それが」

「どうしたんですか？まさか何かあったんですか!？」

「い、いえ！なんでもありませんからまだきちや！」

マリアの異変を感じた桂馬はすぐに風呂から出て脱衣所の扉を開く。するとそこには、

「け、桂馬君……／＼／」

「お、おま、おま……／＼／」

まだ下着姿のマリアとナギがいた。一方の桂馬はもちろん裸姿であ

る。つまり二人には包み隠さず見えているというところで。

「こ、このバカ者が……！！！！／／／」

「こっちの展開がよ……！！！！」

二人の叫びが脱衣所にこだました。

### 三千院家リビング

「まったくびっくりしたぞ、まさかお前がいるなんて」

「す、すみません……」

(見られた……マリアさんたちに包み隠さず見られた……)

あの事件のあとマリアとナギと桂馬はハヤテと合流し、今はリビングにいる。

「あんなお約束展開、誰が望んでいると思っているのだ」

「それはまあ、そうゆうのも重要だということですよ、お嬢様」

「しかしなあ、もう少し考えられなかったのか？なんかこうも少しハヤテのごとくらしくと言うか……まあ、この作者に何を求めてもだめなのはわかっているが……」

あれしかネタが思いつかなかった。後悔はしていない。

「とにかく、怪我人だというのに勝手にベットを抜け出してお風呂に行く桂馬が悪いのだ！」

「す、すみません……」

頭をペコリと下げる桂馬。

「ま、そこまで別に怒ってもいないから、別にもう気にするなよ？  
わ、私も一応マリアに確認をとらなかつたのも原因だし」

「まったくナギは素直じゃないんだから」

「ま、そういうところもお嬢様らしいですけどね」

「う、うるさいぞ！二人とも！／＼／＼」

二人の言葉に顔を赤くするナギ。

「ま、まあとにかく、色々あったけど、これでやっと願いを叶えてやれる」

「え？願いですか？」

覚えのないことを言ったナギに関して、首をかしげる桂馬。

「なんだ。覚えてないのか？」



「一体なんのことでしょうか？」

「仕方ないですよ、お嬢様。状態が状態でしたし……」

「それもそうか」

何かを思い出しながら話している二人に対して話がわからずまったくついていけない桂馬の姿がそこにあった。

「桂馬君は覚えていないでしょうが、なんでも意識を失う直前、仕事がほしいと……」

「……言われてみればそんなことを呟いていたような」

目をつぶりながら桂馬は思い出すように呟く。

「というわけで、私はお前……桂馬に恩がある。だからそれも踏まえたくえでだ。」

……私の……この三千院ナギの執事をやってみないか？」

「執事……？」

その言葉を聞いた瞬間、すごく懐かしい感じが頭の中に響いた。

「？どうしたのだ？嫌だったか？」

「いえ、そういうわけでは。ただ、なんだか懐かしい感じがして」

「懐かしい感じですか？」

ハヤテが質問をする。

「ええ。なんだかとても懐かしい感じが」

窓の方を見てなんだか懐かしむようにしている桂馬。

「懐かしむのは後にしてとりあえずは私の質問に答えてくれないか？」

「あ、そうですね、ごめんなさい」

一言置いてナギをまつすぐ見つめながら桂馬は口を動かす。

「僕でよろしければ、その仕事お引きします！ナギさん……いや、ナギお嬢様！」

「うむ！これからもよろしくな、桂馬！」

「はい！」

張り切った声で返事をした桂馬は多分人生でこれほどなかったであろう輝かしい顔をしていた。それはきつと仕事をくれたナギへの感謝の意味も込めてであろう。

「桂馬さん、これからは執事同士、よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします、ハヤテ君！」

二人は熱く握手を交わした。

「桂馬君、これからよろしくお願いしますね」

「マリアさん……こちらこそ！」

そう言ってマリアとも挨拶を交わした。

三千院家に新たなる執事がやってきた。名前は御剣桂馬。ちよつぴりが会わないほど不幸で天然でもいざというときには頼りになる18歳の青年である。

第3話 知らない天井って言葉を一度は使ってみたい(後書き)

「桂馬と」

「作者の」

「不幸な執事の通信!!」

「ってタイトル長くないですか？」

「大丈夫だよ、今度から略してふこしつ!!って呼んでもらうつもりだから」

「まあ、それで読者の皆さんが納得するならいいですけど……」

「このコーナーでは読者さんからの質問等や色々なものを紹介していくコーナーです」

「ラジオで言うお便りコーナーみたいなものですか？」

「そういうこと。というわけで、質問等をお待ちしております。作者が駄目だ、と思ったもの以外ならOKですので」

「もちろん感想等もお待ちしておりますよ」

「それではまた次回!!」

「……って全然通信じゃないじゃん」

本当に感想等、お待ちしております！

**第4話 先輩ってなんだか響きがいい(前書き)**

なんとかGW中に載せられました！

今回は気分がよかったので早く出来上がりました。

ではどうぞ！

#### 第4話 先輩ってなんだか響きがいい

「よし、サイズはピッタリみたいだ……」

三千院家のとある一室。その部屋で一人の青年が朝早くに鏡の前で服に着替えていた。

「なんだかこうして自分を見ると新鮮な感じですね……さてとそろそろ時間だし、リビングに向かうとしますかな」

そう言つて部屋から出て行った青年は御剣桂馬。新しく三千院ナギの執事になった人である。

#### 三千院家リビング

「あら桂馬君、おはようございます」

「あ、マリアさん。おはございます」

桂馬が部屋から出てリビングにつくと、マリアがいた。どつちやら何か掃除をしているようだ。

「マリアさん起きるの早いですね」

「そついつ桂馬君こそ、早起きですわ」

今の時間は5時45分。普通なら結構な早起きである。

「それはまあ、慣れてしまいましたから……」

「慣れてって恐ろしいものですね」

頭をかきながら苦笑いでしゃべる桂馬に対してマリアも少し苦笑いで答える。

「それにしても桂馬君。執事服似合ってますよ」

「え、本当ですか？」

「ええ。とつても」

「あ、ありがとうございます！」

( 服着て似合ってるって言われたの久しぶりだな。今まではお前が着るとなんか普通って言われたからな )

桂馬は心の中で呟きながら素直に喜んだ。

「桂馬さん」

「あ、ハヤテ君」

マリアと話し終わるとハヤテがリビングにやってきた。

「まさかこんなに早く起きてるとは思っていなかったですよ」



「なんだか目が覚めてしまったね」

「でもそれならこっちもやりやすいです」

「そうですね、執事の仕事は朝早くしなければなりませんから。

……では私はこれで。桂馬君、頑張ってくださいね」

「はい、期待しといてください」

桂馬がそういつとマリアはニッコリと微笑み、そのまま行ってしまった。

「というわけで早速執事の仕事を桂馬さんにはやってもらいます」

「はい、わかりました。ところで執事の仕事ってどんなことをするんですか？」

そういつとハヤテは手に持っていた紙をテーブルの机いっぱいに広げた。

「……あの、これは一体……」

桂馬が驚きながらテーブルの上にある地図を人差し指で指している。それはそうだいきなりこんなでかい地図を出されたら普通の人間は驚くだろう。

「これは、三千院家のお屋敷の見取り図です」

「こ、これが……でかすぎませんか？」

「そうですねけど……でももう慣れました」

ハヤテがきっぱりと答える。

「……そうですか」

それ以上、桂馬は口にすることはできなかった。

「……で、どこを掃除すればいいんですか？」

「えっと……全部です」

「……」

突然わけのわからないことを言い始めたハヤテに何も言い返せなくなってしまうた。

「僕も最初は驚きました」

「それは誰もが最初は驚くと思いますよ……でとりあえず廊下からやればいいですか？」

桂馬が目の前にある廊下を見ながらハヤテに質問する。

「そうですね、ではそっちをお願いしますね。僕はとりあえずこっち側をやるので」

「わかりました。では」

そういって桂馬は掃除用具一式を持って行った。

「……行きましたね。では僕も始めなければ。桂馬さんよりも早く終わらせないといけませんね。先輩としての立場が」

そこでハヤテは突然しゃべるのを止めた。

「先輩か……。そうだ、僕、先輩なんだ……。なんだかいい響きだな」  
胸に手を当ててハヤテはなんだか嬉しそうな気持ちでいっぱいであった。

「おい、なに気持ち悪い表情してやがるんだ？」

「だって、先輩って響きが……。ってタマー！？」

思考を中断して聞こえてきた方を見るとそこには、三千院家で飼われている猫のタマがいた。

「いや、猫じゃなくてトラだから。原作で散々言ったのに……。ってそんなことは長江にでも捨てて……。って」

何故長江なのか理由がわからないがそこはあえてスルーしておこう。

「……いつからそこにいた？／／／」

「お前が、そっか、僕先輩なんだ、ってところから。それにしてもさっきの顔……。ぷぷっ」

「忘れるー！ー！ー！」

「ぶぎゃー!？」

タマが笑った瞬間、ハヤテは顔を赤くしながらお約束回し蹴りを披露した。

「どうだ、忘れたか？」

「いてて……まったく容赦ねえな。ま、忘れてやるよー(へへへ、後でネットでスレ作ってみんなにばらしてやるぜ!!)」

なんと悪どい猫である。

「ちなみに今のが上辺だけの謝りだったら……そのときは」

「そ、そのときは？」

恐る恐るタマが聞く。

「お前をスターリンのごとく粛清せざるをえないので、注意してくださいね」

「イ、イエッサー……」

笑顔でその言葉を口にするハヤテに、YESとしか頷けなかったタマ。優しいやつほど怒らせると怖いというのがこれがその例だろう。

「そういえば、なんでお前がここに？」

「いや、なんだか新しい執事が入ったって聞いてよ、見に来たけどいなかったから……」

「そういえばタマはまだあつてなかったっけ」

「ま、いいか。こうなったら直接会いに行ってくるか」

「いいけど……喋るなよ。桂馬さん驚くだろうし……」

「わかってるよー。んじゃ、いつも通り、お嬢のために頑張ってくれや」

そう言うとタマは桂馬が掃除している方向に向かって走っていった。

「……なんか信用できないな……。……やっぱり気になる、早く終わらせてできるだけ桂馬さんの所に急ごう」

いつもの三倍のペースでモップを動かし始めたハヤテであった。

### 執事長の部屋

「……マリア、今なんと言った？」

「ですからナギが新しい執事を雇うと……」

ここは三千院家の執事長の部屋。そこで二人の男女が話しあっていた。一人はマリア。三千院家のメイドというかさつき桂馬と話していた人。

そしてもう一人の男はクラウド。三千院家の執事長を務めているものだ。しかし原作でもアニメでもなかなか出番が与えられないキャラである。

「なかなか余計だぞ!!」

「誰に言ってるんです?」

天井に叫ぶクラウドを見て首をかしげるマリア。

「で、さきほどの話に戻るとしよう。……雇う?新しい執事を?」

「ええ。そうですよ」

「お嬢様には悪いが、それは無理だな」

「まあ、答えはわかっていますけど……」

どうやらクラウドの言うことを予測済みだったのか別段驚きもしないでマリアは呟いた。

「でも、見ず知らずのナギを助けたんですよ?」

「うぐつ。確かにそれには感謝している……だがそれとこれとは話は別だ!」

手を大きく開いて宣言するクラウド。

「ちなみに、どんな男なのだ、その御剣桂馬という男は?」

「ええつと、そうですねえ」

人差し指をほつぺたに当てながら何と言おうか、と考えているマリ  
アの姿はなんともかわいらしい。

「……時速134kmで暴走する車に走って追いついて、車と一緒に  
にそのまま電柱柱にぶつかっても怪我の一つもしなかったりする  
つても頑丈な男の子ですわ」

「……」

目の前でマリアが言っていることに関して驚きのあまり声が出なく  
なったクラウド。

しかし思考が戻ったのか、すぐさま口を縦に開いた。

「マリアよ……それはどこのサイ 人だ？」

「いえ、一応人間ですけど……」

クラウドの質問に対して困ったように苦笑いに答えるマリア。

「というかまず134kmも出している車に走って追いつくとか、  
まず世界記録狙えるではないか。ボル も余裕で抜かせるぞ」

「クラウドさん、そのネタ、読者の皆様ももう飽きているのであん  
まり使わないほうがよろしいかと……」

「そ、そんなこんしんのネタだったのに……」

頭を下にがつくりと下げて落ち込んだクラウドであった。

「ちなみに今度世界陸上がやるのでそのときは是非見てくださいね」

「勝手に宣伝していいものなのかそれは？」

まあ、大丈夫でしょ。

「とにかくうちにはただでさえ頑丈な執事がいるのだ！これ以上新しい執事はいらない！第一執事は二人もいららないのだ！」

「でも咲夜さんは執事が二人いますよね？」

「そ、それはまあ、人それぞれということではないかな？」

「じゃあ、うちも大丈夫ですね」

「……なあ、マリアよ、もしかして私をいじめてないか？」

「いじめてなんてしてないですよ」

「そうか、それならいいんだが……とにかく、私は例えお嬢様が言おうと今度は領かないぞ」

「そうですか……」

そう言って困った顔になるマリア。しかし何かを思いついたようなしぐさを見せると、クラウドに向かって話し出した。

「じゃあ、テストをさせましょう」



「テスト？」

「はい。それでそのテストを受けて合格したら執事として認めてもらうというのはどうでしょうか？これならクラウスさんも桂馬君のことを知れると思うといいと思うんです」

「……もし私が認めず不合格だったら？」

「私が責任を持ってここから追い出します」

クラウスに言うマリアの顔は真剣そのものだった。今のマリアには冗談も通じないだろう。そういうオーラが漂っていた。

「（そこまで真剣になるかマリアよ。そこまで真剣にさせる御剣桂馬という男、興味がたぞ）……わかった、マリアよ。しかしテストの内容はこちらに任せていただく」

「それでいいです」

（どんなテストにしようか……）

（クラウスさんが考えるテストは碌なことではありませんが……。信じていますからね桂馬君……）

何だかいきなりかなりシリアス雰囲気になっているが、そんな頃、我らが主人公の桂馬はというと

「そういえば、小説の方どうしよう。そういえばここに住むことになるんだったら荷物取りに行かないと……期限はあさってだし……」

金ぴかガンダ 像を雑巾で拭きながら別のことに思考を費やしてい  
た。

#### 第4話 先輩ってなんだか響きがいい（後書き）

「おい、作者」

「あ、なんだナギか。どうしたの？怒った顔して」

「どうして私はでていないのだ？」

「それは君が寝てたからでしょ？」

「しかしだなメインヒロインである私が一回も出てこないとはどういうことだ。せめて寝ている表情がなんともかわいらしい、とかのシーンくらい書いてくれても良いだろうが！！」

「確かにそれはあるけど……。でも次はちゃんと出す予定だから。安心してよ」

「本当だろうな？」

「もちろんだとも……。僕が忘れてなければ（ボソッ）」

「おい、今なにか眩かなかったか？」

「次回は桂馬君が三千院家のテストを受けます。果たして桂馬君はテストを合格できるのでしょうか？」

「流したな……。私としては何としても合格してほしいけどな。それではまた次回なのだ！」

「感想等もお待ちしております!」

「ではまた次回!」

第5話 テスト、それは命をかける戦い 前編（前書き）

テストの内容が少し長くなりそうなので、前編と後編に分けることにしました。

勝つてに決めてしまいもうしわけございませぬ。

しかし、やっぱりキャラを書くのが難しい……。  
そんな僕の眩きとともにどうぞ！

## 第5話 テスト、それは命をかける戦い 前編

「ふう〜、これでとりあえず全部終わりましたね」

モップを片手に持ち、もう一の片手で額にでた汗をぬぐっているのは桂馬。

「というかその動作どこのお掃除のおばちゃんだよ。」

「それにしてもなんか凄いのばかりでしたね〜……金ぴかのコナ像と、ガンダ 像とか……さすが金持ちはやるのが違いますね

……」

そこは金持ち関係ないと思うが……。

「どうしましょうかね、これから……とりあえずハヤテ君に会わなければなりませんね……。しかしハヤテ君が早めに終わっている可能性を考えれば、ここまで来るかもしれせんし、ここはおとなしくしていきましょうかね?」

モップを安全なところに置く桂馬。そのまま借りた掃除用具一式もそこに置いた。

「しかし置物もそうでしたけど、本当に色々とありますね。特に驚いたのは部屋の数ですね。一体いくつあるんでしょうか?」

周りを見渡すと部屋のドアばかりである。

「こつこつという屋敷ってゲームとかだと何箇所か偽者のドアあったりするんですよね。」

ルイージンションでやられましたよ」

うんうんと一人で納得する。そうそうそこは作者も同感だ。あれのせいでお金が……。

「……少し覗いちゃってもいいですかね？」

誰もいないが一応声にしたかったのだろう。わかる気持ちは大いにわかる。

「作者さんにわかっていただいても仕方ないと思うんですが……いいですよ？大丈夫ですよ。少しくらい」

その知的好奇心で、今までどれくらいの主人公たちが倒れていったことが……。。

「た、確かに……。でも誰も倒れていったと聞いただけで、退くわけにはいかないですよー！」

そんな熱い展開になりそうなことを桂馬が呟いていたとき、後ろから忍び寄るものがいた。

( やっと思つけたぜ……。それにしても広すぎだったっつもの )

三千院家のマスコット？キャラクターのタマである。

( なんて疑問系なんだよ……。まあ、それよりも……。 )

タマの目の前にはどうしようかと迷っている桂馬の姿。

(どんなやつか……とりあえずネコみたいによるのが一番だな)

「にゃ〜」

「ん？後ろからなんだかネコみたいなネコではないような声が」

後ろを振り返る桂馬。そこには尻尾をひらひらと左右に動かしているタマの姿。

「……………」

(あ、あれ？失敗しちゃったか？)

突然黙った桂馬に、少し動揺してしまうタマ。しかしそれは一瞬で杞憂に終わる。

「うわあ〜、可愛いネコです」

目をキラキラさせながらタマの頭をなでる。

「やっぱり凄いですね、三千院家って。ペットまで桁違いですね。ここまででかいネコがいるなんて……………」

(なんだ、こいつ。お嬢達と同じタチか？まあ、いいか。早速ハヤテの時のように動物が喋らないっていう夢をぶち壊してやるぜ！！)

ここまで来るとただの悪役である。でも確か夢を壊さないんじゃないかなかったつけ？

(へっ！！俺が壊したくないのは少女の夢だ。少年の夢なんてむし



る壊してえよ)

壊すなよ。

「よしよし。いやあ、可愛いな。本当に。しかしあなたからはなんだか不穏なオーラを感じますね。もしかしたらこれから何かあるかもしれないよ？気をつけてくださいね」

まるで太陽のような笑顔をタマに向ける桂馬。しかしそんなのは無意味だということは今すぐ知ることになるだろう。タマはそんなことを考えながら、

「ねっから年中不幸まみれの奴にそんなこと言われたくねえよ」

堂々と桂馬に向かって言い出した。

「何がオーラだよ、むしろお前から特有のオーラでてるぞ。ベジ―もびっくりだよ」

一瞬の沈黙。

(……さすがにいいすぎたか?)

さすがに言い過ぎたのかなんだか桂馬が黙っていることに心配になってくる。

タマはうつむいている桂馬の顔を見つめた。すると、

「……やっぱり三千院家って凄いですね……まさか動物を話せるように教育しているなんて……」

こんなことを言い始めた。

「お、おい。驚かねえのか？俺が喋ってること……」

「まあ最初は少しびびくりしましたけど、でも三千院家って考えれば全て説明がつくのかなと思ひまして……」

(確かに……)

桂馬が言ったことに、凄く同感しているタマ。確かに三千院家の人はなんだか普通とは違う。

「だから別段驚きませんでした。なんかリアクションすればよかったですか？」

「いや、それだとなんだか俺がかawaiiそうな奴と思われるからやめてくれ」

「そうですか。では改めてこれからもよろしくお願いしますね」

先ほどと同じように笑顔を向けていた桂馬にさすがのタマも諦めたように、

「……おう」

と返すだけだった。

「タマ……!!」

そんなときであった。可愛いピンク色の三角巾をつけて走ってきた

ハヤテが来た。

「あっ、ハヤテ君。とりあえず掃除終わったんですけど、どうすればいいですか？」

「あ、終わってましたか。じゃあしばらくそこにいてください。僕はそここのトラとお話があるので」

「トラ？これはネコじゃないですか？」

（おいおい、俺はまさかのコレ扱いですか？）

心の中で泣くタマ。

「でも確かにトラといわれればトラですね……しかし凄いですよね、タマ、でしたっけ？」

「え、何がですか？」

桂馬がタマを評価するところに疑問を感じたハヤテは思わず聞き返していた。

「だって……」

（やめろ、桂馬！それをハヤテに話したら俺は……俺はスターリンのごとく粛清されちまう！）

必死の抵抗で桂馬をジロジロと睨み付ける。そのタマの視線に気付いたのか、桂馬はタマの方を振り返りニコツと笑顔で返した。

(ほつ。あの様子だと大丈夫そうだな)

一気に安堵感に襲われたタマだったがそれは一瞬にして変わることになる。

「喋らせるように動物に教育するなんてすごいじゃないですか!」

(おいぃー!なに言っちゃってるんだあいつ!?!さっきの笑顔ってそういつこと!?)

「ほう〜……そうですか。それは確かにすごいですよね!。僕も驚きました……」

「ですよね。そうですね。しかしさすが三千院家、やることが違いますよ〜」

「そうですね……あ、僕そういえばタマに少し用があったんだ……すみません少しタマを借りますね」

「借りるも何も、大丈夫ですけど……用って?」

「ああ、用と言ってもすぐに終わりますよ、だって少しお話するだけですから」

(お話してるところ強調しやがったー!?!どんなお話する気だよ、あいつ!?)

笑顔で話しているハヤテだが明らかに黒い邪悪なオーラが見える。

「少しそこで待っていてください」

「わかりました」

桂馬にそう言ったハヤテはそのままタマのところまで歩いてくる。

「タマ……」

「な、なんだよハヤテ。なにか用があるんだって、俺に」

「ああ、とりあえずあそこの部屋で話しましょうか、色々と」

ハヤテが指をさしたのは、他のドアより少しでかいドアがある部屋だった。

「い、いや〜じらすなよ。俺たちの仲だろ〜」

「そうですね、僕達の仲ですよ。だったらわかりますよね？」

笑顔で返してくるハヤテにタマはもう何も言えなくなってしまった。そしてそのまま部屋へと引きずりこむ。

「ま、待ってくれハヤテ！」

「待て、って言って通用するのは二次元の中の話だよ、タマ？」

「い、いや。そういうことじゃなくてだな」

「さてとそれじゃあ約束通り、おはなし肅清しましょうか」

そうして扉はバタンツ、と大きな音をだし閉じた。

「にゃあぁー……！！！」

その後まもなくしてトラの、いやネコの悲鳴が聞こえたという。

「？なんででしょうか今の声？」

そこにいざなつた張本人はその場でのほほんとしていた。

「それにしても凄いですね、桂馬さん、僕でも結構時間かかったのにこんなに早く終わらせるなんて」

「こづついの慣れてるので。でもまあ今までやってきたよりかは断然に広いところでしたので、少々手こずりました……」

ハヤテがタマに色々してから数十分後、もはや原型がなくなったタマを見てびっくりしながら、ハヤテと一緒にリビングに向かっていく。

「それにしても、タマは大丈夫でしょうか？なんだかモザイクかかっているんですが……」

後ろを振り返る。そこにはなんだかトラどころかネコの原型をなくしたタマの姿があった。

「大丈夫ですよ。タマはああ見えて結構しぶとい奴なので」

「それならいいかな」

「いいわけないだろ！？大体なあ」

反論しなければならぬ、そう思ったタマはなんとか原型を取り戻し、すぐさまハヤテに向かって反論しようとする。しかし、

「何か言ったか、タマ？」

めちゃくちゃ怖い顔で言うハヤテがそれを許さなかった。

「……いえ、なんでもないです」

「そうですか」

「……一体何をしたんですかハヤテ君は？」

「別に。ただのお話ですよ」

「……そうですか」

これ以上聞いても多分何も言わないだろうと感じた桂馬はもう聞かないことにした。

「ってあれマリアさんじゃないですか？ハヤテ君」

「あれ、本当だ。しかもクラウドさんまでいる」

ちょうどリビングが見えたところでマリアとクラウドの姿を見つけた。

「あの、あの隣にいる老人は？」

「あ、あの人はクラウドさんと言って執事長です」

「執事長ですか、ではちゃんと挨拶しなければ」

そんなことを話しているうちにリビングについた。

「あらハヤテ君に桂馬君。もう終わったんですか、掃除は？」

「はい、桂馬さんが予想以上に早くて……」

「いやあ、なんだかやっていたらいつの間にか終わってて」

（なんですか、その自然スキルは）

出会って一日だが、桂馬という人間をだんだんとわかってきたマリアだった。

「そうですね、それなら執事としては上出来ですね」

「あ、ありがとうございます……！」

嬉しそうに頭を下げる桂馬。

「ふんっ、まったく掃除ができたからといっていちいち喜んでいては執事の仕事は勤まりませんな」



「え、あ、すみません……」

「いいじゃないですかクラウドさん、初めてなんだし」

「そこまで言う必要はないんじゃないでしょうか？」

「いや、大体掃除なんて子供の頃からやっていること、当たり前のことだ」

「そ、そうですね。さすがに浮かれすぎちゃいましたかね。褒められたものが久しぶりだったもので……」

（（褒められることが久しぶりって一体人生だよ））

三人が同時に思ったことであつた。

「そういえば、まだクラウドさんに挨拶してませんでしたね。御剣桂馬です。よろしくお願いします！！」

「ふむ、まあ挨拶だけは上出来ものですね。だが

まだそれでは執事とは言えなませんな」

「そうなんですか……」

（いや、掃除の出来でもう充分なのでは？）

ハヤテは先ほどの桂馬が掃除していたところをみる。すみからすみまで綺麗で、そのレベルはもはやこの小説では表現できないほどだ

った。

「いいかな、御剣桂馬。一流の執事とはすなわち、力や頭のよさなども重要だが、なにより大事なのは主を常に守ることである!」

「!？」

「マリアに聞いたが、君はサイ 人らしいな」

「いや、サ ヤ人ではないですけど……」

「ならばまだ君には執事になる資格はある……」

「あの、マリアさん、執事になるためには イヤ人でなければならぬいんですか？」

「いえ、それはただクラウドさんがつけた設定です。それにそんなとんでもない設定があるんです。すでにハヤテ君は執事失格ですね」

「そうですよ。そこのところはどうなんですか？クラウドさん」

ハヤテの質問に対するクラウドの返答は……、

「それは、お嬢様も言っていたではないか、お前は変身をあと二回残している……」

「それはお嬢様が言ったでたらめな設定ですよ！しかも僕地球人ですし……」

結論、ドラゴンボー の設定だったらなんでもいいのだ。

「まあ、それはともかく、クラウドさん」

「わかっている、マリアよ。御剣桂馬！」

「は、はい！」

「君にはこれから執事になるテストを仕方なくしてもらおう」

「テスト……ですか？」

「そうだ。そしてそのテストに落ちたら……お前はここに出て行くことになる」

「!?!」

「だがもし、そのテストに受かることができれば、まあ、執事になることを許してやつてもいい。ちなみにこれはマリアが提案してくれたのだ。マリアに感謝することだな。私だったらすぐに追い出しているところだ」

桂馬はクラウドの話が終わったと同時にマリアの方に向く。

「そうなんですか？マリアさん？」

「そうですね。私、桂馬君にはナギの執事になってもらいたいんです。最近ナギはあんなに元気になったのに、また落ち込んでいる姿はもうみたくないので。それに桂馬君自体もほっとけないんです」

「マリアさん……」

「そうですね、桂馬さん。出会ってすぐ別れなんていやですよ。せつかく同じ執事としての仲間ができたし」

「ハヤテ君……」

マリアとハヤテの言葉は桂馬の心に刻みつくように入っていく。

(そうだ……僕は恩をかえさなきゃならないんだ。ナギお嬢様に。そしてマリアさんに。みんなの期待のためにも……僕は!!)

「わかりました。クラウドさん。そのテスト受けましょう!!」

「うむ、威勢だけはいいですなあ……」

(それにほっとしてしまうと)

(多分僕みたいに……)

( (犯罪にはしってしまうのではないかと思うと……) )

実際にはこんな思いもあったりするが、桂馬は知らない。

「さて、クラウドさん……そのテストとやらはどんな内容ですか？」

「まあ待ちたまえ。少し準備がかかるのでな。先に行って準備しているよ。お楽しみはそこだということで」

「分かりました」

そう言ってクラウドは部屋から出て行った。

「僕の時みたいロボットと戦ったりするんでしょうか？」

「さあ、私にも分かりませんが、多分何かしらのものはあるでしょうね……」

（何かしらってなんですか！？ 凄く気になりますけど）

そんな感じでテストの内容が気になりながらもしばらくリビングにいとクラウドがやってきた。桂馬たちはクラウドに連れられて、ある部屋に向かった。

「私が寝ている間に色々あったんだな」

「はい。それはもう色々……」

ここは三千院家のある部屋。そこでナギが久しぶりにこの小説内で声を発した。

「それはお前のせいではないか」

次は気をつけます、ほんとに。

「まあ、それならよいがな」

「お嬢様一体誰と会話を？」

「ハヤテにはまだ早い。気にしないのが身のためだ」

「はあ、そうですね」

「それよりもここで何のテストをするというのだ」

ナギがキヨロキヨロと可愛げに辺りをこころ見回しながら呟く「この部屋は他の部屋と違って少し広いのが特徴だ。」

「さて、御剣桂馬君。ここで君には執事勝負をしてもらおう」

「執事勝負ですか？」

「そうだ。執事勝負とはまあ、名前の通り執事の仕事を競ってもらおうことだ」

「でもクラウス、どこにも相手がいらないではないか？」

確かにナギが言う通り、この部屋には五人を除いて誰もいなかった。

「ふっ、もう来ますよ」

「フン、遅くナリマしたネ！」

いきなりどこからか声が聞こえたと思うと、そいつは窓ガラスを破ってやってきた。

「な、なんてやつだ」

「というか誰がこのガラスを修理するんでしょうね」

マリアのそんな思いを無視するかのように、全身白い服の男は喋りだした。

「おマエが俺のシケン相手力。ナンダカ弱そうなヤツだな！」

「状況から察するに、僕の試験相手みたいですね」

（なんだか喋り口調からして色々ある方だけど……でも負けるつもりはない！！テストには絶対に受からなきゃいけないんだ！お嬢様たちの恩を返すためにも！）

心の中で絶対の決意を表した桂馬は目の前に向かって叫ぶ。

「御剣桂馬、行きます！！」

「なあ、ハヤテ……」

「なんですか、お嬢様？」

「これはいつからこんなに熱く燃える少年ジャ プに載っているよ

うなものになっただんだけ？」

「最初っからこんな感じでは？」

「……それもそうだな」

（ ）それで済ませていいのでしょうか？（ ）



第5話 テスト、それは命をかける戦い 前編（後書き）

どうでしたでしょうか？ドラゴンボー ネット多すぎですね（笑）

しかし他のパロが思いつかない……考えてはいるんですが。なかなか表現が難しく……。

そんなわけで次回も頑張りたいと思います！！

感想等もいつでもお待ちしておりますので、どんどん書きちゃってください！

さ、最近感想がないからって寂しいわけじゃないんだからねっ！！

それではまた次回でお会いしましょう！！

第6話 テスト、それは命をかける戦い 後編(前書き)

今回時間かけすぎたー！ー！！

遅れてしまいもうしわけございませんー！！

なんとということだ。しかも中間試験まで迫ってきている……。なるべく速くどうにかしないと……。

そんな作者のあせりとともに、どつぞ……。。

## 第6話 テスト、それは命をかける戦い 後編

前回のあらすじい〜。

不幸な青年、御剣桂馬はなんやかんやで執事試験を受けることになった。

「ってあらずじ早すぎですよ!!せめてPCで見る人には三行に見えるようにしないと。」

小説のイメージ悪いですよ!」

大丈夫だって。ハヤテのごとく読んでる人達大体わかるから。

「それにしては無理矢理のような……」

「オ〜い、なにオレ無視シて話進めテルンだ!」

わ〜わ〜と喋っているのは、白い服を特徴とした服を着ている金髪の男。

「というかあいつの話口調どうにかならんのか?」

「多分無理じゃないかと」

ナギの読者も同感と思う質問に、マリアは困った顔で答えた。

「というか彼は誰なんでしょう？」

「よくぞ聞いてくれた綾崎ハヤテ！」

「いや、まだ疑問の段階で質問はしてませんが……」

「彼こそは、自称フランス貴族で自称！究極の執事である、ロート・リークである！！」

「なんか、名前になんり適当さを感じるんですが……」

いい加減な名前にもほどがある。

「いや、あなたがつけたんですよ？」

「というか自称つけすぎだろ……どんなナルシストだ」

「でもかなりこの作品には特徴のあるキャラですよ」

「とにかく！！」

ハヤテとナギの話しをさえぎるようにクラウドが大きく声を出す。

「御剣桂馬、君にはこのロートと執事勝負をしてもらう」

「あの、すみません、執事勝負とはなんでしょう？」

「まあ、簡単に言えば執事の仕事をして競いあっていくものだ」

「なるほど……」

「つまりハヤテの時の試験とあんま変わらないってことだろ？」

「その通りです、お嬢様」

「つまり僕の時のようにロボットが……」

ハヤテの頭に浮かぶのはあのときの介護ロボ『エイト』との戦い。

(っっていうかロボットと戦闘って……)

疑問に思いながらも、この空気ではつつこむことも出来ない桂馬だった。

「とにかく早速はじめる、両者とも用意はいいですか？」

「ふん！オレはいつでもダイ丈夫だぜ！！」

ロートは自分を指しながらその大きくてうっとしい声で叫んだ。

「うっとしいは余計ダ！」

一方の桂馬は、

「僕はいつでも大丈夫ですよ！！」

「桂馬！なにはともあれ絶対に負けるなよ！！」

「わかりましたナギお嬢様」

お嬢様に応援されながらいきこんでいた。

「さてそれでは……試験開始!!」

こうして、御剣桂馬 vs ロート・リークの執事試験が始まった。

### 第一試験、料理作り

「執事たるもの、常に主の満足する料理を作れるように心がけるとが大事だ。」

というわけで、二人には料理を作っていたかく。ちなみに指定はない。

でははじめ!!」

「ふん、とっておきのフランスリョウリをミセテやるぜ!! 覚悟シヤがれ!!」

「ええ、僕も負けるつもりはありませんよ!!」

そうお互いに言っつて、二人はお互いにキッチンに入り、料理を始める。

「フランス料理か……最近食べてないから楽しみだな」

「そうですね、お嬢様。僕、フランス料理は見たことはあっても食べたことないから、なんだか楽しみですよ」

(桂馬君の命運がかかっている試験なのに、こんなのはほんと話していいのでしょうか?)

いつもの苦笑いのマリアをよそに時間は進み、そして両者の料理は完成した。

「さてそれでは最初はロートからいきましよう」

「はははッ、コレは勝ちをモラッタぜ！」

かなり勝ち誇った顔でテーブルに料理を置いた。

「なあ、ハヤテ……」

「なんですか、お嬢様……」

「なんだかものすごく変な臭いしないか？」

「はい、すごく。例えるならたまに畑とか通ると変なおいがするあの独特なおいですね」

（独特すぎてわからないのでは？）

作者はかなりわかる。

「じゃア、行クぜー！とりゃー！」

ロートは気合をいれて皿にかぶっている蓋を取った。

「」「」「」……「」「」「」

「ふふん、ドウダ！オレの最高ケツサクは！」

四人が目の前にしているのはなんだかもうこの世のものとは思えない、表現しにくいものだった。

「……あのロートさん」

「なんダ、貧ボウそうな顔した執事」

「貧乏そうなのはまあこの際いいですけど、これなんのフランス料理ですか？少なくともこんなある意味ノーベル賞並みの物体は見たことないんですが」

「なんだ、才前知らないノカ。コレはラタトウイユだ！」

「イヤイヤイヤー！こんなこの世でもっともおぞましいラタトウイユ見たことないですよ！」

「それには私も同感だー！」

ちなみにラタトウイユとはフランス南部プロヴァンス地方、ニースの野菜煮込み料理である。

もっと知りたい人はググってみよう！ちなみにレーのおいしいレストランでも出できたぞ！

「どこがおぞましいと言うのだー！どこからドウ見てもラタトウイユだロウー！」

「お前の目はどうかしているのか！？」



「まあ、ナギも人のことは言えませんが」

「私はこんなんよりもましだ!」

「さて……審査員たちは試食もしていないようですが、果たして結果は!?!」

クラウドに言われると三人はそれぞれ持っていたボードにペンで書き始める。

しかしすぐに書き終わったようで全員ボードを上げた。

ナギ、 - 1点。

マリア、 1点。

ハヤテ、 0点。

「……という結果になりました!続いては御剣けい」

「チョっつまてい!?!」

次にいこうとした瞬間そうはさせるかとロートは大声で叫んだ。

「なんだ、自称フランス貴族。早く次に行きたいんだが」

めんどくさそうにそれにナギが答えた。

「次に行くマエにイロイロとおかしいところがある!?!」

「どこにあるというのだ」

「まずお前にイロイロとイイたいわ！なんだヨ、-1点って！」

「マイナスはマイナスだ。それ以外の何者でもないだろ？」

「ソウイウ話をしてるンジヤねえよ！」

おい、クラウド！いいノカよ、マイナスって」

「……まあいいんでしょう。私はマイナスが駄目だとは言ってますんからな」

「……そんナ」

「さて、ようやく次にいける。

……それでは御剣桂馬！どうぞ！！」

キッチン入口についているのれんをどけて桂馬が皿を持ってきた。

「というか、いつからのれんなんてついてたんでしょう？」

「なん力俺が出テきた時ヨリかつこよくな？」

「うん、いいにおいだ……このにおいはまさか！？」

「ってなんかぼくたち無視されてますよ！？」

「ッていつか俺初登場でこのアツかい！？チョツとひどくなー！？」

「桂馬、お前……」

ふたに手を置く桂馬。

「そうです……この作品はチャーハンです!!」

蓋を取ると、キラリと中身がきらめく、そして湯気がでてい、なんか見ているだけで食いたくなる。ちなみによく昼とかで紹介されるグルメ特集でよく出るあれ的な感じで、

「作者説明長すぎですよ!? 確かにそうですけど! 確かにそんな感じに見えますけど!?!」

「おお、うまそうだから、早速食べてもいいか?」

「いいですよ。皆さんのために作ったものですから。自信はないですけど」

「これデ自信がナイのか」

「じゃあ早速……パクッ」

ナギが食べたのに続くようにしてロートも含む全員が食べていく。そして、その後に全員が口にしたのは、

「「「「「……うまい!!」「」「」「」

だった。

「っていつかつますぎだろ。そこら辺の高級レストランでできるやつよりもうまい……」

「僕もこんなうまいチャーハンは生まれて初めてです……」

「桂馬君、どうやってこんなおいしいチャーハンを？」

それぞれが感想を言っているさなか、マリアが少し興味本意で桂馬に質問した。

「えっと……特に何もしてませんよ」

「ウそつケ。完璧にナンカした口」

ロートが疑うようにして桂馬をジロツと見つめる。

「そんなこと言われましても……。ただ少し肉を節約するためにここは市販の魚肉ソーセージを使ったり、醤油に少し七味とうがらしを混ぜたりして少し辛みを強くしたりしただけですから……」

（色々してるじゃないですか……）

（なんていうか、桂馬君らしい料理の作り方ですね）

伊達に毎日死ぬ思いをしていたわけではない。

「とにかくかなりうまいことはわかった。というか完璧に味が私好みだ」

「そうですか？なんなら今度も作りましょうか？」

「うむ、そうしてくれると私も助かる」

「なんとお嬢様のお墨付きをもらいました！あのよっぽどでないとお褒めてくれないお嬢様が言いました！」

「おい、クラウス。次変なこと言ったらそのご自慢のひげがどうなるか知らんぞ？」

「うう……。さ、さて審査員の皆さん。得点をボードに」

先ほどと同じようにペンを持ち出し書いていく。

「どうやら終わったようですね……。それでは結果をどうぞ！！」

ナギ、53万点。

ハヤテ、10点。

マリア、10点。

「……という結果になりました。というわけで第一試験勝者は御剣桂馬となりました。

さて次の試験へと」

「だからチヨとマテい！！」

「なんだよ、まだ問題か？」

「問題才ありだよ！だからなんだよ53万って！完全にフリーの戦闘力ジャンー！！」

「ああ、いいじゃないか。『あの』フリー様と同じ戦闘力だぞ？料理もそれなりの戦闘力ということだ」

「いやいや、そうイウことじゃナクね！？なんだよ、料理の戦闘力つて！どンナ戦闘力だシ！しかもあのつてところ強調してルンじゃねエー！！」

「あのお嬢様、いくらなんでも少しやりすぎなのでは？」

「いや、そんなことはない。こんな明らかにギルバートと同じ位出番が少ないチヨイ役に慈悲など必要もないだろ」

「いや、まだチヨイ役と決まったわけでは……」

「といウかそんなコトよく本人ノ前でイエルよな」

改めて三千院ナギという子を知ったハヤテとロートであった。

「まアいい。要はこの勝負二勝てば、チヨイ役にナラナクてスムンだからなアー！！」

(……この人……出来る！！)

本能的に悟ったのか桂馬の背中が少しビクツとした。それからさまざまな試験を二人はくぐりぬけた。

## 第二試験、釣り勝負

「あのこれって執事に関係あるんですか？」

「当然だ」

「イヤぜってエいらねエだろ」

「ならばマリアを見てみる」

「「え？」」

「はぁ！..！」

二人が見るとマリアがヘラを釣っている姿が写った。

「メイドだって釣りをするのだ。執事が持っていては当然のこと」

「そういえばマリアさん釣りのときは性格変わりましたね」

「釣りするマリアは相変わらずすごいな.....」

「言ったでしょ、釣りはヘラに始まり、ヘラに終わると」

（.....言っていないと思うんですけど）

結果、マリアさんが圧倒的すぎたため二人辞退。

### 第三試合、ゲーム勝負

「おらオラ、くらエ！ゴムゴの..！」

「なんのっ！こっちは螺旋ですよ..！」

「なんだか聞いたことある技だな」

「今まさにジャン で活躍している人達ですね」

「とっつかなんだこのゲームは？」

「これはD ででたジャン オールスターズだ。知らないのか？」

「あゝ、あれですか、懐かしいですね……」

「私はあれだな、銀 の神 を使ってたな……」

「なんでですか？」

「なんでって……可愛いから」

（あゝ、なるほど……）

「あ、負けてしまいました」

「よっシャあ！！これで同点！！」

（………なんだか地味だな）

まあこんな感じで二人は試験を進め、最後の試験にすすんだ。

最終試験、 ????



「結局同点ですか……」

「くソっ！！同点かヨ」

「っていつかもつ最終試験かよ。作者飛ばしすぎだろ」

「まあお嬢様、仕方がないですよ。誰にだってめんどくさくなったらショートカットしたい気持ちはあるんですから」

「結局めんどくさくなっただけかよ」

結局そうです。

「よく二人ともここまで来ましたね……」

「クラウドさん……」

「クラウド」

「さすがにここまで私もやるとは思ってもいませんでしたよ。しかしこれで最後です」

「一体最後はどんな試合をするんだ？外に来ているからきつと外でしか出来ないものなのかな？」

（外でしか出来ないものってなんだろう？）

うんうんうんうんうんうんうんうんうんうん置いていくかのようにクラウドは話を進めていく。

「執事には、いかなる時でも主を危険から守ることが大事だ。要は強さだ。というわけで君達には決闘をしてみよう！」

「「!？」」

その瞬間、風が吹いた。

「なに、簡単なことだ。相手をノックアウトさせたほうが勝ちだ。ちなみに武器の使用はありだ。好きに使っていい」

(結局こういう展開になるんですね)

(こうでもしないと盛り上がり欠けるからだろ?)

「二人ともそこそそとメタな発言をしていないで、試合をみたらどうですか?もう始まりますよ?」

マリアの言葉の通り、二人はすでにそれぞれに持つ武器を構えていた。

ちなみにロートはサーベル。つまりレイピアだ。

そして桂馬は、木刀だった。

(なんで桂馬さんは木刀を?普通だったらここはサーベルのほうが……)

ハヤテには桂馬の真意がわからなかった。

「まさかお前ガココまでやるヤツダトは思ってイナかつタぜ。ここまデ俺に対抗してきたヤツは

オマエが初めテだ」

「僕もです。ロートさんは意外にも結構やるタイプでした」

「ふッ、それほどでも」

「ご自慢の長い金髪を右手でひらっと払うロート。」

「しかし、コレで最後だ。」

お前八俺二負ける。何故ならッ……」

言いかけながらロートは腰を低くする。

「……」

「それでは始め!!」

「俺は天才ダカラだ!!」

クラウドの合図とともに、その大きな掛け声とともに突っ込んでくるロート。

「は、速い!!」

二人が戦っているところから少しはなれたところからハヤテは言った。隣にいるナギとマリアも驚いている様子だった。

「……」

しかしそれを少し体をずらし軽がると桂馬はよける。

「へっ、やっぱりシこんクライじゃア駄目か!!」

言いながらロートは素早く回転し、横薙ぎにサーベルを払う。

「……………」

桂馬はそれが来るのがわかっていたように少し後ろにステップを踏むかのように下がる。

しかしロートはサーベルを突くようにして迫る。

「どうシタ!!お前の力はコンナものか!!」

「……………」

迫りながら叫ぶロート。しかしそれには一切の反応もしない桂馬。

(……………なんだ?なんか違和感が……………)

そんな桂馬を見て違和感を覚えたハヤテ。マリア、ナギは気付いていないようだ。

(……………とにかく試合を見ておこう……………)

ハヤテは考え事をやめて観戦することにした。

「おいおい、どうシタ!?まさか俺に恐れをなした力!」

「確かに少し怖い顔してますけど……………」

「なんデ顔なんだよ！？今の話二顔のキーワードナイだロ！」

「そうですね、すみません……」

「ったく、なんだカ気分がそがれるぜ。さっさと終わらせて執事になりてエのにヨ」

「……わかりました。早く決めましょう。僕もよけるのはそろそろ疲れました……」

「なに？」

そう言つてロートの突きを大きく後ろに下がりながら、避ける。

「なんだヨ。必殺ワザでもヤロウつてノカ？」

「いえ、そんな必殺技なんて……大それたものは持っていません……多分」

「多分力よ……でも早く終わらせるノハいいデだぜ。俺モそろそろ終わラせたかった」

腰を低くし、サーベルを右手に持ち、右手を上に構えるロート。

その目は完全に桂馬を捉えていた。その例えるならそれは獲物を狙う鷹の目。

「はははっ、利害一致つてことですかね……」

一方の桂馬も腰を低くし、木刀を腰に合わせる。そして柄を右手に持ち、左手は刃にかぶせるようにする。俗に言う、抜刀する構えだ。

こちらもロートをじっと見ている。

「な、なんか本当に少年誌っぽいバトルになってきたな……」

「ええ……」

ナギとマリアがそれぞれ口にする。実は内心二人ともドキドキしている。まあこんな試合誰でも見せられたら誰だってわくわくするであろっ。

(ロートさん凄い気迫だ……。なんだか本当にチヨイ役だけのやられキャラだと思ったけど……。)

でも桂馬さんもそれをもろともしていない冷静さだ……)

一方のハヤテは二人のことを観察しながら見つめている。

「……」

二人の間に沈黙が下りる。そして一瞬の風が吹くと同時に、

「っっ!!」

二人は駆け出していた。

(ロートさんの方が若干速い!!)

それは明らかにわかる差だった。ロートの方が桂馬よりも速かった。

(どうやら俺ノ勝ちだな!!速サじゃ圧倒的に俺ノほうが上だ!!)

この時、ロートは確信していた。自分にある絶対的な勝利を。

しかし、それは一瞬で変わることになる。何故なら、

（な、なんだ！？アイツ急に！？）

桂馬がいきなり速さを変えたからだ。

（どうやったらいきなり速くできるんだ！？）

ハヤテは自分でもびっくりくらいに驚いていた。

「おお！なんだか凄いなマリア！」

「そ、そうですね……」

ナギは子供みたいに目をキラキラと輝かせ、マリアは少し苦笑いになっっていた。

「くソっ！！」

いきなり速くしたためロートは動揺してしまった。

「行きますよ！！」

「っちくそ！！」

そのまま近づいた桂馬は木刀を抜きそして、

「はっ！！」

ロートに振った。そして見事にそれはロートに当たった。勝負がついた瞬間だった……。

「くソっ！まさかこの俺が負けるとは……」

悪態をつきながらロートはお腹をさする。どうやら打ち込まれたところが相当痛かったらしい。

「す、すみません……勢いで強くしてしまっ」

「……もうイイヨ別ニ。それに怪我したノだっ」て俺ノせいだ」  
体を起こしながらロートは桂馬に向かって言う。

「久しぶりに張り合いノアル奴だっ」夕。楽しかったヨ」

「そ、そうですか……」

「……また戦えるといいな……」



ロートは手を出してきた。俗にいう握手を望んでいる。

「……はい！」

桂馬も手をだしそれに答えた。いつの時代もこういうことは大事である。

握手が終わったあと桂馬は何か疑問に思ったのが、ロートにある質問をした。

「あのさっきのセリフなんですが……」

「ん？どうシタ？」

「さつきちゃんと日本語で話していませんでしたか？」

「！？い、イヤ、ま、まさか……そんなことありえねエヨ」

「でも明らかに」

「お、お前の幻聴ダヨ！俺はフランス人ダカラ！外国人って日本語覚えルの難しいカラ！  
だから絶対に幻聴！」

「そう、ですか？だったらそういうことにしますけど……」

「ソウだ。それでいい。それジャ！俺は負けたカラ潔く帰るコトにするヨ。」

次は絶対負けネエカラな！」

そう言ってロートは風の如く去っていった。

「あつ……行っちゃいました……」

「まったく、せつかくフランスまで送り返そうと思って飛行機用意したのに……とんだ無駄だったな」

文句を言いながら桂馬の隣にやってきたナギ。

「でもちゃんと用意していたんですね？」

「ま、まあそれはあんなチヨイ役の奴でも、一応頑張ったのだ。三千院家としてそれなりのことはしないとな／＼／」

そのときに桂馬の目に写っていたナギは、赤くなっていてなんだか可愛らしかった。

「はははっ、そうですね」

「な、何故笑うのだ！／＼／」

「いえ、お嬢様がとても素敵だなと思ってつい……」

「なんだか納得いかない理由だな……。まあいい。」

……御剣桂馬よ。改めて問うぞ？お前は私の私、三千院ナギの執事になるか？」

「……はい！これからもよろしくお願ひしますね、お嬢様！」

「うむ、これからもよろしくな！桂馬！」

そうして二人は同時に微笑んだ。

（お爺ちゃん……僕もうちよっただけ頑張ってみます！）

「マリアさんよかったですね」

「え、なんで私に？」

少し遠くのところで二人の様子を見ていたハヤテとマリア。

「だって桂馬さんを見ているときなんだか心配そうな顔していたので……」

（さすがハヤテ君、そういうんだか変なところで鋭いですわね）

「ま、まあそうですね。だって桂馬君が負けたりしたら彼、大変なことをしでかすのではないかと……」

「そこは、僕も否定できませんね」

「それに……ナギの悲しい顔も見たくありませんでしたから」

（……この人は本当にお嬢様のこと大事なんだな）

改めて執事としても人間としても感心したハヤテであった。

（……本当によかったです。これからもナギをよろしくお願いしま

すね、桂馬君)

マリアはほっとした表情をだしながらこちらに歩いてくる桂馬とナギを見つめていた。

「あれ、私……忘れられてない？」

「がうう（俺なんて出番すらねえ……）」

第6話 テスト、それは命をかける戦い 後編（後書き）

作者

「デビルと」

桂馬

「桂馬の」

「「ふこしつ通信!!」」

桂馬

「つてこれって……」

作者

「まあ前に決めた通り、やろうと思ってね……」

桂馬

「ああ、ありましたね、そんな企画」

作者

「さて、最初のふこしつなのにもうゲスト呼んじゃったりしてます  
」。

ではゲストの方、どうぞ！」

ロート

「ロート・リークだ。ヨロシク」

作者

「さて、早速ゲストの方に質問しちゃいますねー」

桂馬

「本当にいきなりですねー」

作者

「今回でた感想は？」

ロート

「正直言っテ、凄かったとしかイイようがない」

桂馬

「えっと、どんなところがですか？」

ロート

「何ッテ、全てにおいてサ」

桂馬

「そ、そうですね……（なんてコメントすればいいんですか……）」

作者

「ま、なにはともあれ結局は凄かったということだな」

桂馬

「適当にまとめてるし……。こんな調子の進みかたで大丈夫なんですか？」

作者

「大丈夫だ。問題」

ロート

「アルだろ」

作者

「お前に言われたくねえよ、自称フランス人」

ロート

「なんデ！？なんデ俺がツッコムとそんなコト言っただよ！しかも自称じゃねエって言っテルだろ！」

作者

「さてもう時間が来てしまいましたね……」

ロート

「無視かよ！メンドクサイと思った最終手段使うなよ！！」

桂馬

「しかも終わろうとしてますよ。なんだかんだで僕全然コメントしてないんですけど……」

作者

「この番組では質問や本編の感想等を募集しています。いつでも待っているのです、どしどし応募してくださいね！！」

桂馬

「というかこの番組不定期じゃ……」

作者

「そんなこと言わない！今回はいつもより駄文だと思われたのに付き合っていたいただいてありがとうございます！！これから精進して行きたいと思います。」

それでは次回も楽しみにしてください！  
お送りしたのは、作者ことデビルマンと」

桂馬

「えっと……小説の主人公、御剣桂馬と」

ロート

「……ゲストのロート・リーク」

作者

「でしたー!!」

桂馬・ロート

「……これ番組って言うのか?」

ナギ

「ちなみにハヤテ劇場版は8月27日(土)に公開だ!」

ハヤテ

「あのお嬢様、あんなに散々サンデーとかで告知してたのに何故こ  
こで?」

ナギ

「数少ない視聴者を取り入れるためだ」



ハヤテ

「そうですね……しかしどんな感じに仕上がっているんでしょうね」

ナギ

「この私にはわからんが、きっと公式の私には過酷な道が待っているであろう。もしかしたらマジカルデストロイが映画化されるまでの長い道筋が内容かもしれなっ！！」

ハヤテ

「それじゃあさらに視聴者いなくなっちゃいますよ！しかも公式も非公式もないですって！というか公式とかなんなんですか？」

ナギ

「公式はまあ、原作者が書いた私のことだよ」

ハヤテ

「じゃあ、僕もあれは公式ってことですか？」

ナギ

「そういうことだ。だがしかし安心しろ。内容はきつと公式の私から直接微弱な電波によってこの世界の私につながるはず！」

ハヤテ

「どこの中二病キャラですか……」

ナギ

「それにもし私たちがわからなくても作者が見にいけば全てわかることだろ？」

ハヤテ

「そうですね……しかし今年は作者は……」

ナギ

「ああ、受験だが、なんとしてでも行ってもらおう」

ハヤテ

「（作者さん、頑張ってください……）……それでは映画のことが気になるようでしたら今週号のサンデーか」

ナギ

「またはおとといでた単行本28巻の限定版を買おうとわかるぞ。では」

マリア

「次回も本当によろしくお願いしますね」

ハヤテ・ナギ

「「締めとられた……!」「」

**第7話 不幸という単語は本当に不幸者が使うべきセリフ（前書き）**

なんだかさくつと書けたので投稿します。

ちなみに作者は来週からテスト期間に入るので、執筆が遅れる可能性があります。

すみませんがよろしくお願いします！

では、どうぞ！

## 第7話 不幸という単語は本当に不幸者が使うべきセリフ

「まったく最近はろくな番組がやってないの……」

おんぼろアパートのとある一室。そこにせんべいを食べてテレビを見ながら横たわってるおばちゃんがいた。

「まったく……ってそういえば今日は007室の部屋の荷物期限今日だったな〜」

そういいながら重い腰を上げる。

「それにしてもあれほど言ったのに来ないとは……あの若造もバカなのかの？」

ま、私にはどうでもいいけど」

そのままおばちゃんはドアノブをそのまま開けようとする。

ピンポン……。。

「ん？誰かね？お客さん？こんなときにつたく……」。

はいはい、今ですよ」

めんどくさそうにドアノブに手を当てて、ドアを開ける。

すると視界いっぱい、黒服の男たちが出てきた。

「な、なんじゃー！ーこれは！どこのマフィアか！ー！ー！ー！」

あまりにも怖かったのでそのままおばちゃんは後ろに倒れてしまっ

た。

「あの……すみません、あなたがこのアパートの大家さんですか？」

「へっ……」

すると突然透き通るような声が聞こえた。女は下に向いていた顔を上に向けてとそこには顔立ちが綺麗なメイドさんがいた。というかマリアです。

「はあ、そうだけど……」

「あの、以前ここに御剣桂馬君という青年が住んでいませんでしたか？」

「そ、その青年なら確かにうちのアパートに住んでたけど……今はいないよ？それに今ちょうどその彼の荷物片付けたところだったんだけど……」

「ならちょうどよかったです……あのその荷物……うちに引き取ってもよろしいでしょうか？」

「別に良いけど……でもなんでそんなことするんだい？もしかして彼の知り合いか何かかい？」

「まあ、そんなところです……では荷物の件はこちらで。SP部隊の皆さん、お願いしますね」

「」「」「」「」「」

マリアが少し大きな声で言うとSP集団はまるで祭りにでえる男たちのように気合を入れて答えた。

（なんなんじゃまったく……でもまあ、やっかいごとが消えてよかったの。

つてせめてどこのものか聞いておかないと……）

「あのさ、あんたたちは何者なんだい？」

「私たちですか？私はマリアといいます。三千院家でメイドをしています。

そしてあちらの少し暑苦しい人達は三千院家のSPさん達です」

「へっ……三千院って……」

「あ、どうやらもう終わったようですね……ではこれで

呆けているおばちゃんを置いてマリア達は帰ってしまった。

「……そ、そうえばこれからドラマの再放送の時間じゃったの。見よう、見よう」と……」

現実逃避するかのようにおばちゃんは部屋に戻っていった。そんな朝の出来事だった。

三千院家、外

「うーん、今日もいい天気だな」

箒を掃きながら呟いているのは、御剣桂馬。三千院家の新しい執事である。

「……それにしても荷物のご事は助かりましたね……」

荷物のご事とはあのときあのオンボロアパートに置いていってしまつた桂馬の大切なものたちである。三日以内に消去されるといふことで昨日の執事試験の後、ナギに相談したら、任せろ、と言われた。後のことは冒頭を確認してね

「しかしこれで何とか小説のご事も何とかなるな」

「小説？」

「ええ、あともう少しで期限が……ってハヤテ君!？」

振り向くとそこには顔には貧乏と書いている少年綾崎ハヤテがいた。

「その紹介やめてくれませんか？」

「あの、もしかして今の聞いていました？」

「ええ、小説がどうこうですよね？」

「そうです……ま、いいかな。話しちゃっても」

そう言うと桂馬はハヤテに自分が小説を書いていることを話した。

「そうなんですか。へえ〜……………つてええー！？小説家！？」

「そ、そうですよ……………」

「しかもイチハラカズトって今大人気の小説家じゃないですか。たまにニュースでも紹介されてる」

「ただのラノベなんですけどね……………それにそんな有名ではないですよ。他の人と比べたら……………」

他の人が見てもわかるような落ち込みかたをする桂馬。彼の周りにはなんだか暗いオーラが出始めていた。

「な、なんかすみません……………このことはお嬢様やマリアさんは？」

「マリアさんには話しましたが、お嬢様はまだ……………」

「お嬢様は確かこの小説、一巻からのファンと言ってましたからね。多分話したら嬉しいがと思いますよ？」

「そうなんですか？原作者としては嬉しいんですけど……………あんまり人には話していけないことになっているので……………」

「そうですか……………」

しかしこれがひょんなことではれちゃったりして〜。



「とてつもないフラグを立てないでくださいよ……」

「桂馬君ー」

とハヤテと話していると、玄関の方からマリアがやってきた。

「桂馬君、少し頼みたいことがあるんですが……」

「ええ、いいですけど、頼みごととは？」

「それが今日はお客様が来るんですけど……ちょうど紅茶の葉っぱを切らしていて、それで買ってきてもらいたいですけど……」

「いいですよ」

「ではコレを……」

マリアは手に持っていた茶色いコートを手渡した。

「これって、あの高級のカシミアの……」

「あら、よくわかりましたね」

「まあ、手触りで大体は……ってハヤテ君？どうしたんですか、そんなに青ざめて……」

「いえ、そのコートを見るとあの日のことを思い出して……」

「あの日？」

ちなみにあの日はハヤテが始めて伊澄とであった日のことである。

「いえ、気にしないでください……」

「はぁ……そうですか」

ハヤテがそう言うので深くは追求しなかった。

「ところでいいんですか……こんな高い服を僕なんか……」

「ええ、全然大丈夫ですよ。だって服がボロボロになるわけじゃないんですし……」

「紅茶を買うのに、そんなことになるわけがないじゃないですか」

「一名それよりももっとひどいことになった奴がいます。」

「それって僕のことですか……」

「でも注意してくださいね？桂馬君からはハヤテ君と同じ雰囲気があります」

「大丈夫ですよ。最近は何だかいいことが続いていますし」

「でも注意したほうが身のためですよ？」

「わかりました。では行ってきますね」

そう言うと桂馬は門のほうに向かって走っていった。

「……ハヤテ君、不安ですね」

「ええ、とてつもなく不安です……」

残された二人はそんなことを口走りながら、自分の仕事に戻っていた。

「なんであそこまであの二人は心配しているんでしょうね、まあでも用心に越したことはないから、注意しておきましょう」

あれから桂馬はマリアからもらったメモ帳を頼りに店へと向かっていった。

「でも、最近作品タイトル名が忘れ去られているように不幸がおきていないからなあ」

そんなことを呟いたときだった。

「やべえ！カシミアについたら絶対に落ちないといわれているものが含まれているペンキが……！」

桂馬の目の前にいきなりペンキが現れた。

（なんかドラクエ風ですね……ってそれよりも避けないと!?!）

なんとか全部をかわす。

「大丈夫か？あんちゃん？」

「え、ええ、大丈夫ですよ」

（や、やばい……早速何かが起こる予兆ですね、これは）

それからどンドンと歩いていくことにエスカレーターしていった。

「や、やばい！？カシミアについたら絶対に落ちないタイプのラーメンの汁が！」

「うわっ！？」

「うわー、危ないー！（棒）そんなところにいたらカシミアについたら絶対に落ちないタイプの墨を吐くイカちゃんが乗っている白いトラックがー」（棒）」

「危な！？っていうかイカちゃんって絶対あなたイ 娘見てましたよね！？それとなんで棒読み！？」

「おい青年！そんなところにいたらカシミアについたら絶対に爆発するわがサークルが作ったプラスチック爆弾がー！ー！」

「なんでももの作ってるんですか！しかもなんでカシミアオンリーなんですか！？何かカシミアの物に恨みでもあるんですか！？」

「うわー危険すぎる（笑）カシミアについたらなんだかんだで存在そのものが消えてしまう悪役ドクターとかが持ってそうな三角フラスコから緑の煙が出ている液体がー（笑）」

「（笑）じゃないですよ！もはや笑いどころでは済まされませんよ！？しかもなんだかんだって絶対にめんどくさくなっただけですよね！しかも説明長いし！」

（やばい……これ以上歩道歩いていたら、いろんな意味で生きていけない……）

これ以上は無理だとわかった桂馬は、ちょうど近くにあった人気の少ない公園から店に行くことにした。

「ふう、さすがにここは大丈夫でしょう」

辺りを見回して危険がないかどうか見渡す。

（久しぶりの不幸っぷりですね……最近来てなかった分がきたのでしょうか？）

少し疲れたのか、どつてり感を出す。

（それにしてもものが渴いたな……お金なら400円持ってるし、飲み物でも買おうかな？ちようどあそこにちようど自動販売機があるし……）

そう思って、自販機を見るとその前には和服をきている少女がいた。

（綺麗な髪だな……）

と人知れず見とれている。よく見てみるとどうやら何かで悩んでいる様子だった。

（何か困りごとでしょうか？だったら見過ごせないな）

「あの、何を悩んでいるんですか？」

「え？私ですか？」

「というか今ここにはあたしかいませんが……」

「そうですね。周りを見ていませんでしたから」

「そうですね、じゃあ周りが気にならないほど悩むこととは？よければ教えてください。」  
「力になれるかもしれません」

「えつとですね……その」

「はい」

「この機械壊れてるんです」

「へっ？」

「この前この機械には御札は駄目と言われたのでコレを入れたのですが……」

そう言ってその少女が取り出したのは、なんとクレジットカードだった。

「この機械はこのカードをかたくなに拒むんです……どうしたらいいんでしょうか？」

（僕も予想外のこと色々どうしたらいいのか……。とりあえずは言いたいことを言おう）

「あの、クレジットカードでは入らないので、そこはお札を入れるんですよ」

「お札ですか？そうですね。ありがとっいびいます……あっ」

（？どうしたのかな？）

いきなり少女が手を口に当てたので、桂馬は少し気になった。

「大変です……知らない人と会話してはいけないのと友人に言われたのに、会話をしています」

「そ、それは、すみません……」

（最初に言ってくださいよ）

心のなかで呟く桂馬。

「でも大丈夫。きっとその友人は優しいのできっと許してくれます

……」

「それはよかったです……」

ゆっくりと話した少女に少しほっとした桂馬であった。

「あの少し聞きたいことがあるのですが……」

「はい、何でしょうか？」

「私はどこにいくのでしょうか？」

「それは……なかなか難しい質問ですね」

「すみません、では少し簡単にしますね。……では友人の家はどこでしょっつ……」



(あの、さつきとハードルが変わってないんですが……)

でもそれでも放っておくことは桂馬は出来なかった。

「ではその友人の家を一緒に探しまよう。家の特徴とかは大体わかりますか？」

「ええ、大体は……」

桂馬の質問に少女はこくと頷きながら言った。

「では行きましようか、えっと……」

「伊澄です。鷺ノ宮伊澄と言います」

「伊澄さんですね。僕の名前は御剣桂馬といいます。好きによ呼んでもらってかまいません」

「ではよろしくお願ひしますね、桂馬さん」

「はい、よろしくお願ひします」

そう言っ彼らは自己紹介を済ませたあと、公園を後にした。

これが御剣桂馬と鷺ノ宮伊澄の出会いだった。

第7話 不幸という単語は本当に不幸者が使うべきセリフ（後書き）

ついに天然の子伊澄を登場させることが出来ました。しかし伊澄はいいキャラですね。

今度はうまくいけたら来週には。駄目でも六月の最初のほうには投稿したいと思います。

感想や評価等はいつでも受けていますので、皆さんぜひとも書いてみてください。

ではまた次回！

p.s: けいおん!のほう遅れて申し訳ございません!ただいま作っているので、もう少しお待ちください……。

今月中には何とか投稿するので……。

## 第8話 何事も原点って大事（前書き）

今月の目標は、5話更新を目指したいです。

それではそんな作者の目標提示とともにどうぞ！

## 第8話 何事も原点って大事

「なあ、ナギ」

「ん？どうした？咲。何かまた変なことでも思いついたのか？」

「またってなんや！それじゃまるでウチがいつも変なこと考えてる変人みたいやんか！」

「？違ったっけ？」

「違うわ！」

桂馬と伊澄が出会っている頃。三千院邸には一人のお客様が着ていた。

彼女の名前は愛沢咲夜<sup>あいさわさくや</sup>。愛沢家の長女でナギとは小さい頃からの親友である。

「でなんなのだ？一体……」

「伊澄さん、まだかな、と想着てな」

「伊澄のことか。それなら今日にはつくんじゃないか？」

「……毎度毎度思うけど、伊澄さんのあのスキルはどうすれば治るんかな？」

「多分一生かけても治らないと思う」

(いくらなんでも一生は言いすぎなのでは?)

マリアは心の中で呟くが、よくよく考えてみれば今までの伊澄の迷子率は異常をきたしているの、マリアはナギに対してツッコミすることが出来なかった。

「遅いといえば、ナギの新しい執事も遅いな。」

確か買い物行っただけやろ?」

「ああ、桂馬の場合は別の意味で遅くなっている」

「別の意味?」

「多分、あつたら嫌でもわかると思うぞ?」

「それやったら楽しみにしようさかい。どんなお笑い執事なのか楽しみやな。」

「お笑い執事ってなんだよ」

(確かに別の意味では、巻き込まれてるかもしれないねえ……)

桂馬のことだ、きつとんでもないことに巻き込まれているに違いない、とマリアは勝手に推測する。

(伊澄さんと会ってる可能性も考えられなくないですが、そしたら……生きて返ってくるでしょうか?)

マリアはハヤテと伊澄が初めてあった日を思い出す。

帰ってきたときには体がボロボロの状態、コートも見るも無残な

お粗末状態だった。まあ、そのときの止めはナギが刺したけど。

「うぐっ」

「ん？どないしたん、ナギ」

「いや、今、何か胸に刺さるようなことを言われた気が……」

「漫画の読みすぎで、幻聴でも聞こえたんちゃう？」

「そんなことがあるわけないだろ！」

(せめて、体だけは無事に帰ってこれるといいですねえ……あと、紅茶の葉っぱは忘れないでほしいですね)

窓越しに空を見上げながら、マリアは心のなかで呟いた。

「なあ、ナギ、ウチの登場についてツツコンだらあかんの？」

「別に言ってもいいが、今更もういいだろ」

「……せやな」

そんな会話が三千院家で行われていた。

「すみません……ついてきてもらってしまつて」

「いえいえ、全然大丈夫ですよ」

その頃、伊澄と桂馬は公園を出発していた。

（それにしてもなんかこの子はうっとりしていますね。天然さんなのかな？）

伊澄と話して改めてわかったことである。今まで会ってきた人の中でかなり特殊な人と、桂馬は心の奥底で呟く。

「いや、奥底つてそこまで深く考えてませんからね？」

「あの、なにか言いましたか？」

「へっ、い、いやなんでもないですよ」

「そうですか……あの……」

「なんですか？」

「これからどこに行くの？」

「そうですねえ、とりあえずしらみつぶしに色々歩いてみましょう」

「わかりました」

（しかし、伊澄さんのお友達ってどんな人なんだろう？もしかしたらお嬢様だったりして！）

そのもしかしてなのだが、もちろん桂馬はそんなことに気付かない。というかまず聞けばいいのに。

（……ってそうだ、伊澄さんにお友達の名前を聞けば、万事解決じゃないですか！）

やっと気付いたか。普通の人はずそこ気付くよね。

（では早速伊澄さんに聞かなくては）

そのために考えることをやめて、伊澄のほうに視線を向ける。

「あの、伊澄さん……ってあれ!？」

視線の先には誰もいない地面だった。つまり、消えたのである。

（え？なんで？だってさっきまで話してて）

いきなり消えた伊澄に動揺を隠せない桂馬。



「ってまずは考えるより探さなくては！」

そう言うと同時に桂馬は走った。しかしお忘れではなからう？今日が彼にとつて不幸な日のことを……。そんな感じで桂馬が動いているのに対して伊澄はというと、

「ここは、どこでしょう……」

どろちやってきたかは知らないが、ビルの屋上にいた。

「まったくどこに行ってしまったんでしょうか？」

辺りをキョロキョロと見渡しても、伊澄の姿はどこにもない。

(さっきまで隣にいたのに……瞬間移動でも使ったんですか、伊澄さんは?)

「おい、危ないぞ！」

「え？」

頭の中で考え事をしているときいきなり声が聞こえた。

「カシミアのコートについたら絶対に落ちない幻の黄金水が！」

「うわっ！」

目の前までやってきた黄金のようにきらめく水を、とんできたバケツを拾って中に入れる。  
なんとか回避に成功した。

「お、すまねえな。それは今日の番組で紹介されるアフリカ奥地にある幻の泉のところから取ってきた水なんだよ」

「そ、そうですか、次はちゃんとしてまっておくように気をつけてくださいね？」

(忘れてた……。今日は僕の久しぶりの不幸日……。伊澄さんを見つめる前に僕が倒れてしまう可能性が……)

これからのことを考えると、顔を青ざめる桂馬。その先には、バツドエンドしかない。

(……でも伊澄さんを見捨てるわけにはいかないです)

桂馬は決意した。この不幸と戦うことを……。

「助けを求める人がいる限り、僕はどこにだって駆けつけます！」  
かっこいいこと言っている間に、またもや何かが迫ってくる。

「さあ、どこかかでもかかってきなさい！おあーーーーー！！！」

伊澄を見つけるため、桂馬はひたすら前に走る。

「また、戻ってきてしまいました……」

あれから伊澄は動くごとにいるんなところに転々として、今はまた最初の公園に戻ってきてしまった。

「……さすがに桂馬さんも私のことを探す気にはならないでしょうね」

空を見上げる伊澄。先ほどからだいぶ時間が経っており、空を赤く染まっていた。夕暮れ時である。

(私はいつも人を巻き込んで迷惑をかけるのですね……)

自分のことを案じてくれる人にいつも迷惑をかけてしまう……。間接的にも。そのことが伊澄にとっては許せないことだった。と考え事をしていたときだった。

「こ、ここにいたんですね……」

「え、桂馬さん？」

少し弱々しい声が後ろから聞こえてきたので振り向いて見ると、そこには、コートも体もボロボロの桂馬がいた。

「どうしたんですか、その傷！」

「えっと、話せばかなり長くなるのですが……とりあえず、色々あつてこうなりました」

あはは、と頭をかきながら、桂馬は答えた。

「しかしやっぱり最初のところに戻ってくるのって正解でしたね。やっぱり原点に帰るって大事なんですね」

「……なんで」

「？」

「なんで……私を見つけにきたんですか？」

伊澄は少し不安そうに聞いた。

「何があつたかはわかりませんが、その傷は私を見つけてる間に負つたんですよね？」

「あゝ、これですか、たいした怪我じゃないですよ、これくらい」

「でも……」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

その証拠を見せるようにピンピン体を動かす仕草をする。

「……服は救いようがないですね、これは」

自分のコートがこんな風になるなんて……、と桂馬は続くように咳いた。

（完全にマリアさんに怒られるな、これは。まあ自分の責任だししようがないですけどね……）

心の中で、数時間後の未来予想図を建てながら、桂馬は伊澄を見る。見ると落ち込んでいるような顔をしていた。

「あの、伊澄さん……さっきどうして見つけにきたかって聞きましたよね？」

「はい……」

「それは……僕が伊澄さんに約束したからです」

桂馬は伊澄をしっかりと見つめながら話す。

「僕は、約束した人は必ず最後までその約束を果たすと決めているので。」

それに……」

一言間をおく。

「助けを求めている人がいるのであれば、僕は例えどこにいようと助けにいけます。」

ですから伊澄さん、僕はあなたを助けます。それが、僕が決めている掟ルルです」

(……不思議な人)

話している桂馬を見て伊澄はそんなことを思った。  
なんだか自分にはない決意を持った人。話しているとなんだか心が温かくなっていった。

(……これほど私も自分の強い決意があれば、みんなを救えるのかしら)

力を手にしたときから考えていたこと。それはナギたちのこと。  
自分もこんな決意がほしい。そう伊澄は思った。

「ありがとうございます、桂馬さん」

「へっ、い、いえ、こちらこそ……」

改めて気付かせてくれたことに関して伊澄は感謝した。

「さてと、伊澄さんも見つかったことだし、聞いてみますか？」

「？」

何を、と首をかしげながら伊澄は思った。

「その、伊澄さんが探しているお友達の家、そのお友達の名前を教えてくださいませんか？」

「あ、そんなことでしたら最初に聞いてくれればいいのに……」

「すみません、うっかり聞くの忘れてました」

「本当に不思議な方ですね。名前は三千い」

と伊澄が言っている途中であった。

「貴様あ！そこで何をしている！」

突然黒服の男達が現れ、怒鳴った。

（なんですか、このいかにも怪しそうな集団は……）

（（なんだ、このいかにも怪しい青年は……というか我々はこんなやり取りを先日も行ったような……）（

心の中で両者は思っていることを口にする。印象は……両者とも最悪のようだ。

「とにかく、我々のお嬢様を返してもらってください。変な青年！」

「変な青年ってなんですか！っていうかお嬢様って……」

振り返って伊隅を見るとなんだかあたふたしている。どうやら、争っているのを止めようとしているのだが、どうすれば止められるかわからないので、こういう状態になっているのだろう。

（もしかして……かなりいいところのお嬢様？）

確かに雰囲気を見てもお嬢様っぽい感じがする、と桂馬は最初に会ったときそう思った。来ている和服もなんだか普通の和服とは違っ

て、輝いていたため、そうは思ったが、人探しを優先させるため、そんな考えは捨てた。

(……っていうことは、僕って今とんでもないことをしているような……)

まあ彼らからみれば、突然いなくなった自分のお嬢様を探しに言ったら知らない男性……しかも服はボロボロで貧乏そうな顔をしている人と話をしている所を見れば、変と言われてもしょうがない。

「このカシミアがよく切れるタイプの日本刀で貴様を切り刻んでやる！」

(……ってなんかかなり物騒な展開になってきてますけど!?)

「あ、あの……皆さん……これは……」

「お嬢様、大丈夫です。今あなたをそこの変質者からお助けします！」

「だ、だから違うんです……あう……」

もはや暴走した鷺ノ宮執事は主である伊隅の言葉も聞こえないようだ。

(伊澄さんの言葉を聞かなくなった以上、なんとしてでも誤解を僕が解かなければ、僕の命がない!)

「あ、あの、これは違うんです……僕は、伊澄さんのお友達の間所を」



「誘拐犯の言い訳みたいなきことをぬかしてえ！奴に聞き耳を立てるな！全員突撃——！！」

「「「うおおおお——！！」「」」

（やっぱりそうなりますよね……）

ため息交じりに呟いた桂馬。

（もしかしたら、これで小説終了なんてことも……）

まあ、元々キャラかぶりな人間だから君がいなくなったところでこの物語は進む。

（……イヤイヤイヤ！そんなことがあつてたまるものですか！もしそんなことになるなら、生き残つてやる！）

目の前にやつてくる敵を見据える。

「いきますよー！うおおおお——！！」

そう言つて、桂馬は無謀ながらも、黒服執事集団に突撃していった……。  
そして、それから彼らの誤解が解け、戦いが終わるまで、数時間は有したという……。

ちなみに……、

「け、桂馬君……大丈夫ですか？」

「え、ええ……なんとか……それより、紅茶……ちゃんと買ってきました」

（もう、今日は……休みたいです……）

（何があったかは……ひと目でわかりますわね……今日はゆっくりさせましょうか……）

心の中で嘆きつつも、約束を忘れていなかった桂馬……それでこそ執事だ！

「ってウチの出番最初だけやないか……！」

「私もだぞ……！」

「まあまあ、二人とも。そんなに怒らずに……！」

「「なんかそれ伊澄（さん）に言われるとむかつく……！」」

ここにも嘆いている少女二人がいた。

## 第8話 何事も原点って大事（後書き）

どうでしたでしょうか？

伊澄と咲夜の喋り方……これでよかったでしょうか？一応確かめたのですが……。

違うときは言ってください。

今回はついに咲夜も登場しました。しかし出番が少なかったです……

……。ナギとハヤテも……。

しかし次回はちゃんと出るので、大丈夫です。でないと僕、彼らに消されちゃうので（笑）

感想、質問等受け付けております！

ではまた次回！

第9話 そうえば最近レンタル屋行ってない自分がある(前書き)

どうも、こんばんは！

今回は少し手こずりましたよ。色々な意味でね……。

タイトル通り、今回はあの子の登場です。

ではごっせー！

## 第9話 そうえば最近レンタル屋行ってない自分がある

「ふう〜、それにしても昨日はひどい目に遭いました……」

そう少しため息を交わらせながら、屋敷の廊下を歩いている桂馬がそこにはいた。

「しかし……まさか伊澄さんがお嬢様のお友達だったとは」

その事実を知ったのは、昨日のこと。それは伊澄の口から告げられた。

「でもまあ、お嬢様のお友達ですから、わからなくもない……ですかね」

そついいながら目の前のドアを開ける。

（昨日はまともにお客様に挨拶すらできなかった……気を改めていくとしますか！）

「皆さん、おはようございます！」

「おお、桂馬か。大丈夫か体は？」

「ええ、なんとか生還してきました」

ドアを開けるとそこにはサンデーを読んでいるナギがいた。

「しかし昨日はお客様が来ていたというのに、ろくに挨拶も出来ず

に、申し訳ございませんでした」

「仕方がないだろう、まさかあんなことになるとは誰も予想つかなかったし。」

「今度はあんまり無茶するなよ」

「はい、気をつけます！」

それにしてもお嬢様は優しいですね」

「こ、これくらい普通だろ」

「でも普通のことと考えられるのは、素晴らしいことだと思いますが……」

「えい、この話は終わり！わかったな！」

「え、ええ、わかりました」

渋々了解した桂馬だった。

「そういえば、マリアさん達はどこに？」

ここで疑問に思ったのか、桂馬が口に出した。確かにいつものリビングにはナギしかおらず、ハヤテやマリアといったいつものメンツの姿がない。

「ああ、あの二人は今玄関にいるぞ？多分今日来た客でも迎えにいつてるんじゃないか？」

「お客様ですか……あ、そういえば、伊澄さんと咲夜さんは？」

咲夜さんは挨拶しただけでろくに会話をしていなかったので、少し会いたいのですが」

「伊澄は私の部屋で寝てる。咲は多分もうそろそろここに来るはず……」

ナギの言葉が終わると共にドアがバンツ！と勢いよく開く。桂馬が少し驚いてそこを見ると、そこには咲夜がいた。

「よっ、ナギ〜おはよ〜さん。

新しい執事はんもおはような」

「あ、おはようございます」

「まったく、少しは静かにドアを開けられないのか？」

「だって私ここでやっと本格的に登場やで？最初の印象が強くないときつといずれ読者の皆さんから忘れられるだけやないか！」

「いやお前原作だと一応準レギュラーだからな？」

ま、そんなことはどうでもええ、といいながら咲夜は桂馬のところまで来た。

「昨日はろくに会話も出来なかったけど、まあ改めてこれからよろしゅうや〜」

「はい、改めてよろしくお願いしますね。咲夜さん」

「で改めて聞きたいんやけど……あんだ、スキルは何をもっとるん

「？」

「え？スキルですか？」

いきなりそんなこと言われても思いつかない。しかしここは質問されているので答えなければいけないと思った桂馬は少し気楽に質問に対して答えた。

「……特にありません」

「ええい！」

「うわっ！何するんですか！」

まあ順当な答えを言おうとした桂馬に対し、咲夜はハリセンで叩こうとした。

なんとか反応し、桂馬は避けた。

それにしてもなんとというところの反応であろうか。

「何にもあらへんやと？自分執事を何もわかちやあらへんな」

「一体どういう意味ですか？」

「自分、執事に大切なのはなんだと思う？」

「ええそつですねえ……」

あごに手を当てて考える桂馬。ハタから見れば知的の人に見える。

「主を大切にする心とか、主を守る強さ、とかですか？」



「はあ〜……なつてないな〜、自分」

まともだと思われる桂馬の執事論に、咲夜は呆れたように呟く。

「違うんですか？」

「まったく違う。全然！

確かにそれも執事にとっては大事や。けどなあ、もっと大事なことがあるんや！」

「な、なんですって……」

驚いた表情をする桂馬をよそに咲夜は話を進める。

ちなみにナギは興味がないのか、再びサンデーに目を通していた。

「執事にもっとも大切なスキル、それは……」

「そ、それは？」

「……」

「……」

（余計に長い沈黙だな）

ナギの言っていることはもっともである。

「笑いや！」

「……へ？笑いですか？」

「そうや！常に主を笑わす。それこそが、執事になる資格。もうこれが抜けたら何にも残らないそこら辺の通行人Aと一緒にや！！」

「そ、そんなに！？……なるほど、そういうことだったんですね」

「いや、全然違うからな」

本当のことのように受け止めている桂馬に、ナギは突っ込んだ。

「そうや。幸いまだアンタなら間に合う。これから目指そう！お笑い執事の称号を！」

「はい、わかりました！これからよろしくお願いします、咲夜さん……いえ、師匠！」

「それでええで！桂馬！それじゃ、まずはあの太陽に向かって走って！」

「はい、分かりました！」

「ええ返事や！というわけで、ナギ、今日は帰るわ。また今度」

「なるわけないだろー！！！」

流れを断ち切るようにしてナギが咲夜目掛けてキックをした。当たったところは腰だったので、腰に手を当てて苦痛の表情を浮かべていた。

「何するんや、ナギ！せつかくアンタのところの執事がお笑い執事の第一歩を踏もうとしているところなのに！」

「なにがせつかくだ！大体勝手にお笑いの道に引き釣りこむな！それとなんなのだ、お笑い執事とは！」

「芸人の執事みたいなもんや」

「そのまんますぎるだろ！」

「ええやないかい別に。」

あ、もしかしてナギ、寂しいんか？何やそれやったら言ってくれればいいのに……。

じゃああの借金執事も入れて、四人でお笑いの道目指そうやないか！

「だからなんでそうなる！？寂しくなんてないから！それから勝手にハヤテを巻き込むな！」

「お嬢様……寂しかったのですか。くそつ、執事ともあるうものが何故お嬢様の気持ちに気付いてあげられなかったんだ！情けないです！自分が！」

「いや、桂馬も乗らなくていいから！それから寂しくないからな！？そんなに思いつめなくていいから！」

私が言うところのツンデレのように聞こえてしまうのか？」

だって中の人がそういう役柄をよくするから、とかは言わないでお願い。

「とにかくそんなものは不要だ」

「不要は言い過ぎちゃう？しかしさすが私のパートナーやな。蹴りだけじゃ飽き足らず、言葉でも攻めるとは……」

「誰もが思うことを口にただけだろ」

「だからと言って、これからも手を抜くのはいかんで？」

「ああ、これからも存分に手を抜かないでおくからな」

「それは楽しみや」

(それは楽しんでいいんですか？)

と3人が楽しく談笑をしていたところで扉が開く。

「お嬢様連れてきましたよ？」

つて桂馬さん、起きましたか？おはようございます」

「あ、ハヤテ君、おはようございます。

すみません、今日は……」

「いえいえ、気にしないでくださいよ」

そんなことはないと、手を前にして横に振るハヤテ。

「それより、誰か連れてきたんですか？」

「ええ、お客様です」

そう言うとハヤテは横にどいた。  
するとドアから出てきたのは、黒髪の少年だった。

(どんな子なんでしょうか?)

と考えていると、

「なあ、お前が新しい執事か？」

「ええそうですけど」

「ふう〜ん……」

そう言ってジロジロ顔などをしばらく見たあと、少年は呟いた。

「なあ、借金執事」

「はい、なんでしょうか？」

(借金執事って……)

ハヤテのあだ名にツッコみたい桂馬だがここはあえて見送る。

「こいつお前より貧乏そうだな。顔になんかそう出てるし。

しかもなんだかいかにもおせっかいかきそうな奴だから早死にする  
気がする」

(そ、そんな……出会ってすぐの人にこんなこと言われるなんて…  
…)

心臓をロン　又スにでも刺されたような心の痛みが、桂馬を襲う。

「あ、あの……ワタル君、何も本人がいないところで言わなくても……確かにそう見えますが」

（どう見えるってことは、ハヤテ君、僕のことそう思ってたってことですか？）

「いいじゃねえか、別に。本人がいるいない関係ないだろ。」

しかもそんなんで落ちこんでいるようじゃ、執事は務まらないぜ」

「た、確かにそうですね……」

「け、桂馬さん！大丈夫ですか、何か、めちゃくちゃ顔色悪いですけど……」

「だ、大丈夫ですよ！全然そんなことはありませんよ！？」

年下の男の子に完璧に自分の悪いところ突かれたからって全然落ち込んでませんからね！」

（（（思ったより落ち込んでるんですね（だな）……）））

その場にいた全員が思ったことである。

「で、ハヤテ君、この子はいったいどちら様ですか？」

「はい、この人は橘ワタル君と言って、お嬢様の許婚です」

「なるほど、許婚ですか……ってえ？許婚？」

「ええ、あの許婚です」

「……なるほど……」

(実際にそんなラブコメ小説や漫画の中でしか見たことのない設定がまさか本当にあるとは……)

心の中ではこんなことを思っている桂馬なのでした。

(でもまあ、お嬢様くらいのお金持ちならそんな話だってあるでしょうし、これくらい普通のことなんでしょうかね、こっちの世界では)

これくらいが普通らしいですよ。

「橘ワタル君……ですね、僕の名前は御剣桂馬と言います。よろしくお願いしますね」

「おう、まあよろしく。あと、それと許婚の話はなかったことにしてな。許婚なんてこっちから願いさげだ」

「それはこっちのセリフだ!」

「えっと……これはどういう……」

「つまりや、お互い許婚なんて認めてないってことや」

「なるほど、よくある勝手に決められたパターンのやつですね」

「パターンはともかくそういうことになりますね」

ナギとワタルが2人して争ってる中、咲夜、ハヤテ、桂馬の三人は平和に話し合っていた。

「でもあれを見ていると全然仲が悪いとかのようには見えませんか  
え」

「でしょ？あれだけ仲がいいのにどうしてお嬢様達は……」

「自分ら、それ本気で言ってるんなら一度眼科の病院に行くことを  
勧めるで」

「なんだかそれ、前にマリアさんにも言われましたよ」

「ということはマリアさんも同じことを思ったってことやな……っ  
てそんなことよりもあの2人止めなくてええの？」

「そうですね、そろそろ止めないと、せっかく掃除した部屋がまた  
汚くなるので……」

と言ってハヤテは2人を止めに入る。

「2人共、そこまでにしてください。これ以上暴れたらマリアさん  
に怒られますよ？」

「うう………わかったハヤテ」

「ワタル君はサキさんに怒られますよ？」



「……わかったよ」

とりあえず暴れるのはやめた二人。そのまま近くにあったソファーに2人は座った。

「あの……サキさんって誰ですか？」

「サキさんはワタルのメイドさんや。そうえば来てないな。今日は留守番？」

「いいえ、先程、マリアさんと一緒にお風呂に行きました」

「なるほどな」

「あのちよつと待つてください……ワタル君、もしかしてお金持ちなんですか？」

「いやそついうわけじゃないんやけどな……一応レンタルビデオ店の店長してるで」

「一応ってなんだよ、ちゃんとやってるって」

「店長！？でもお金持ちじゃないってどういう……」

「それはオレが話すよ」

と咲夜と桂馬が話していたのを聞いていたワタルは、お金持ちでない理由について話し始めた。

「なるほど……つまり色々あって、今はチェーン店もなくなり、新

宿の本店を残すのみとなったと……。で許婚は三千院の財産を頼るための口実だったということですね」

「そうだ。でもオレはそれだけじゃ終わらない。これからさ。三千院なんて目じゃねえ財産を作つてやる！婿養子なんて……。まっぴらごめんだ！」

（この子……。すごいいい子ですね。自分の持つ信念がある。こつこつ子は将来うまくいくんですよね……）

「……ワタル君、頑張ってくださいね。僕は応援してますよ」

ワタルの信念に共感したのか、桂馬は笑顔でそう答える。

「……お、おう／＼／」

そんな笑顔に対しワタルは男ながらも一瞬ドキッとしてしまうのであった。

「まあ、許婚の件に関してはこつちからも願ひ下げだからな。それに私には……。ハヤテがいるし／＼／」

「え、僕がいるとなんですか？」

「……ハヤテのバカ！」

「ええ！？なんですか、お嬢様！」

「うっさい、バーカ！バーカ！」

「納得のいく理由を――！！」

「ハヤテ君は気付かないのでしょうか？」

「さあな、あいつ生粋の天然さんやからな」

「それに原作主人公だし……ってそうだ、御剣？だっけ？」

「桂馬でかまいませんよ」

「じゃあ桂馬、入会しとくか？一応レンタルするとき色々と楽だけど……」

「いいんですか？よければお願いします。僕最近レンタル屋行ってなかったんで……」

「おうわかった。後でやつとくよ」

「仲ええな、2人共」

と各々が話しをしていたところに扉が開く。もちろん咲夜のようにパンツとか強く開いてない。

「なんでウチを持ち上げんねんっ！」

「何に対して怒ってるの咲夜？」

「それは……って伊澄さんかいな。今起きたんか？」

「ええ、昨日はよく眠れてね」

「おお、伊澄か。おはよう」

「伊澄さんおはようございます」

「おはようナギ、ハヤテ様」

ナギ、ハヤテの挨拶に答えた伊澄は桂馬の方に振り向いた。

「桂馬さん、昨日はありがとうございました……」

「いえいえ、これからも頼ってくれてかまいませんからね」

「ありがとうございます」

と伊澄と会話していると桂馬は隣にいるワタルが顔が段々赤くなっているのを疑問に思ったので、ワタルに聞いてみた。

「あの……ワタル君？どうしたんですか？そんなに顔を赤く……」

「あ、赤くなってるなんかねえよ！／＼／」

「でもどうみても……」

「大丈夫だったの！／＼／」

「あの、ワタル君、本当に大丈夫なの？」

伊澄が心配な顔をしながらワタルに聞く。

「ぜ、全然大丈夫さ！熱とかまつたくないからさ、僕！」

「ぼ、僕？」

いきなり一人称が変わったワタルを見て、かなり疑問に残っている桂馬。

「まったく伊澄と会うといつもこうだ……」

「お嬢様、あれはもしかして……」

「ああ、ワタルは伊澄のことが好きなんだよ」

「ですよー」

予想通りで安心した桂馬であった。

「ちなみに皆さんは気付いていますよね？」

「当たり前や。あんなあからさまに好意むき出しなら誰やって気付くわ」

「僕もです。いやあ、でも伊澄さんも伊澄さんですよ。あれだけ出してれば気付くでしょうに……」

（（（なんだかハヤテ（君）には言われたくないような気がする……）））

そう思った3人だった。

ちなみに、

「ふう〜、相変わらずいいお風呂ですね」

「そうですね〜」

お風呂で満足なサキさんとマリアさんがいた。

「ってというか私達が今回のオチですか……」

「それにしても、なんという中途半端なオチなんでしょう……」

第9話 そういえば最近レンタル屋行ってない自分がある(後書き)

ついにワタル君とサキさんの登場です！

いや〜、やっと出てくれたって感じですね。

ワタル君達は個人的には好きなキャラなので出したかったんですよ。

サキさんに関しては今後の活躍に期待してください！

今回のオチ……見るに耐えないですね〜。

そんな作者ですが、今後も頑張りますよ!!

次回はとあるところに桂馬君が潜入!?!しちゃうかもしれません!

(どっちだよ……)

ではまた次回で!

第10話 潜入っていい響きだ 前編（前書き）

ついに10話来ました。

なんだかここまであつと間な気がします。

さて、今回は桂馬君があそこに潜入します、ってもう分かりますかね。

それではどうぞー！



## 第10話 潜入っていい響きだ 前編

1月10日(月)朝

「は〜。それにしてもお嬢が学校に行ってるってと屋敷の中も静かだな」

三千院家の庭で岩に座りながら喋っているのはタマ。三千院家のマスコットの存在(嘘だけど)である。

「嘘じゃねえよ!!--」

「ていうかいきなりトラが喋るなよ……」

少しジト目でタマを見ながら言うのは綾崎ハヤテと言って、クリスマスの日、両親に1億5680万4000円で売り飛ばされたかわいそうな少年。ちなみに色々あってナギの執事をしている。

「あ、やっとまともな紹介された……」

遅れてすみません。

「お前の自己紹介なんてどうでもいいよ」

「いや、お前よりはましかけどな」

「はあ〜、つれないねえ〜借金執事は。桂馬だったら凄く優しくしてくれるのによお」

「桂馬さんは誰にでも優しいから特別なんだよ。普段のお前の扱いはこんなもんだと思う」

「まあそんなことは置いといて」

軽く無視されて反発しようとしたがトラにわざわざする必要がないと思い、そのまま流したハヤテであった。

「お前いいのかよ」

「いって、何が？」

「学校だよ、が・っ・こ・う」

「そんなに強調しなくてもわかる」

「ここ来る前、お前一応高校生だったんだろ？」

「う……確かにそうだけど……」

ハヤテの口がごもる。

「借金返済のためあと40年ここでお嬢様の執事をする僕が今更学校なんて……」

その何を隠そう皆さんの知っている通り、ハヤテは借金をしている。1億5680万4000円という巨額の借金を。その借金返済のため、ハヤテはナギの執事として働いている。

「あいかわらず、つまんねく奴だな、おい。そんなので青春のーペ

「ージを無駄にする気がよ」

タマがため息交じりに呟くのを見て、ハヤテはさらに黙ってしまった。

「いいか？学校ってーのは別に勉強しに行くだけじゃねーんだよ。友を作って、友と語らい、泣き、笑い……。そうやって生涯の宝物をみんなで一つずつ作っていくんだよ。思い出っていう……宝物をな……」

いつにもなく真剣に話すタマに対してハヤテは少しながら驚きながらも思ったことを口にする。

「それはわかるが、トラに言われたくないよ」

「身もふたもないやつだね、まったく……」。

桂馬なら、『わ、なんていうトラが語る必要のないことなんですよ。さすがタマ』って褒めてくれるのによお

「それは褒めてるといふのか？」

明らかに褒めていない。

桂馬の印象が少しだけ変わったハヤテであった。

「ハヤテくん！ハヤテくん！どこにいますかー！」

と話していると遠くのほうから声が聞こえてくる。メイドのマリアの声だった。どうやらこっちに向かってくるらしい。

「や、やばっ！とりあえずあっち行くか！」

そう言って慌てるようにしてタマは去って行った。

「はい！どうしました、マリアさん？」

タマが去ったのを見届けてからマリアに対して答えた。

「あ、ハヤテ君、こんなところにいたんですか」

「ええ。ところでどうしたんですマリアさん？」

「えっと、その……ハヤテ君にちょっと聞きたいことが」

「僕に聞きたいこと？」

「ふう〜、これで今日の分の仕事は終わりですね」

三千院家のある屋敷の部屋の中。少し広々とした部屋で桂馬はモップを片手に持ち咳いていた。

「とりあえず、マリアさんに報告しに行きましょうか」

そのままモップ等の掃除用具一式を持ち、桂馬は部屋を出て廊下を歩く。

「確か玄関ホールにいたのか言ってたような気がします……」

玄関ホールに行くとそこには掃除をしているマリアの姿が。

「あつ、いたいた、マリアさん」

「あら、桂馬君、もしかしてもう終わってたんですか？」

「ええ」

「速いですね。屋敷の半分を任されたのにそれをたった2時間で終わらせるなんて……」

「案外集中していると早いもんなんですよ」

というのが実際すごい速さである。

（なんだか最近、桂馬君を人として見ることができなくなってきました）

マリアは心の中でそう思った。ちなみにちゃんとした人間です。

「でも、それならちょうどよかったですわ」

「え、何がですか？」

マリアが言い出したことに桂馬は質問した。

「実は……今日、ナギ学校なんですけど、お弁当を忘れてしまって、それで届けようと思っていたんですけど。ハヤテ君は出かけているので、桂馬君ちょうど終わったから頼もうと思って……」

マリアが持っているのは結構でかい弁当箱だった。というか重箱。

(これはお嬢様が食べきれないと思うのですが……)

実際、自分でもこれだけ食べば1日持つくらいだ。それをあのナギが食えるとは思えない。

しかしあえてここはそのことに関してはツッコまなかった。

「頼めますか？」

「はい、わかりました。ところで、お嬢様どこに通ってるんです、学校は？」

「そういえば、桂馬君には教えていませんでしたね。」

……白皇学院に通っていますよ」

「なるほど、白皇学院ですか……そうですか、そうですか」

その場が沈黙を支配した。しかしそれはたった数秒でしかなかった。

「つてええー！ー！！白皇！？」

「……そんなに驚くことですか？」

突然の大きな声でびっくりしているマリヤをよそに桂馬は少しどころかなり動揺していた。

「だってあの白皇ですよ！！天下の白皇ですよ！」

「天下かどうか知りませんが、その白皇です」

桂馬がこれだけ動揺している理由、それはあの白皇学院だからである。

桂馬が言っている通り、ここらでは、いや、全国で有名かもしれない高校。

初等部から高等部までのエスカレーター式なのが特徴。そして有名な理由はお金持ちの人達が通っているからである。あとついでに白皇の偏差値は65以上らしい……。

「と極端な白皇の説明が終わったところで、改めて頼みたいのですが」

とマリヤは桂馬に聞く。さすがにもう動揺はしていない模様。

「はい、わかりました。しかし僕みたいな見ず知らずの人を入れてくれるんでしょうか？」

「そこところは大丈夫です。ハヤテ君も先日行っているのです、三千院家の執事です、みたいなことを言えば、大抵の人は通してくれますので」

「そうですか。分かりました。では早速行ってきますね……それにしても学校ですか？」

「なんだか楽しそうですね」

少しワクワクしながら発言した桂馬に、マリアは疑問を感じた。  
なので聞いてみることにした。

「あの……楽しそうって、どついう意味ですか？」

マリアが聞いたときにはすでに玄関のドアノブに手を置いて桂馬が  
外にしようとしていた。

桂馬はマリアの声に反応して振り返った。

「あゝ、そうでしたね、そういえばマリアさんに言ってなかったこと  
ありますね。

……実は僕、学校……行ったことないんですよ

「え……」

突然の爆弾発言にマリアはかなり驚いていて、何も言えなかった。

「それでは、行ってきますね」

「あ、あのっ！ちょっと桂馬君！」

マリアは桂馬に呼びかけたが、すでに桂馬はドアを開けて出てっ  
てしまった。

「……学校に通ってないってどついうことなのかしら。どつうか、  
だったら仕事とかどつやって面接していたんでしょつうね。履歴書と  
か色々……」

どつうマリアの呟きは独り言に終わった。



白皇学院前

「ここが白皇学院かあ……噂には聞いていたけど、でかいですね」

噂以上の大きさだったことに驚いている桂馬。無理もない、何せ白皇だから。

「さてと、感心している場合ではないですね、早くお弁当を届けないう……」

と目の前にある大きな門から行こうとしたときだった。

「ちょっと待ちなさい!!」

と声をかけられた。声のするほうを向くとそこには緑色の髪をした女性がいた。

ちなみに女性は校門前で仁王立ちをしていた。

「あなた、ここの生徒じゃないわね!何者!!」

「僕ですか?僕はですね、三千院ナギお嬢様の

」

「いいかげんなことを言うな!!」

「ぶわあ!!」

執事と桂馬が言おうとしたとき、女性はいきなり桂馬のことを殴りにかかった。とっさのことだったので当然避けれずその女性の右手が桂馬の頬に直撃。

「な、なにするんですか!!」

「何ってそれはこっちのセリフよ!!でたらめを言って。ナギちゃん、胸はないけど一応女の子よ、女の子!!」

嘘とクレジットカードには限度があるのよ限度が、っていうかこれ昨日も言ったような気がするけどあえてスルーで!!」

最後の方は何を言っているのがよくわからなかったが、とりあえずかなり誤解されていることはわかったので、桂馬は誤解を解くために女性に話しかけた。

「う、嘘とかではなくてですね……本当に執事なんですよ」

「またでたらめなことを!!」

今度も右手で殴ろうとしたがそこは普通にかわす桂馬。

「ほう、やるわね。私の熱いパンチを避けるとは」

「ええ。これくらい避けれないと執事失格なので……」

「あなた……一体何者？正体くらいは聞いといてあげるわ」

「僕はですね……実は、松山ケン 子の弟です」

「ええー！ー！嘘でしょ！？マジで！？というかあの人に弟いたの！？そつちに驚きなんだけど！？まあ、いいわ！もしかしてサインくれたりしちゃったり！」

「んなの嘘に決まってるじゃないですか」

「だよー！そつだよー！そつじゃなきゃおかしいもんね。大体あの人に弟いないし……って私を騙したなー！ー！！」

「あなたが悪いんですよ、騙されるのが。単純な嘘だったし」

「私は単純なやつほど騙されやすいの！それが私という人間性なの！」

「いいんですか、それで？」

「では自己紹介という形で言わせていただきますね。僕は三千院家執事、御剣桂馬です。今日はお嬢様のお弁当を届けに来ました」

「そう、そういうことね。しかし私は名乗らないわ。なぜなら個人情報だから！」

「そうですか……」

「けど、なんだかあなたには色々これからお世話になりそつな気がするわ」

「僕も、あなたには何かあると感じていました」

「ふふっ、運命と言うやつかしらね」

「そうかもしれないですね」

「だからと言ってここを通すわけには行かないわ！私にもここを守らなければいけない使命があるから。ちなみに私がこの使命を帯びているのは、決して昨日お酒飲みすぎて今日遅刻してきて怒られたところではないから、間違えないようにね」

「そ、そうですか……」

色々ともう笑えない内容であるが、桂馬はもうスルーすることにした。

「でもまあ、何としてでも抜けさせていただきます」

「そう簡単に行くかしら」

そう言っただけで女性は右手を前にして構える。すらりとした身のこなし、そして先程の強力なパンチから推測してこの人は強いと桂馬は判断した。

だからこそ、油断はできない。しかしこちらには戦っている暇などない。なぜならこのお弁当をナギに届かなければならないからだ。

（とにかく校内へ……）

相手の隙をうかがうためお互いにらみ合いながら左に動く。一方の女性も左に動く。考えていることは一緒のようだ。そして2人は円

を描くように動いていく。

そしてそれから半分動いたところで桂馬が何かに気付いた。

「あの……ちよっといいですか？」

「何かしら？余所見している暇なんてあるのかしら？」

「ええと、その……言いづらんですけど……もう抜いちゃってます……」

「は？」

と言った瞬間、女性は自分のいる位置と、桂馬がいる位置を確認した。

そして気付いた。さっきと反対になっていることに。つまり入れ替わったということだ。

「しまったぁー！！おのれー！！私を騙したなー！！この卑怯者！！」

「卑怯ではないような……とにかく行かせてもらいますね」

そう言っつて桂馬は校内に走っていった。

「おぼえておきなさい！！この借りはいつか必ず返してやるわ！！……っていつかこれ前にも言っつてなかった！？」

「……っていつか不審者入れちゃったことで私給料減らされちゃう！？ねえ、そうなのかな！ちよっと！」

「そうならさ、貸してくんない！ねえ、お願い！」

そんな女性の声は桂馬は聞こえてないかのように校内に姿を消した。とにかく桂馬は無事に白皇に潜入することが出来た……不審者として。

「ちなみに桂先生はどうしていないの？」

「ん？ああ、いつも通り怒られて校門で見張りでもさせられてるんじゃない？」

クラスではこんな会話が繰り返されていた。

第10話 潜入っていい響きだ 前編（後書き）

ついに白皇が来ました。今回は雪路だけでしたが、次はそのキャラも登場します！！

色々と楽しみにしててください。

キャラクターのこんなところが疑問になる、とか気になることなどの質問も随時受け付けています！！

ではまた次回！

ちなみに速ければ2、3日で投稿したいと思います！

第11話 潜入っていい響きだ 後編（前書き）

2、3日でできませんでした。

言い訳をすれば書いていくうちに色々とおかしいところを消したりした結果こんなにかかりました。

約束は簡単にはしないものですね。

それでは白皇潜入後編をどうぞ！！



## 第11話 潜入っていい響きだ 後編

白皇学院内

「え、今日も弁当が必要なのか？」

「ええ、昨日言ったはずだけど……特別授業が連続であるって」

白皇のとあるベンチ、そこに座っているのはナギと伊澄。どうやら今の時間は休み時間のようだ。

しかしそれにしてベンチがある学校とはさすが白皇。でかい。

「しっかし面倒だな。なんで私が学校に来なければならないのだ」

「それは……高校生だからじゃないかしら？」

「それは、そうだけどさ……」

「それにナギはこの頃サボっていたんだから」

「いいじゃないか、サボリ。ああ、なんていい響きなんだろうな、サボリとは。この言葉を考えたやつを私は偉人になりたい」

とりあえずナギの学校嫌いを改めて確認することになった伊澄であった。

そのとき、携帯の着信音が鳴った。発信源はどうやらナギの携帯から。

「ん？マリアからか……ああ、マリアか、どうした？」

『あの、今そこに桂馬君いませんが?』

「ん?桂馬か?いないぞ。なんでだ?」

『実は桂馬君にお弁当を持たせてそちらに行かせたんですけど……』

「ああ、なるほど。でもハヤテの時みたいにいくらなんでも不審者扱いされては」

『知ってます?今、白皇に不審者が入ったんですって』

『まあ、恐ろしい……確か昨日もでしたよね?』

『ええ、しかもなんだか貧乏そうな空気を漂ただよわせてるらしくて、今桂先生が血眼ちまなこになって探しているらしいわよ。ちなみに格好は黒服のスーツらしいですわ』

『早く捕まるといいですわね、でもなんで血眼に?』

『さあ?』

以上、そこら辺にいた白皇女子生徒AとBの会話でした。

「……えっと、マリア……」

『……もしかして、ハヤテ君の時と同じですか?』

「まあ、あらかたは。とにかく私は桂馬を探す。とりあえず切るぞ

マリア」

『ええ、分かりました。ではお願いしますね』

そう言っつてナギは携帯の電源ボタンを押して会話を終わらせた。

「どうかしたの、ナギ？」

「ああ、ちょっと用事が出来てしまった。ここで待っていてくれ」

「わかったわ」

(幸い、まだ時間はある。だからそれまでに見つかるとよいが……とりあえず今はなにも起こらないことを祈るのみだ)

心の中でそれを切に祈りながらナギは桂馬を探しにいった。そしてそれと同じ頃、

「見つけたわよ！不審者君！」

「もう見つかったじゃないましたー！！」

我らの主人公こと桂馬はダメ教師こと、桂雪路に追われていた。ちなみに潜入してから数分のことである。

「ダメってなによ！私はダメなところなんて一つも……ない？かな？ねえ、不審者く〜ん、私の変なところってある〜？」

「なんでそんなことを僕に聞くんですか！！あなたと出会ってまだ数分ですよ！？」

「でももう1話分は超えてるんだし」

「そういう変なことは言わないでください!!」

「ま、いいわ。とにかくおとなしくお縄に頂戴されなさい!主に私の給料のために!」

(くっ、このままじゃ……)

とかなりピンチに陥っていたそのとき、建物の角を曲がったところの草の茂みから声が聞こえた。

「こっちだ」

「え?」

「いいから、こっち!」

「は、はい!」

言われるがままに桂馬は草むらの茂みに入った。

「あれ!?いなくなった!?とにかく早く探さないと!待ってなさ〜い!不審者〜!絶対に私の給料を減らさせないんだから!」

となんだか異様にテンションが高い雪路は猛スピードで何処かに去っていった。

いなくなったのを確認して桂馬は茂みの外に出た。

「ふう〜、なんとかかなりました。助けていただきありがとうございます」

ます」

「別にいいよ。こっちも用があったし」

と桂馬はここで初めて自分を助けてくれた人の姿を見た。  
見た目は髪の毛がライトブルーの女の子。

「あの、お名前は？」

「私か？私は花菱美希っていうけど」

「花菱さんですかこれからよろし」

「美希でいいわよ。桂馬さん」

「そうですね、分かりましたって僕の名前どうして……」

「まあ、うちそついつの調べるの得意だから」

「そうですね……ちなみになんでさんづけなんですか？」

「なんかつけないといけないような気がしたから。まあいいじゃない  
い」

「は、はあ……」

とにかく納得した桂馬であった。

「それでその……僕に用とは一体……」

美希が最初に言ったことを思い出した桂馬は美希にその用事の内容について聞いた。

「ああ、そうだった。あやうく当初の目的忘れるところだった。桂馬さん、勉強は出来る方？」

「へっ、勉強ですか？まあそれなりになら……」

「なら話は早い。私についてきたまえ」

「え？どこに？」

「まあ、来れば分かる」

と言つて美希が桂馬を連れてきたのは、白皇でもかなり有名な建造物の時計塔。またはガーデン・ゲートと呼ばれる場所だった。白皇に見学に来たなら、まずはこれを見るべきだろう。

「うわぁ、でかいですね。さつき遠くから見ていましたけど。やっぱり近くに来るとスケールが違いますね」

時計塔を見上げながら、桂馬は感嘆していた。

「でも、どうしてこんなところに僕を？」

「まあ、この中に入れば分かる。それに、雪路もここには不審者が来ているとは思わないだろう。とりあえずついてきて」

といいながら美希は時計塔の中に歩いていく。

「あの……でもここに生徒会の人以外は立ち入り禁止だと書いているのですが……」

「ああ、それについては大丈夫」

歩みを止めて、美希は来ると桂馬の方に向いてこう言った。

「私……こう見えても生徒会役員だから」

「うむ、桂馬は一体どこなのだ？まったく見つからない……」

ナギはあれからひたすらに歩き回り桂馬を探しているが、一行に見つかる気配がない。まるで姿が最初からいなかったように。

「なんかそれだと、存在感が薄いキャラみたいだな。しかし本当にどこに行っただろう？」

といていたとき、目の前から雪路が走ってきた。

「あ、ナギちゃん！」

「先生。あの実は」

「ねえねえ、不審者見なかった！？黒いスーツを着てる男なんだけど！？」

「ええと……」

ナギにはかなり見覚えがあった。だっていつも自分のお世話をして  
いるのだから。

それはもちろん桂馬のことだった。

そして完全に不審者扱いされている桂馬にため息しかでなかった。

「まあ、知ってるといえ知ってます……」

「ホント！？それなら助かるわ！で、今どこに？」

「それは私にも。だから今探しているんですが……」

「そうなの。分かったわ。だったら協力して見つけましょ！そして  
捕まえるの！」

「いや、捕まえるの何も私の知り合いで……」

「いいえ、何も言わなくていいわ！何かあっても私がなんとかする  
から！」

「……はい。分かりました」

もはや言うのも疲れたのか、ナギは雪路の言葉に従うのだった。



(しかし、これで桂馬を探す手間が省けたな)

「とにかく、早速私は高いところから探がすから、ナギちゃんは低いところから探して」

「分かりました」

「さてと、観念しなさい……不審者君！  
まずは時計塔のほうから探しましょうかね」

と桂馬の搜索が本格的になりつつある頃、桂馬はというと、

「うわあゝ、凄いですね。ここが最上階ですか」

時計塔の最上階の生徒会室に来ていた。

「ふふふ、中々気に入ってもらったみたいね」

「それはもう、特にこのテラスからの眺めがもうなんとも」

テラスに出て桂馬は眺めを見る。時計塔から白皇全体を見渡せるようになっていいる。ベンチで何か話している生徒。

クラウンドでサッカーをしている生徒など見られた。

「それにしても、本当にここは凄いですね、そうですね、ヒナギクさん」

ヒナギクと言う名前を呼ぶと、部屋の真ん中にいるピンク色の髪の毛の少女が反応した。

「え、ええ、そうですね……」

少しぎこちない返事に桂馬は疑問に思った。

「そんなこと言ってもヒナには分からないと思うぞ、桂馬さん。何せヒナは高所恐怖所だから」

「ば、バカ！そんなわけないわよ！」

頬を赤く染めながらヒナギクは美希に対して反論する。

「じゃあ生徒会長様、どうぞテラスの方へ」

「うう……ごめんなさい、やっぱり無理です……」

「まったくどうしてヒナはそこで強がるのか」

「し、しょうがないじゃない。それが私なんだから」

「ま、そんないじりがいのあるヒナだからいいんだけど」

「それはどう意味なのよ！」

「本当に仲がいいんですね、2人とも」

2人のやり取りを見ていた桂馬が呟いた。

「まあ、美希とはなんだかんだで腐れ縁ってやつね。それより美希、なんで桂馬さんをここに連れてきたの？追われてる事情でここに隠れるってことは分かるんだけど、美希の個人的な理由は分からない

わ

「そういえば、そうですね……」

確かにヒナギクの言う通りだった。最初、美希は桂馬に用があると  
いつていた。

その用のためにここにつれてきた。きっと意味があることなのだろ  
う。

「ああ、そのことが。あんまり思い出したくなかったが……。では  
桂馬さん」

「は、はい……」

「私に勉強を教えてくださいー！」

「……え？」

ヒナギクと桂馬は美希の言っている言葉に意味の分からないといっ  
た感じになった。

「実は、今日授業があって宿題が終わってなくてな。それで今日私  
が当てられることになってるんだけど。内容がまったく分からなく  
てな。

いや、決して昨日遊んでて宿題のことすっかり忘れてたとかそうい  
うことではないからな」

「隠す気ゼロね」

「アハハ……」

「それで最初はヒナに教えてもらおうと思ったんだけど、なんだかそれではいつもと変わらずつまらないような気がしてどうしたものかと思ったときに、ちょうどナギちゃんの新しい執事が入ってこの学校に来ているという噂を聞いたので会ってみようかなと思ったら……」

まあ、ようは桂馬に勉強を教えてもらいたいようである。

「まあ、そういうことだ」

「は、はあ……分かりました」

「そのまえに、ちゃんと自分でやる努力をしなさいよ」

「私はそういう努力が嫌いなんだ。で桂馬さん、ここなんだけどさ……」

「はい……」

広げたノートを見て頷く桂馬。

「あの、無理しなくていいですからね……」

無理をしてもらっては困るし、と桂馬を心配して言ったのだが、

「いいえ、こんなことくらいできないようではお嬢様に怒られてしまいますし。それに三千院の執事ともあるうものが勉強の一介も出れないわけにはいかないので」

(……へえ)

桂馬が言ったことに素直に感心したヒナギクだった。事前にナギにはとにかく怪物並みに凄い奴と言っていた。その意味がヒナギクは今ののでよく理解したようである。たった数日で執事になれた奴が言える言葉ではない。

「……それで美希さん、ここの和訳するところなんですけど……って知ってます？」

「へ？い、いや、知らない。何か重要なのか？」

「ええ、この文を作るに当たって重要な部分です。これによって和訳の仕方なども分かってくるから」

「でも私はこんなもの分からないからなあ」

「大丈夫です。僕がなるべく分かりやすく教えるので。でここのんですけどね、……というもので」

30分後

「おお！出来た！」

「おめでとつございます。美希さん」

(……結構時間かかるかと思ったけど、速かった……)

喜んでいる二人をよそにヒナギクは宿題の終わりの速さに驚いてい

た。ヒナギクは見た限りでは3問の和訳で、しかも要点を述べながらのやつだったから最低でも一時間はかかると予想していた。しかしそれをあっさり終わらせてしまった。

(本当にナギの言うとおり、この人、化物かも知れないわね……)

「で、これからどうします?」

「えっと、そうだな。教室に戻ろうかと思ってただけ……あ、桂馬さんも来る? ナギちゃんと私同じクラスだし……」

「あっ、ではそうさせていただきますね」

「待って、私もついでに教室に取りに行くものがあるからついていくわ」

「なんだ、ヒナ、一人で寂しいのか?」

「違う!」

「まったくそうといってくれればいいものを……」

「だ・か・ら違っつてば!」

「本当に仲がいいですねえ」

エレベーターの前まで来て、桂馬はボタンを押す。少し遅くエレベーターが上に上がってくる。

(ふう、少し時間かかったけど、ようやくお嬢様にお弁当を渡せま

す……)

と安心したときだった。

(っ！？これは……闘気！エレベーターの中から……もしかして！)

「お2人とも。後ろに下がっててください」

「「え？」」

「お願いします」

とりあえず意味が分からなかったが二人は後ろに下がることにした。

チーン、とエレベーターが止まったことをさす音が響いた。

(……来るっ！)

桂馬は扉が開くと同時に構える。すると扉からサーベルらしきものを持った緑色の女性……というか雪路が桂馬に切りかかった。それを軽く避けてとりあえず後ろに下がる桂馬。

「お姉ちゃん!？」

「雪路か……」

ヒナギクは突然きた姉に驚き、美希は来ることは少し予想済みだったのか、別段驚きもしていなかった。

「ビンゴね！やっぱり上から回って正解だわ！さあ、さっさと捕まりなさい！不審者君！」

「お姉ちゃん！何をわけ分からないこといつてるの！桂馬さん是不審者なんじゃないんだってば！」

とヒナギクが必死に説得するも、

「ヒナ……なんでそんなことを、はっ！もしかして、あなたヒナに何かしたなあ！！」

「もう、違うつてば！お姉ちゃんのバカ！」

この通りまったく話を聞かないのである。

「さあ妹にした罪、払ってもらおうよ」

（この人がヒナギクさんのお姉さんってことにはもうツッコまないとして、さすがに弁当持ちながらの戦闘は避けたいですね……）

このまま戦えば、お弁当がめちゃくちゃになつてしまう。そうすれば、せつかくナギのために作ってくれたマリアさんにも失礼だし、昼食を楽しみにしているナギにも失礼だ。そんなこと三千院の執事にあつてはならない。

（……仕方ない。なんとか雪路さんの誤解を解くしか方法はなさそうですね……難しそうですが）

と考え事をしている桂馬に詰めかかる雪路。

「考え事とは結構余裕があるのね！」



「！」

突きの攻撃をひらりと避ける。しかしそれだけでは雪路は終わらない。そのまま突きの形から連続で突きを出す。そして桂馬を壁まで追い込む。

横に避けようとしても、横払いでやられてしまうだろう。それほど雪路の攻撃は意外にもするどい。

とそうしているうちにあっという間に壁に追い詰められてしまった。

(やばいですね……このままじゃ……)

「さあ、観念なさい！」

「あ、あのですね。僕はこのお弁当をナギお嬢様に届けに」

「だから誰が信じるのよ、そんなことを！」

そう言つて雪路はサーベルらしきものを突こうとする。

桂馬はそのまま次にくる衝撃に目をつぶった。しかしその衝撃がくることはなかった。

(あれ?)

疑問に思った桂馬が目を開けるとそこには、竹刀で雪路のサーベルを叩きつけてるヒナギクの姿があった。

「人の話を、聞きなさい！」

そのまま雪路に横に薙ぎるようにして雪路に攻撃する。それを雪路は後ろに下がって避けた。

「何するのヒナ！そいつは不審者よ！教師たる私が成敗しないといけないの！  
そんなやつを庇う必要はないわ！」

「何するのはこっちのセリフよ！この人は不審者じゃなんでもなくて、ハヤテ君と同じでナギの執事なの！」

「そうやってヒナも私を騙す気なのね！もしかしてこの前お金貸してもらったことについてまだ怒ってるの！？」

「確かにそのことについてもあるけど今は関係ないじゃない……。もういいわ。お姉ちゃんを説得するしかないようね……。」

「ふっ、どうやら姉と妹が戦うのは必然なのね。これぞ運命というやつかしら、ってこれ前の話でも言ってたような気がするけどそんなことでや関係ないわ！」

こうして姉VS妹の戦いが始まった。

（完全に僕達空気ですね……というかヒナギクさん、その竹刀はどこから？）

（私だってあんまり出番もらえないのに……）

若干これに不満な方もいたが、とにかく始まったものは仕方ない。まず最初に攻撃したのはヒナギク。雪路に対して竹刀を縦に振った。

「ふっ、前よりも強くなってるわねヒナ。お姉ちゃんは嬉しいわ。でもその程度では私は倒せないわ！そんなんじゃ私の給料でさえ下

「けることは出来ないわよ！」

「よく言えるわね、そんなこと。お姉ちゃん、今まで私に喧嘩で勝ったことないじゃない？唯一私に勝つてるところと言えば、無駄に重ねたその歳とお金を借りた数くらいよ」

「なっ！そんなひどいこと言わなくても……。ヒナ、私にも許せることと許せないことがあるわ」

「別にお姉ちゃんに許してもらわなくてもいいもん。それよりこの前貸したお金についてはいつ返してくれるのかしら？お姉ちゃん」

「うう。卑怯よ！お金を人質に取るなんて！」

「別にとつてないわよ」

勝負というより、ただの姉妹の喧嘩的な感じになってきた。

（本当に空気ですねえ〜）

「あの、僕このお弁当を届けなくてはならないのでさっさとお嬢様のもとに行きたいのですが」

「！」

と桂馬が言った瞬間に雪路が桂馬の隙を見つけて、お弁当を取ってしまった。そしてテラスのフェンスに乗かった。

「お姉ちゃん！」

「とうか、本当にプライドというものが無いな、雪路は……」

「クククっ、ヒナ、これを返してほしい？でもあなたはここまで来れるかしらね。高所恐怖症のアナタが！」

「うう……同じ手は何度も……通じない……わ」

かなり動揺中である。しかも涙目で体をぶるぶるしながら。

（めちゃくちゃ動揺してるじゃん。通用してるよ）

誰もツッコまなかったので、美希が心の中でツッコンておいた。

（こんなことで怖がってどうするの、桂ヒナギク！しっかりしなさい！）

なぜなら自分は生徒会長だから。こんなことで怖がっていたら会長としても失格だから。そして……せつかく白皇に来てくれたお客様に迷惑をかけたくないため。

そのために、ヒナギクはテラスに震えながらもその足を踏み入れた。

「私は……私は生徒会会長桂ヒナギク！お客様に迷惑掛ける人をこのままにしておくわけにはいきません！！」

「……ふっ、本当に強くなったわね、ヒナ。お姉ちゃんは嬉しいわ」

「じゃあ……」

「ええ、おとなしく私はお弁当をかえ」

といったときだった。テラスに強風が吹き荒れた。そのせいか、テラスのフェンスの上で立っていた雪路は風によって足場を動かされてしまった。そしてそこには足場がなかった。そうつまり、このままでは落ちる。

「うわああー！ー！ー！」

「お姉ちゃん！ー！」

「雪路！ー！」

2人は同時に叫んだ。しかしいつまでたっても雪路の返事がない。

「嘘でしょ？いやよ！そんなの！お姉ちゃん！私をまた……独りにしないでよ……」

「ヒナ……」

その場に座りこんでしまったヒナギク。美希も同じようにヒナギクの近くに座った。

「お姉さん想いですね、ヒナギクさんは」

「え？桂馬さん？」

目の前から桂馬の声がすると、そこには気絶して床に倒れている雪路と立っている桂馬がいた。

「いつの間にな……？」

「ええと、雪路さんが落ちる瞬間にはもう走ってましたね、その後

は先生を手で掴みながら上に跳んで戻ってきました」

「あなた、本当に執事なの？サイ 人とかじゃなくて」

「だからそんな野蛮な戦闘民族ではないです」

「じゃあ何かしらの特殊な果物で食べたんじゃないか？ゴム ムの実とか」

「僕は海賊王になるつもりはないですよ？」

「とにかく、お姉ちゃんを助けていただいてありがとうございます！  
た！」

「私からも礼をするわ」

美希、ヒナギクがペコリと頭を下げた。

「そんな、僕はただ助けただけですから。これくらい執事には普通ですよ」

ニツコリと綺麗な笑顔で桂馬は笑った。

「／／／／」

やはりこの笑顔は強大なようだ。

「あ、でもお弁当のほうは……」

ヒナギクが先程まで雪路が持っていた弁当のことについて考えた。  
まあ普通ならお弁当がおじちゃんになっているが、

「あつ、それなら雪路さんが手放したところを取ってそこにおいて置きました」

指をさすと、そこには何もなっていないお弁当があった。

( (この人、やっぱりすげー!!) )

素直にそう思った2人であった。

そしてその後、雪路の誤解も解け、桂馬は無事ナギにお弁当を渡し、ミッションを終えた。

少しお弁当の中身がぐしゃぐしゃだったことは余談である。

これも余談だが、

「あのハヤテ君、どうしたんですか？そんなに落ち込んで」

「いや、女の子って分からないですね……」

「は？あ、携帯買ってきたんですよ？僕のアドレスも渡ししておきますね？」

「あつ、ありがとうございます」

そんなやり取りが夜の三千院家で行われていた。

第11話 潜入っていい響きだ 後編（後書き）

今回はあの生徒会長ヒナギクと3人娘の1人、美希の登場です。  
いやはや、やはりヒナギクは書きやすかったりします。

ではまた次回。多分次回は早く更新できるかもです（それでも期待  
はしないでください）  
それでは！

最後に、最近暑いので熱中症には注意してください。



第12話 試験中って他のことをしたくなる(前書き)

テスト2日前投稿。

今回は大体が原作を頼りにしています。やはり原作があると書きやすいです。

それではどうぞ！

## 第12話 試験中って他のことをしたくなる

「その……お嬢様は、人を泣かせることが趣味なのですか？」

「だから、違うって言うてるだろ!!」

東京都練馬区のとあるお屋敷の朝、そこのある部屋で2人が争っていた。お嬢様と呼ばれるものに挨拶していたのは、黒髪のシヨートヘアの御剣桂馬。この小説の主人公。

もう1人の声を上げている方は、このお屋敷の主、三千院ナギ。

何故ナギがこんなにも声を張り上げて言っていたり、桂馬が開始早々よく分からない質問をしているのにはわけがあった。

それは遡ること数分前。

桂馬はいつも通りに起きて庭の掃除をしていた。ちなみに今日は桂馬が朝食を作ることになっていた。

庭の掃除を終えて桂馬は朝食の用意をしつつ、小説の次回の巻の構成について考えていた。まあそんなことをしつつ朝食からしばらく経った後、みんなが集まっている部屋に入ったら、そこには苦笑いのマリアと、泣いているハヤテ、そしてそれに驚き慌てているナギの姿が眼に入った。

そしてこの状況になったのである！

「あの……いいんでしょうか、セリフなしの回想って……」

「そんなことより、なんでハヤテ君が泣いているのか説明していただきたいのですが……」

「いや、私は何もしてないぞ？ただハヤテに学校行きたくないのか、って言っただけだった」

「そういえば、ハヤテ君、学校行きたがってたですものね」

「そうなんですか？それならよかったですね、ハヤテ君。学校に通えて」

「あ、ありがとうございます」

涙を執事服の袖で拭きながらハヤテは笑顔でそう答えた。満足げな表情を見て、桂馬達も満足げになった。

「でも、この白皇の書類だと、一応試験を受けなくてはいけないみたいですね」

「あつ、本当ですね。書いてあります」

「まっ、三千院家の執事を名乗るものならば、白皇の編入試験くらい受かってもらわないと困りますな」

「あつ、クラウドさん……」

「生きていたんですか」

「人を勝手に殺さないでください」

突然ひょっこりと出てきたクラウドに対してハヤテ達は各々述べた。それを否定しながらクラウドは言葉を続けた。

「まあ、受からなければ執事もクビってことで」

「おい！何を今更言ってるのだ！」

「いいですよ」

「……え？」「」「」

「ここまでしてもらって受からないなんて男として申し訳がたちません！三千院家の執事を名乗るのであればなおさら！！」

ハヤテは堂々と声を張り上げて宣言する。

「ですからここはみなさんにご覧いただきます。僕の……僕の本気を！」

覚悟をきめた顔をして言ったハヤテは、かなり男前だった。しかしただ覚悟を決めただけでは白皇には受からない。

「ちなみに白皇の偏差値は65以上はあるぞ？」

「うー！……だ、大丈夫ですよ。大丈夫。うん。きっと大丈夫です」

「しかも明日だぞ、試験」

「へ……屁のつつぱりはいらんのですよ、お嬢様」

クラウドとナギの言葉が相当食らっているのか、ハヤテは若干体を震えさせながら答えた。

（ハヤテ君……大丈夫でしょうか？前の学校の成績からすると悪くないようですが……これでは結構厳しいですね）

ハヤテの前の学校の成績書を見つめて心配になるマリア。

「あの、マリアさん、もしかしてハヤテ君厳しいですか？」

そこに桂馬はが話しかけた。どうやらマリアの顔を見て気付いたのだろう。

「そうですね。はっきり言つと厳しい状況にあるのは確かですね」

「そうですね……。ならば……」

そう言つてハヤテのところに桂馬は行った。

そんな桂馬を疑問の目でマリアは追った。

(何をするつもりなのでしょう桂馬君……まさか)

「ハヤテ君、僕でなければ勉強教えましょうか？」

「え？いいんですか？そんなこと頼んで」

「僕でよければ。それにハヤテ君の歳ではまだ学校に通つてる時期です。高校でしか学べないこともあるでしょうから。それにハヤテ君、学校に行くつてなつたとき凄く嬉しそうですね。だから、お嬢様も引きこもりから脱出するいい機会だし……」

「確かにそうですね」

「うづつ。しかしハヤテと一緒に学校に行けるなら苦ではない？」

「なんで疑問系なんですか」

「と、とにかく僕はハヤテ君にお嬢様と一緒に学校に通って欲しいんです。ハヤテ君には笑顔でいてほしいんです」

「桂馬さん……ではお願いします」

「分かりました。じゃあ後で部屋に行きますね。僕はまだキッチンを片付けてないので掃除してきますね」

そうしてそのまま部屋を出ようとしたのだが、

「おい、桂馬」

ナギの言葉に桂馬は止まった。

「お前はいいのか？学校……。お前だってまだ18だぞ？今からならもう一つ書類を用意できるが」

先程のハヤテに対して言っていた桂馬は、まるで自分のことも含んでいるようだった。だからこそそこに気付いたナギが進言したのだ。しかし桂馬は首を横に振り答えた。

「……18はもう高校生のなる歳ではないですよ、お嬢様。それには学校というところは正直いって分かりませんから。

きつと僕が行っても迷惑をかけるばかりでしょう。ですので失礼ですがお断りさせていただきます」

そう言って桂馬は部屋を出て行った。

「……私少し桂馬君を追いかけますね」

その後、すぐに後を追うようにマリアが部屋をでた。少ししんみりした空気になったが、

「あれ、私の存在、なかったことになってる？」

クラウドのこの発言により、各々動き始めたのであった。

「あれ？無視？」

「桂馬君」

「あつ、マリアさん。何か御用で？」

桂馬は先程言ったとおり、キッチンの掃除をしていた。

「本当にいいんですか？私は桂馬君にも是非学校に通って欲しいと思うのですが。」

学校、通ったことないんでしょう？」

「そうですね、僕に執事との両立は無理だと」

「それなら大丈夫ですわ。それはハヤテ君だって同じですし」

「それは、そうですね……でも僕にはもう学校など……」

ばつが悪い顔をして暗くなる桂馬にマリアは気になりながらも、なんとか学校にいかせる方法を考えていた。

しばらくして、マリアは何か思いついたようで、桂馬にこう言った。

「桂馬君、生徒として学校に通うのはダメと言ってるんですよね」

「ええ、ですがそれがどう……」

「だったらこれならどうでしょうか……」

そう言うとマリアは桂馬に対して、何かを言った。

## 次の日

あっという間に次の日の朝。ハヤテとナギは白皇に来ていた。

「だから速すぎでしょう。もうちょっと構成の仕方をちゃんと考えてですね」



べらべらと何かを喋っているが、この状態でも片手に英語の単語帳をもってハヤテは勉強しているのである。

「って無視しないでくださいよ!」

「ハヤテいちいち気にしてたらきりがないぞ。こういう場合は物語を進めるためにこちらも無視を決め込めばいいのだ」

「なるほど。そうですね」

「ところで昨日はちゃんと勉強出来たのか？」

「ええ、桂馬さんに色々ポイントを教えてもらいました。本当に分かりやすいんですね、教え方が」

「そんなにか?でも先日白皇に来てたときも勉強を教えていたと聞いたからな。というかいつそのこと先生になればいいのにな」

「あはは、そうですね。でも昨日桂馬さん様子が変でした」

「変?変とはどういうことなのだ?」

「それがですね……」

とハヤテは桂馬の昨日の行動について振り返ってみた。

「なんだか僕が勉強している間に隣で勉強してたんですよ。それに何かの書類に目を通していたときは真剣だったし……。しかもマリアさんによると今日寝てないよう……。話では用事の件で色々あるってことでしたけど……。どうしてそんなことをしていたのか気

になりました」

「まあ桂馬のことだ。どうせ、何かしらあってその手伝いとか何かじゃないか？帰ったら聞けばいいさ」

「そうですね。それにしてもテストってどういうものなんですかね？」

「普通に英語とかじゃないのか？」

とナギが呟いた瞬間、

「ふっふっふ。甘いわ！そんな普通なのが白皇の編入試験だと思いかしら、ナギちゃん！」

突然どこからか女性の大きな声が聞こえてきた。

そしてその声の主は途中にあった木の枝から飛び降りてきた。

「よくきたわね！元・不審者1号とナギちゃん！！私が今日の試験官！かのクレオパトラとも引けを取らないとされている美しき世界史教師。」

桂雪路よ！..！」

そう、桂雪路その人だった。

「あの、それはさすがにクレオパトラに失礼だと思うのですが……それに美しい？」

「さすがにっつてなによ！大体美しいってところを疑問系にするな！」

「そんなどつでもいいことより先生、普通じゃないって……私は一応この前その普通の試験を受けてここに入学したのですが……」

「過去ばかりいては未来に進むことや得るものがなくなってしまっ  
わよ!」

「そんな前ばかり見てもどうしようもないと思うのですが」

「とにかくこれから試験をするからついてきなさい!こっちよ!  
というわけで、2人は雪路の後に仕方なくついていくことにした。  
その道中……、

「……あれ?桂馬さん?」

「え?あ、本当だ。なんでこんなところにいるのだ?」

そう、なぜかは分からないが、教室の前でとても真剣な顔を桂馬が  
いた。

「なんだか話しづらい雰囲気ですね。それにしてもなんで……」

「先生に聞けばわかるだろ。」

先生、何故桂馬がいるんですか?」

雪路にそう質問すると、少し顔をしかめながら雪路は質問に答えた。

「え!?えつと……元・不審者2号君は三千院家の用事で白皇に  
来てるらしいわ。それ以外のことは知らない。」

そんな質問をするより、これからの試験の危険性について質問しな

さい！」

「ええ！？そんなに危険な試験をやるんですか!？」

「そうよ！だから心しておきなさい！」

「そうですか。さすが白皇……。試験の内容が普通ではないですね」

「いや、きつと違うからな」

(ふう〜……。なんとか騙せたわ。一瞬あの子が見えたときはばれたと思っただけ。しかし私のはぐらかし方もさすがとしか言いようがないわね！

しかも隠し通せたら三千院家から報酬が出るし……。いいこと尽くめかもしれないわね、今日は！)

しかしそんな考えはあともう少しで崩壊することをこの時の雪路は知らなかった。

その後、まあ色々あったが、ハヤテは試験を受け、そして試験が終了した……。

### 試験の日の夜

「ただ今戻りました。遅くなってしまいましたすみません……」

ハヤテ試験の日、桂馬は遅く帰ってきた。

「あつ、ただいま桂馬。今日は遅かったな。そんなにかかる用事だったのか」

ちょうど厳寒ホールにナギがいたのでナギが出迎えることにした。

「ま、まあ、そうですね。結構疲れましたけど……。でもこの通りまだ執事の仕事は出来るので大丈夫ですよ」

ピンピンと腕を振り回したりと元気な証拠を見せる。

「そうか。そうならいいんだけど。それにしても白皇で桂馬を見たときはびっくりしたぞ」

「えっ！ 僕のこと見かけたんですか？」

「ああ。なんだかいつもより真剣な表情をしていたから……。何をしていたんだ？」

「えっと……先日来た時に知り合った人が困つことがあると言われて、その手伝いをしてきました。一応マリアさんにも伝えました。それと、やった内容のことについてですが、頼んできた人の都合で話すことができません。すみません……」

ナギの質問に桂馬は少しぎこちなながらも答えた。

「別に謝ることもない。そうか、だったら今日は無類するなよ。今日はハヤテも無理言わないで休んでもらってるからな」

「そうですか……分かりました」

ぎこちない返事に最初はナギは疑問に思ったが、すぐにどうでもよくなった。

その後軽くしゃべった後、ナギは自分の部屋に戻っていった。

「……なんとかばれずにすみましたね……。しかし本当に大丈夫でしようか……。」

とりあえず……自室に戻りましょう」

そういい残しだるそつに桂馬は自室に戻っていった。

ちなみに

「どうしよう……なんて不合格と伝えたら……」

真ん中に不合格と書かれた紙を持ちながらもはや絶望しかないような顔をしている雪路の姿があった。

第12話 試験中って他のことをしたくなる(後書き)

いかかでしたでしょうか？

今回は試験のお話でした。

この話は以外にも原作では僕は好きな回だったりします。

そして今回の桂馬君の行動は一体……？

真相を楽しみにしててください。といっても気付いてる人いそう  
ですが(笑)

それではまた次回！

### 第13話 先生ってなんだかストレスたまりそう（前書き）

今回、ようやく桂馬君の謎の行動が明らか！！

ちなみに今回は色々執筆能力が低下しているので、大まかなところは目をつぶっていただけだと嬉しいですよ。

あと、後書きに、桂馬君の自己紹介的なものを載せます。自己紹介といっても、容姿や名前とか今判明しているものだけが。

ではごっごー！！



### 第13話 先生ってなんだかストレスたまりそう

「どうしよう……やばいよね、これ完全に」

手にある一枚の紙を見て呟きながら、雪路は夕日に照らされた住宅地をひたすらに歩いていく。

その一枚の紙には、『綾崎ハヤテ、不合格』という文字があった。

「いやでもあれはほんの冗談でやったことだし。

でも結局私がそれやったから不合格に……。ああー！ー！結局私のせいかー！ー！

どこだ！どこで間違えたんだ私は！」

最初からです。

「とにかく、こんなときは……ヒナエモンに力を借りるしか方法はなさそうね」

と歩いていると家の前まで来ていた。そして雪路はそのまま家に入り……、

「助けてヒナエモンー！今すぐごく緊急事態なの！実は」

と大声でヒナギクの扉を開けた。するとなんとということでしょうか、そこには生着替え中のヒナギクの姿があった。

「あつ、えつと……その……これは……」

「人の部屋に入るときはまずノックをなさいって言うてるでしょ

「……！」

「キヤーーーー！！！」

怒ったヒナギクは顔を真っ赤にしながらからともなく竹刀を取って、雪路に振りかかった。そしてそれは見事に的中し、雪路は頭をおさえながら床をころがっていた。

「いい、お姉ちゃん。ノックっていうのは人類最大の発明なのよ。それもノーベルクラスの賞をとつてもおかしくないくらいに。だから今度忘れたら本気で殴るわよ」

「すみません、ホントすみません……」

本気じゃないことに驚きだ。

「で、どうしたのお姉ちゃん。何が大変なのよ」

「あつ、そうそう！もう超大変なのよ。だから助けてヒナエモン」

「……そのヒナエモンって呼び方なんとかならないの？」

「まあまあ、いいじゃない。立ち位置的には一緒なんだし」

「どこが一緒なのよ……」

まあ確かに、ヒナギクはかなり頼りがいがあることは確かだし、それにまるで四次元ポケットでもあるのかといわんばかりに竹刀をどこからともなく出してくるので、そういう認識としてとらわれても仕方がない。

「いちいちもうツッコまないわよ。で、本当に何が大変なのよ」

「あつ、それが一昨日のことなんだけどさ、三千院の執事君が編入試験を受けに来ただけど……」

「へ、へえ、そうなんだ。白皇の編入試験難しいのによく受ける気になったわね。まっ、受けるのは自由だけど」

そう言っているヒナギクだが、その言葉は嬉しさが混じっている。

「でもちゃんと勉強とかしてるかもしれないから絶対に邪魔しちゃうダメよ、お姉ちゃん」

「え？」

ギクツ。

その音が何故だかヒナギクには聞こえたような気がした。そしてその音は何故か雪路から聞こえたのだった。

「……もしかして、お姉ちゃん……」

「ちっ、違うのよ！私はただのほんの冗談のつもりだったのよ！！でもまさか本当に不合格になるとは思わなくて……！！」

「人の人生何ダメにしてるのよー！！」

「しゅわん……！！」

この日、桂家では二回もの悲鳴が聞こえたという……。

### 三千院家

「えっと……ふ、不合格ですか？」

『ええ、どうやらそうみたいです……』

その日の夜、三千院家に一本の電話がかかってきていた。電話の相手は、ヒナギクだった。

しかもその内容はテスト不合格についてだった。

運がよかったのか、その電話に出たのはマリアだった。

『今からそちらにおわびもかねて向かいますので……』

「ま、まあ分かりました。ではお待ちしておりますわね」

電話を切ると、マリアはため息をついた。

(……すでにパーティーも始まっていますし、中々ハヤテ君には話しづらいですわね……)

「とりあえず、桂馬君には話しておきましょうか……」

と言ったマリアの発言から30分もしないうちに、ヒナギクたちは来た。

「おじやまします……すみません、遅くなって……」

「い、いえ、大丈夫ですよ。それじゃあ、中に」

「あ、あの！これ最近新しく出来たお店のロールケーキで！これ一箱3000円はするものなんです……！」

「出すの早いわよお姉ちゃん！！それは本人に渡しなさい！！」

完全に混乱していて自分を抑えられていない雪路。そんな雪路をみて、ヒナギクは果てしなく不安になる。

「……で、マリアさん。ハヤテ君は？」

「あ、その、えっと……それが……」

マリアは言葉を詰まらせる。それを疑問に思った桂姉妹。

「？あの、どうしたんですか？」

「まさか……もう手遅れに!？」

「いえ、ぜんぜん大丈夫なんですけど、その、話づらい状況で……」

そしてマリア達は大きな扉の前まできた。そしてそのドアを開けると、目の前にはたくさんの人がいた。

それを見て、2人は啞然とする。

「えっと、これは一体……」

「これはまあ、見たとおりですわ……」

ヒナギクが質問すると、マリアは苦笑いで答えた。

そしてその隣では、雪路が汗をだらだらと流していた。

「こうでもしてくれないとお嬢様は社交の場を開いてはくれないので」

「あ、クラウドさん」

またまたひよつこりと出てきたクラウド。

「今のお嬢様は普段の何倍もその気なので、今回は盛大にパーティーを開かせていただきました！！これもあの少年が白皇に合格しておかげですな！！」

高らかに嬉しそうに語るクラウドに対して、雪路はさらに汗をたくさん流す。

「で、ハヤテ君はどこに？」

「あの少年ならあそこに……」

クラウドが指をさした先には、ハヤテとナギがいた。しかもかなり楽しそうに。まわりからみたらかなり恥ずかしいが、それでもかなり楽しそうに踊っている。

「よっぽど白皇に入れたのが嬉しいのじゃないかな」

その言葉がさらに雪路に刺さる。

（お姉ちゃん、大丈夫かしら……）

とひそかに思うヒナギクであった。

「お姉ちゃんどうする？とりあえず、パーティーが終わるまで待つ？」

「いやこれは私の責任！！責任を果たせないものは大人として失格なのよ！！」

（お姉ちゃん……）

久しぶりに雪路に感動したヒナギク。そしてそのまま雪路は、ハヤテ達に歩み寄っていく。

「あ、綾崎君！！」

「あ、桂先生。いらっしやいませ。どうしましたか？」

「えっと、その……」

緊張しているのか、中々言い出せない雪路だが、1回深呼吸して自分を落ち着かせて言った。

「これ、合格祝い」

「ありがとうございます！先生」

ドカツ、と雪路の頭から豪快な音がした。見ると、ヒナギクが雪路の頭を叩いていた。

「責任を果たさないと大人として失格じゃなかったのかしら？」

「ま、待って！！これは手違いよ！！」

「あれ、ヒナギクさんも。もしかして2人して僕のこと祝いに来てくれたんですか？」

「え、えっと……ちょっと来てナギ」

「え、うわ、ちょ、何だ！」

隅っこのところまでヒナギクに引っ張られたナギ。

「何をするのだ、一体！」

「ハヤテ君のことだけど、実は……」

「……えっ!？」

「あの……どうかなさいましたか？お2人とも」

「え、い、いやなんでもないぞ！」

「ちょっと気になることがあっただけよ」



「そうですか？それならいいんですが」

（いえんぞ！今更不合格なんて！どう伝えたらいいんだ！）

（それ以前になんで合格してることになってるのよ！！）

それはごもつともな話である。

「でもそれにしても合格しててよかったですよ、また学校に通えるなんて夢みたいです」

こんなことを言われたら、さらにいえなくなってしまう。

「ってそういえば、桂馬さんはどうしたんですか？先程から見かけないのですが」

「ああ、桂馬ならキッチンですつと料理を作つてると思うぞ。昼からずつと料理の仕込みをしていたらしいからな。よほどハヤテが合格できたのが嬉しいんだろうな」

とナギ。

「そうですね。桂馬さんには後でちゃんとお礼をしなきゃなりませんね。勉強を教えてくださいましたし」

（ナギ！なんでこんなこというのよ！さらに言いつらくなってるじゃないの！）

（そんなこと言われてもしょうがないだろ！）

と小声で話しているところに、

「綾崎君、実はね！あなたは！！！」

「え、どうしたんですか？」

ついに覚悟を決めた雪路が口を開いた。

（お姉ちゃん！？まさか言うの！？）

（ついに告げてしまうのか！？）

「もしかして、僕の担任は桂先生なんですか？それは楽しい高校生活になりそうですね」

「うん、それは楽しそうね」

ドカンッ、と今度は二発の拳骨がうなりを上げた。

「どこまでふざける気なの、お姉ちゃん！！！」

「だ、だって……」

「大体、誰のせいで不合格になったと思って……！！！」

「え、僕、不合格なんですか？」

聞こえていたらしく、ハヤテが呟いた。

「ごめん！私が全部悪いの！！こうなったら煮るなり焼くなり好きにして……ってあれ……」

土下座して謝った雪路が顔を上げるとそこにはハヤテの姿がなかった。

「ハヤテ君？」

「ハヤテ？どこにいったのだ……？」

三千院家、庭

「……」

三千院家庭の池の前で岩に座る一人の影があった。ハヤテだ。その後ろ姿は、どこか寂しい……。

「おや、ハヤテ君じゃないですか。どうしたんですか、そんなところで」

「桂馬さん……」

そんなハヤテのところ、桂馬がやってきた。

「そんなところにいたら、風邪を引いてしまいますよ。それに今はハヤテ君はパーティーの主演なんですから。」

お嬢様や、ヒナギクさん達が必死に探していましたよ?」

「……皆さんには悪いことをしました」

「?悪いこと?」

「ええ。お嬢様やヒナギクさん、桂先生、それにマリアさんや桂馬さんにも」

そのまま語るハヤテに、桂馬は黙って聞く。

「僕が変に喜んだり期待したりしたから……。」

この屋敷に来る前にあれほど未来に期待しないって……つらくなるだけだつて学んだのに……。」

屋敷に来る前の自分を思い出す。

親に売られて絶望した自分を。未来というものにしがみつかなかくなつた自分を……。」

「空っぽのぼうが、失うものがなくてすむんです……。」

「……そうですか」

聞き終えた桂馬はそのままハヤテによっていく。

「でもハヤテ君は僕には空っぽには見えないんですがね」

「え？」

「本当に空っぽなら……他の人のことなんて考えられませんから。本当に空っぽになった人は、自分のことでさえ絶望し、まるで人形のようになってしまうんです」

まるでそうなった人をしってるかのように桂馬は答えた。

「でもハヤテ君はそうじゃない。

ハヤテ君には……そうなってほしくない」

「桂馬さん……」

「……まあそれは僕から見たら話ですからね。

他の人から見れば、ハヤテ君には空っぽに見えてしまうのでしょうか。僕にはそれを直す術すべを知りません」

「……そうですか」

なんだか落ち込み気味のハヤテに桂馬はため息を一つしながら続けた。

「でも、空っぽならそれを埋めなければなりませんよねえ。だったら最適なところがありますよ？」

そう言つて桂馬はポケットから何かの手帳を取り出し、ハヤテの前に出した。

そこには、白皇学院のマークが入ったハヤテの生徒手帳があった。

「これって僕の生徒手帳ですか!？」

「ええ。そうですよ。マリアさんが推薦状を出したので、それが得点にプラスされ、合格にさせてもらったそうです」

驚いているハヤテだが、桂馬はそのまま話し続ける。

「空っぽでもいいじゃないですか。

空っぽならそれを埋めればいいじゃないですか。それがあふれるくらいに……。」

空っぽな人にお嬢様の執事は務まらないと、僕には思います。なんせ、お嬢様は……いろんなものがあふれ出るほど埋まっている人だから」

「空っぽを埋める……。」

「お嬢様につりあう人になるためにも。そしてお嬢様の立派な執事になるためにも、ここでしっかりと学んでみてくださいくださいね」

「ぼ、僕、頑張ります!!頑張って今の空っぽの自分を埋めて見せます!!！」

お嬢様のためにも……そして、マリアさんや桂馬さんのためにも!」

(えっと、僕に頑張る必要はないと思うのですが……)

でもやる気が出てくれたハヤテを見て、桂馬は満足げな表情になった。

「それじゃあ、僕はこれで。まだ料理の続きがあるので」

「桂馬さん、ありがとうございます!!」

ペコリと頭を下げたハヤテに、桂馬は笑顔で手を上げて、そのまま戻っていった。

「ありがとうございます、桂馬君」

「いえいえ、別にたいしたことはしてませんよ、マリアさん」

突然桂馬に声をかけた主はマリアだった。

「そういえば、桂馬君のほうもokでしたよ」

「……………そうですか。しかし……………僕が行く必要性なんてあるのでしょうか？」

「やっぱりダメなのでは……………」

「いいんです。ナギやハヤテ君の学校の様子などもこれで分かりますし、それに……………桂馬君も新しいことは経験したほうが得ということなのです。」

「将来役に立つかもしれませんから」

「は、はあ、まあそういうことしておきます。ではこれで」

「桂馬君……………これからもハヤテ君とナギをよろしくお願いしますね」

「はい！任せてください」

月明かりに照らされながら笑顔で答えた桂馬。なんだかそれはとても美しくマリアには見えてしまった。そのせいか、顔が真っ赤になっていた。

(……なんなんですか、その殺人マシンはノノノ)

笑顔が殺人マシンとは……桂馬恐るべし。

そのままマリアも屋敷に戻っていった。

そして時は過ぎ、ハヤテが白皇に初めて通う日となった。

#### 白皇学院、教室

「それにしても、この前の不審者君がまさかうちのクラスに転校してくるとは……」

「思ってもみなかったよ」

「僕はまだ不審者扱いなんですね」

ハヤテが自己紹介をしてすぐに休み時間となり、ハヤテは質問の嵐に。

それがようやく終わり、今は解放されている。ちなみにナギは今、教室にいなかったりする。

今話しているのは美希ともう1人は瀬川泉。髪が紫色で、髪を二つの赤い丸い飾りが付いた髪結びゴムのツーサイドアップが特徴だ。あともう1人、朝風 理沙がいる。こちらは髪の色が黒。



「しかし中々さえない顔をしている執事だな、ハヤ太君は」

「冴えないって、一応気にしてるんですけど。それに僕の名前はハヤテです」

「まあまあ、これからよろしくお願いするよ、ハヤ太君」

「なのだ」

「これからの面白いことに期待するとするよ、ハヤ太君」

「期待はされて困りますけど……はい、よろしくお願ひしますね  
それと、僕の名前はハヤテです」

と4人が談笑していると、雪路が教室に入ってきた。

「みんな、座って。今日、実は転校生のほかに新しい副担任の先生  
が来る予定だったんだけど、朝私が色々あつて忘れていたため、今  
から紹介したいと思うわ」

色々のところとは？と生徒全員が思ったことだが、あえてそこには  
触れないことにした。

なぜなら……大体の察しはついているからだ。

「では入ってきていいわよ」

「はい」

そうしてドアを開けて入ってきたのは、黒髪のショートヘアで、  
大人びた顔立ち。黒いネクタイがついている服の上白い白衣を着て

いる。

女性っぽい顔立ちをしている……というか桂馬だった。

「桂馬（さん）！？」「」

ハヤテとナギの2人は驚いて席を立つ。

「えっと……朝ぶりです。お2人とも」

「な、なんで桂馬がここにいるのだ！？」

「そ、それは話すと長いことになるのですが……まあ、とりあえず先生になっちゃいました、あはは」

「あははって……」

いきなりすぎて動揺しまくりの2人だった。

「……後で教えてもらうからな」

「分かりました。後できつちりとお話させていただきます」

そう言つてナギは座る。そのままハヤテも座った。

「自己紹介をさせていただきます、今日からこのクラスの副担任をさせていただきますことになりました、御剣桂馬といます。

皆さん、よろしくお願ひしますね」

と、綺麗に上品に挨拶をした。そして兵器ともいえる笑顔に、たいの女子は顔を赤らめる。

「さすが桂馬さんだなぁ……ってどうした、泉？そんなに驚いた顔をして」

「ふえ！？な、なんでもないよ、美希ちゃん」

「そうか？それならいいけど」

気になったがすぐに前を向いた美希。そこでは桂馬が生徒に質問されてた。

(……………みっくん……………)

泉はそう心の中で呟きながら桂馬を見つめていた。

### 第13話 先生ってなんだかストレスたまりそう（後書き）

ついにハヤテ、白皇入り！！

そしてついに桂馬君も先生に！！といってもかなり無理矢理ですが……。

今回は原作ではマリアさんが生徒手帳を渡す代わりに、桂馬君に渡してもらいました。

そしてなにやら泉は桂馬君を知っている様子……。

それでは前書きでも書いたとおり、桂馬君の自己紹介をしたいと思いません。

名前：御剣桂馬みつるぎけいま

性別：男

容姿：黒髪ショートヘア！。

性格：穏便。

今作品の主人公。誰に対しても優しく接する。というか怒ったすがたをあまり見ない。そして色々と謎が多い人物。（学校に行っていないのに、勉強が出来る等）

笑顔は殺人兵器とも呼ばれ、男性でもときめく可能性あり。

そして車に追いつくほどの速さを持つ。  
戦闘スキルも高い。

とこんな感じですよ。

桂馬君についてはおいおい明かされていくので、今後もよろしくお  
願いします！！

それではまた次回！

ちなみに次回はあることを募集したいと思います。

第14話 その名前どこかで……（前書き）

どうも、暑さに負けないデビルマンです。

今回は短めです。というか多分一番短いです。決して熱さとか勉強に負けたわけではないです、はい……。

そして今回は前回もよりもさらに執筆能力が落ちています。そこら辺もまたよろしくお願いしたいと思います。

長々とすみません、ではどうぞ……！

## 第14話 その名前どこかで……

キンコーンカーンコーン。

チャイムが白皇内で響く。それは授業終了とともに、放課後の合図だったりする。

現在、六時間目が終了し、放課後。放課後になるとがやがやと学院内が騒がしくなる。

部活に行くもの、家に帰るもの、それぞれだ。

そんな中、静かな教室で2人の男女が話し合っていた。

「えつと……何か用でしょうか？瀬川さん」

その中の1人は桂馬だ。そしてもう1人は瀬川泉。桂馬が今日副担任になったクラスの委員長だ（仕事はまったくしないけど）。

先程の質問からしばらくは雪路などの先生の授業の仕方を見学していた桂馬は先程の放課後のチャイムに隣の使っていない教室に泉に呼ばれた。

自分を呼ぶ理由がよくわからなかったが、そのまま行くことにし、今に至る。

ちなみに、ハヤテ達は剣道部に行っている。

「……私のこと覚えてないの？」

「え？」

泉の覚えてない宣言に戸惑う桂馬。

どこかで知り合ったっけ、と心の中で疑問に思った。

「えっと……一体どういう」

「本当に覚えてないの？私だよ！私！瀬川泉！」

「……すみません、今のところ頭に出てきません……」

しかし何故だかしらないが桂馬の中ではもやもやが出来始めていた。なんだか何か忘れているような……。

「そんな……。じゃああの日の約束も忘れちゃったの……？」

その瞬間、泉の目は涙で染まった。桂馬が何も覚えていないことになんかなりショックを覚えたのだろう。

「約束……？」

「うん、私達約束したんだよ……また会おうって」

そのとき、桂馬の頭の中に泉そっくりの少女が出てきた。

そしてその子に何か言っている姿がはつきりと見えた。その瞬間、頭の中で何かがはじけたような、そんな感じが桂馬の中を駆けめぐった。

「……もしかして、あの子のぬいぐるみの子？」

「！？思い出したの！？」

泣きながら嬉しそうな顔で桂馬を見つめる。



「……ええ。でも具体的には思い出せてはいませんが。でもあの時の子が泉さんだったとは……成長しましたね」

「みつくんもね。でもよかったよ……。思い出さなかったら、私かなり泣いちゃってたよ」

「す、すみません……」

「いいよ、別に　というかすでに泣いちゃってたし」

申し訳なさそうな顔をし、桂馬は謝る。女性を泣かすのは桂馬の中では結構気にしているようだ。

しかし泉はそれを気にしないように言う。

そしてその涙を制服の袖で拭こうとしようとした時……、

「はい、どうぞ」

桂馬がハンカチを手渡した。そのハンカチは、花柄でくまさんが描かれていたハンカチだった。

「可愛いハンカチだね」

「えっと、その……すみません。これしかなくて」

「だから謝らなくていいよ、全然。むしろ私があやまらなきゃいけないし」

そのままハンカチで涙を拭く。

(……みつくんの匂いがする……)

「泉さん……?」

「ふえ!?! な、なんでもないよ! はいこれ返すね! / / /」

若干トリップ中の彼女に桂馬が声をかけると顔を真っ赤にした。

「あっ、それじゃあここで。これから職員室に行かなければ行けませんので……」

ハンカチを受け取った桂馬はそのまま教室を出ようとする。

「みつくん……!」

「はい、なんででしょうか?」

「えっと、その……約束のことなんだけど / / /」

何故か顔を真っ赤にする泉。

「? 約束が、どうかしたんですか?」

「う、ううん。なんでもない。じゃあね」

「はい」

少々の疑問は残ったものの、桂馬はその場を後にした。

「約束……かあ……今思えば凄く恥ずかしい約束だったなあ / / /  
でもみつくん覚えてないみたいだし……。少し悲しいけど……。こ

れから頑張ればいいよね！

よし、瀬川泉、これから頑張るぞ」

夕日に照らされた彼女の顔は、とても嬉しそうだった。

『行っちゃうの、みつくん……』

『はい、僕はこれからいなくなっちゃいけないところがあるので……』

『……じゃあ、やくそくして』

『約束……？』

『うん。いつかまたであえたらね、わたしのおむこさんになって！』

『えー！？』

『だめ……？』

『あー、えっと……いいいですよ』

『ほんとうー！？』

『じゃあやくそくだよ』

『はい……やくそくです』

そして2人は再びめぐりあった……。

ちなみに、

「桂馬君、どうしたんですか？」

「いえ、先程なんだか懐かしい夢を見てですね」

「そうですか。それはどんな夢なんですか？」

「えっと、言うのが恥ずかしいんですけど……」

「いいじゃないですか。ここには私と桂馬君しかいませんし」

「……では、他の人には話さないでくださいね？」

「分かりました」

「ある女の子と……その結婚の約束する夢なんですけど……」

「……なんだか漫画みたいな夢ですね。それで桂馬君は約束したんですか？」

「ええ、一応返事は……その場の判断で、結構真剣に……」

(……自然とそういうことをしている桂馬君は、ある意味記念物ではないでしょうか)

「その女の子には？」

「夢で見ても顔が分からないので……今のところは。しかしあちらも僕のことなんて覚えてないだろうし……。きっとその女の子も幸せを見つけてると思いますよ」

「そっだといいですね」

（その女の子、結構近くにいたりしてっという展開なら結構面白いことになるんでしょうが。

まさかそんなことないですわよね）

と心の中で思いながら桂馬と一緒に掃除をしていくのだった。

……その思っていることが事実とは知らずに。

## 第14話 その名前どこかで……（後書き）

いかがでしたか？

今回は泉と桂馬の話でした。正直言ってこの小説を執筆してる中で一番書きたかった話です。

さて、前回後書きに書いた募集の件を発表します。

それは……オリジナルキャラクターを募集します！！

性別は女性、男性問わずです！なるべく面白いキャラクターがいいですね。

期限は今のところは決めてませんが、この一章が終わるところくらいまでは募集しようかなと思います。

（途中で期限が変わるときもあるので、そこら辺を了承の上お願いします）

なお、送ってきたキャラクターの性格等が話の都合上少し変わる可能性があります。お願いします。

決まったキャラクターはふこしつ！！で発表したいと思います。

皆さんの募集をお待ちしております。

以上、長々とデビルマンでございました。

第15話 学校のお仕事&桂馬の1日(前書き)

どうも、受験勉強がはかどらないデビルマンです。

……本当にどうしよう。誰か助けてください。

そんな作者はほっといてもいいので、今回のお話をどうぞ！

## 第15話 学校のお仕事&桂馬の1日

白皇学院、小学校の子から高校生が通う日本有数の私立名門校。

大富豪の跡取りなどのお金持ちがたくさんいるところでも有名だろう。中には、落第寸前の落ちこぼれも存在したりするが……。

そしてその多くが個性的な生徒達が多い。無論、それは先生とて例外ではない。

これはある新任の先生……御剣桂馬の1日の日常である。

朝5:00

「さてと……着替えるとしますか」

御剣桂馬の朝は早い。まだ誰もおきていない時間に彼は起きています。早速いつもの黒い服に着替えると、机の上においてある封筒を開ける。

「とりあえずは宿題を確認しないといけませんね」

そう彼は今、生徒が出した宿題の見直しをしている。まあ、本来ならこれは担任がやるものなのかもしれないが、彼の上司にもあたる桂雪路は色々忙しい？ため、彼が大体のそういうところを見てい



る。

その他にも今日の授業の内容の確認や、他の先生との話し合い、会議の内容など、色々あるのだがとにかく副担任であるつと先生という職業は忙しいのだ。

そして彼には先生以外の仕事もある。

朝6:30

「あら、桂馬君。おはようございます」

「ああ、マリアさん。おはようございます」

「それにしても今日も早いすわね。しかももう朝食の準備まで……」

「ええ、お嬢様とハヤテ君にはいいものを食べていただいでしつかりと勉強をしていただきたいので……」。

マリアさんの分も作っておきましたので、僕が出かけた後、食べていってください」

「なんだか本当に申し訳ありません。本来なら私がやるべきことを……」

「いえいえ、お気になさらず。マリアさんだって、夜遅くまでお嬢様の面倒を見たりしていますし……その他だって。正直言って僕はまだお嬢様との接し方がうまくないので……」。

なのでいつもマリアさんには感謝しています。マリアさんのおかげ

で僕はこっちの仕事に専念できるんですから」

この男、実にフォローがうまい。しかし彼は本気で言っているので下心などまるでなし。

「……なんだか少し恥ずかしいですわね」

「そうなんですか？あつ、お嬢様のことなら大丈夫ですよ。ハヤテ君が起こす手はずになっているはずです。

……すみません、もう学校に行かなければいけないので後はおまかせしてもよろしいですか。冷めてしまったら暖めなおしてくれればいいので」

そうして彼は学校に行くのだ。

## 白皇学院

「さてと、とりあえず……色々用意しますか」

午前七時、桂馬は学校にいる。

早すぎではないか？という人もいるのかもしれないが、そんなことはない。彼にとっては普通の時間帯なのだ。

もっともいつもは十五分遅いのだが、今日は少し特別だ。そして職員室で彼は1人、書類整理をする。

## 8時

「あつ、雪路さん。おはようございます」

「ん？ああ、御剣君か……。おはよう」

この時間になると、まだ眠そうな状態の雪路がやってくる。そのほかの教師はすでに席に着き、今日の準備をしている。雪路は少し回りの人達より遅い。……。今日は特に。

「はあく、なんだか昨日は凄く疲れた気がするわ」

「ああ、昨日は会議でしたね。結構長引いて、お屋敷に帰るのに時間かかりましたよ。おかげで執事の仕事も少ししかできませんでした」

「私なんてせっかく行きたいところがあつたにおじゃんよ。まったくなんていいタイミングなのかしらね。」

それより、御剣君、昨日頼んでおいたもの確認した？」

「ええ、昨日と今日の朝で確認しておきました。特に問題はなかったです」

確認とは宿題の見直しのことだった。

「そう。」「くろつさま。いや、忙しくてさ、手がつけられなかったのよ」

「そうですか。でも僕には教師の仕事をまた経験できたいいことだったので」

「そ、そう？それならよかったわ！さてと、私は今日の用意をしちやうから」

「分かりました」

そして今日も桂馬の教師の1日が始まる。

ちなみに……、

「雪路、お前昨日そんなに忙しくなかったろ」

「そ、そんなことないわよ！」

「でもいつものところで寝てたような……」

「ち、違うわよ。あれは……脳が私に命令して寝ろって言ったのよ」

「せめて言い訳するならちゃんとした言い訳にしろよ……」

裏ではこんな会話があったとさ。

## 昼頃

「ではこれで授業を終わりたいと思います。

分からないことがあったら質問してきてください」

授業終了の鐘がなる。それと同時に桂馬の周りに少数の生徒が集まる。

どうやら分からないところを聞いているようだ。

今まで四時間ぶつつづけで桂馬は授業をしていた。

実は桂馬は大体の教科を教えることが判明したため、彼は他の先生の授業を参考しながら教えることにした。

結果は……かなり良好のようである。生徒から面白い授業だと好評のようである。

ちなみにさっきの授業の教科は日本史である。

一通りの質問が終わり、桂馬は教室を後にする。そして職員室に入り自分のバックから弁当を取り出す。

どうやら昼食タイムのようだ。

桂馬にとって……いや、白皇の教師にとって昼食は生命線の一つ。取り逃したら、後の仕事で命取りになる。

それほど重要なのだ。

「ふう〜、やっぱり大変だなあ、先生つて。でもなんだか充実します」

広場みたいなところのベンチに座りながら桂馬は弁当を広げて呟いた。

「ほう〜うまそうな弁当ですね〜」

「今日は結構凝ったんですよ……って美希さん!？」

後ろからひょっこりと弁当を覗いたのは花菱美希。桂馬の担当するクラスの生徒の1人。

「私もいるぞ!」

「だぞ〜」

その後ろから理沙と泉もでてくる。

「皆さんおそろいのように……でも僕がなんでここにいるのがわかつたんですか？」

「先程見かけて面白そうだからついてきた」

面白い、たったそれだけの理由でついてきたのを聞いて桂馬は苦笑いをする。

「というのは建前で、本当は今日は一緒に食べようかなと思ってきたんだけど」

「そうですね。僕は全然かまいませんけど」

「ならば決定だな」

そのままベンチに座る3人。そして弁当を開く。

「うわぁ、皆さんのお弁当うまそうですね」

「そうか？まぁ、確かにうまいけど」

「でも桂馬さんのおかずもうまそうですね。……どれ、ではさっそく」

理沙は箸でそのまま桂馬のところに入ってる玉子焼きを掴み、口に入れた。

「こ、これは!？」

「どうした、理沙!？」

「なになに、リサちゃん!？」

驚いた顔をしている理沙に美希、泉が反応する。

「これは明らかに玉子焼きのレベルを超えてるぞ!!なんだ、この口の中に入った瞬間、とろけるような感覚は!？」

しかもその後も続く味覚のフレーバー……これぞ玉子焼きの革命!」

「革命……だと……桂馬さん、私にもくれないか!？」

「私も食べてみたい」

「い、いいですよ。いっぱい作りましたので」

あまりにも勢いがすさまじいのでたじろいってしまった桂馬。

彼は今、こう思っているだろう、そんなにつまく作ってはいない、と。

「う、うまい!!しかも噛めば噛むほどさらに味が深くなっていくように作ってある。」

な、なんてやつだ!三千院の執事の玉子焼きは化物か!？」

「なんだか食べて幸せになるよ」

美希、泉も満足している模様。

一方の桂馬は満足していただけたようで、ほっとしていた。

そんな感じで昼ごはんと一緒に生徒と食べて、桂馬はまた授業と言  
う名の戦いに向かうのだった。

### 放課後

放課後になった。

クラスでは先生の号令とともに教室から飛び出すものがたくさんい  
た。

中には教室に残り、宿題をする者や、今日提出しなければなら  
ないのやってなかったので今やっているうっかりさんな者などが残っ  
ている。

桂馬はそんな生徒達を待つ1人だ。

「桂馬さん、ではまたお屋敷で」

「また後でな、桂馬。今日帰ってきたら昨日のリッレーの続  
きをやるぞ！」

昨日の屈辱を返す！」

「分かりました。お嬢様。絶対に抜かせませんよ！」

あと、ハヤテ君、僕がいない間お願いします。

では2人とも、またあとで」



2人が教室に出て行くのを見送ってから、再び教室に入る。

「先生、できましたー！」

夕日が教室を照らす中、最後に残った女子生徒が桂馬にプリントを渡した。

「先生、ごめんね。残ってもらって……」

「全然気にしてないですから大丈夫ですよ」

「でも……」

沈んだ顔をしているのが気になった桂馬は声をかけることにした。

「何か……悩みごとでもありますか？」

「え？」

「もしよかったら相談してください。役に立てるかどうか分かりませんが」

「先生……だったら聞いてもらおうかな」

「はい、なんでも言ってください」

彼女の話は最近、勉強がうまくいかないことだった。

「そうですか……小テストの出来がいつもより悪いと聞きましたけ

「ど、そういうことですか」

「うん、なんだか勉強してもうまくいかなくて。

このままじゃみんなにおいてかれちゃうと思ったら怖くなって……」

そういうと彼女の目には涙が。

よほど怖いのだろう。自分が周りの友達に置いてけぼりにされるのが。

悔しいのだろう、友達が先に言ってしまうのが……。

そんな彼女に思ったことを桂馬は優しく語り掛けることにした。

「怖いですよ。そして……悔しいですよ。

友達が先に行ってしまうのが」

「……うん」

「……いいじゃないですか、それでも」

「え？」

「逆にそれがあなたの勉学を向上させる理由になると僕は思います

よっ」

「どういう意味だろうか。」

その女子生徒は桂馬の言っていることがいまいち理解できなかった。

「ど、どうして？」

「勉強するときにあなたが考えることはなんですか？」

「えっと、とりあえずここまでやろう！とか、この点数とるぞって目標を決めることかな。そうすればやりやすいし……ってあ、そっか」

何かに気付いたようだ。それを見て微笑む桂馬。

「そうです。

僕があなたに考えてほしかったことはそれです。あなたの周りの友達を目標にすれば、後は自然と勉強ができるわけです。しかもいいことに友達と競えあえる。これでさらに勉強に精がでると思います。

なんせ競うことでさらなる目標を見つけられるし、相手と見せ合うことで、どこが悪かったなどの自分の気付かない指摘をしてくれますからね。

まさに一石二鳥です」

「なんだかやる気がでてきた！先生、ありがとう」

「いえいえ、僕もあなたが元気になってくれてよかったですよ。最近元気がなくてお友達も心配していましたから」

「もしかして気付いてたの？」

「ええ、いつも全員の顔色は伺っているつもりです。教師として当然のことなので」

「なんだか先生がみんなに化物って言われる理由が今回でわかったような気がする」

「なんですか、その化物って……」

確かに、色々含めて化物である。

「じゃあまた明日、先生」

「はい、また明日!」

元気よく返っていく彼女を見送った後、教室の電気を消し職員室に戻る。

「すみません、雪路さん。少し生徒と話していて遅れてしまいました」

「別に大丈夫よ。気にしなくてもいいわよ」

ペコリと頭を下げた申し訳ない顔をする桂馬に対して、よづきに雪路は答える。

「では明日の内容について話しましょう」

「これといって明日は特にないわよ。今日と同じ。」

「……だから今日は早く帰りなさい。ナギちゃんと約束してるんですよ」

「え、いいんですか?」

「こづいつときは素直に受け取るってものが社会人というものよ。それに今日は書類も手伝ってもらったし」

「……分かりましたでは素直に帰らせてもらいます。  
また明日です、先生！」

雪路の粹<sup>いぎ</sup>な計らいにより、桂馬は帰らせてもらえることになった。

「ふう〜。まあ、これくらいしてないと神様にバチが当たるかもしれないからね」

「すでに当たってもおかしくないだろ……」

雪路に対してツツコンだ薫京ノ介の姿が、職員室であったという……。

「……俺の紹介は？」

### 深夜0時

「う〜ん。とりあえずこれで一通り終了ですかね」

よい子ならぐつつすりな時間帯に彼はおきていた。この時間まで、お屋敷で残っていた仕事をしていたのだ。

例え学校の仕事で疲れてても彼にお休みは許されないのだ。

「後は部屋に戻って、小説の執筆の続きを……あつ後、コミカライ

ズするに至つてのデザインとかも考えなきゃダメですね……。  
それと、あとえっと……」

この後もまだするのかよ、と読者の方もツツコミたくなるだろう。  
しかしそれが桂馬君なのだ。

「桂馬さ〜ん」

「ハヤテ君、どうしたんですか？こんな時間に……」

部屋に入ろうとドアノブを握った瞬間に桂馬に声をかけたのはハヤテだった。

ちなみに寝巻き姿だ。

「もしかして今まで仕事を？」

「ええ。少し気になったところを掃除して、それから朝のお弁当の仕込みをして遅れてしまいました。

本当はもう少し早く終わるはずだったのですが」

(相変わらずこの人は凄いな)。学校の皆さんが噂するのも分かる)

噂は転校して日が浅いハヤテにも伝わっていたようだ。

「なんか、すみません。桂馬さんは先生としての仕事があるのに……」

「気にしないでください。これは僕が選んだことですから。むしろ僕は忙しいほうが嬉しいです」

( やっぱりこの人は色々と凄いなあ。というか凄いの次元を超えているような気がする…… )

凄いの次元を超えるとという表現はよく分からないが、とりあえずハヤテは改めて桂馬の凄さを理解したようだった。

「 あっ、そうだ。桂馬さん、今日オレンジジュースを作ったんです。よかったらどうぞ 」

「 ありがとうございます。ちょうど甘いものがほしかったところだったんですよね 」

「 やっぱりですか。そう思って先程冷蔵庫に入れていたのを持ってきたんですよ。 」

頭を使う仕事ばかりの仕事してるから、甘いもので、爽やかした飲み物なんてどうかな、と思ひまして 」

こちらにも負けじの気遣いさである。やはりこの男できる。

「 ……ハヤテ君、そこまで相手のことを気遣えるなんて凄いですね。きっとモテますよ 」

「 そ、そんなことないですよノノノ 」

実際モテている。

「 それでは僕はこれで……お休みなさい 」

「 はい、おやすみなさいです。ハヤテ君 」

暗い廊下の中に歩いていくハヤテを見送った後に部屋に入り、桂馬はまた仕事をするのだった。

「凄くうまいです〜 …… よしっ、元気でできました！  
頑張ろう！〜！」

朝4:30

「…………… やつと今日の分、終わりました〜」

少し外が明るくなった頃、桂馬はようやく今日の分の仕事を終えた。

「しっかし今日はだいぶ進んだなあ。 …… きっとハヤテ君がくれた  
オレンジジュースのおかげですね」

ちなみにそのオレンジジュースが入っていたガラス瓶は空っぽにな  
っていた。

「今度是非作り方を教えていただきたいですね。

…………… それじゃあ、早速今日の仕度しましょうかね。 昨日仕込んでお  
いた料理もいい出来合いでしょうし。

ちようどいいから後で見にいきましようかね」

そうして彼は寝ずにまた朝を迎える。



朝5：00

「さてと……着替えるのでしょうか。  
今日も1日頑張らましようかね」

## 第15話 学校のお仕事&桂馬の1日(後書き)

今回のお話は学校に入ってからの桂馬君の1日をお送りしました。とりあえず、皆さんが思ったことは桂馬君が異常すぎることだと思います。

……自分で書いていて少し恐ろしいです。(笑)

オリキャラ募集の件、早速案を投稿していただきありがとうございます！

どれも個性的で、僕には思いつかないキャラクターばかりなので、嬉しいかぎりです!!

まだ募集してるので、投稿してみたい方はどんどんしてくださいねもちろん、強制ではないので投稿しなくても大丈夫です。

それではまた次回!

次回はようやくあの子が登場です。

第16話 地味のスキルって意外にいいよね(前書き)

前回より十日以上たってしまいました。

夏休み中はなるべく早く投稿したいですけど中々うまくいかないですね。

そして勉強がはかどりません。誰か……助けをってこれは前にやりましたね。

そんな作者は無視して、今回もどうぞ!!

## 第16話 地味のスキルって意外にいいよね

「桂馬君、今日は一日お休みしてていいですよ」

「え？急にどうしたんですか？マリアさん」

ある休日の日、桂馬はお屋敷で早速仕事をしようと思った矢先、マリアに止められた。

「僕……何かいけないことしてしまったんでしょうか？もしそうなら……」

「いえいえ、全然悪いことなんてしてませんよ。……むしろいいこととすぎで逆に感謝したいくらいです」

「そ、それならばどうして」

「最近、桂馬君、まともに休んでいませんよね？」

マリアの言葉にギクツとする桂馬だが、平静を装い、ごまかす。

「そんなこと……あるわけないじゃないですか。昨日だってちゃんと寝ましたし」

「あなたが寝るといふ時間帯はたったの一時間を指すんですか？」

「え？僕にとってはそれくらいが普通なんですけど……」

（……やっぱり桂馬君に普通の常識は通じないんですね）

桂馬の言葉に少し驚きながらも、もう今更か、と思うマリア。そしてそのまま、質問が始まった。

「ハヤテ君の報告だと寝ていない時もあるようですが？」

「そ、それはきつと気のせいですよ。たぶんハヤテ君が幻覚でも見たんじゃない」

「あのハヤテ君がそんな嘘をつくと思いますか？」

確かにハヤテが嘘をつくということがないだろう。

「……桂馬君、正直に言うてください。それとも……私には教えてくれないんですか？」

これでも凄く心配してるんですからね？」

「マリアさん……。すみません、では。確かに、ここところは寝ていませんね。」

色々とおかげで」

マリアの心配な眼差しに心を痛めた桂馬は申し訳なさそうな顔をして頭をかきながら言った。

「……だったら今日は休んでください。いいですね？何か仕事したら怒りますからね？」

「……はい、わかりました」

しぶしぶだがマリアの恐ろしい気迫に桂馬は了承するしかなかった。

「あつ、だったら今日は外で散歩でもしてきていいですか？」

「全然かまいませんわ」

「じゃあ、行ってきます」

そう言つて外に出て行った桂馬。

「……本当は寝てもらいたかつたんですけど、仕方ありませんわね」  
その後ろ姿を少しあきれたように頬に手をあてて見送ったマリアだった。

### 負け犬公園

「はあ〜……なんだか憂鬱な気分だなあ〜」

負け犬公園にため息をもらしながら歩いている髪の毛の両側をリボンで止めている女の子がいた。

彼女の名前は西沢歩。なんでもかんでもやるのが普通に見えてしまふある意味凄い子だ。

「なんでもかんでもってどういふことかな!? バカにしてるのかな!?」

彼女が憂鬱なのにはある理由があるのだ。

「軽くスルーされたよ……」

彼女には好きな男の子がいる。その男の子はわれらが不幸主人公綾崎ハヤテである。

ちなみに彼女がなぜハヤテを好きになったかは省かせてもらう。

とにかくそのハヤテについてこの間告白したのだがなんと断られてしまった。しかもその断った理由がすさまじくひどかったので、こうして落ち込んでいるのだ。

しかしまだあきらめてないようである。

（あんな理由でハヤテ君が断るのかな? ……何か理由があるんじゃないかな? ……）

……それでも私を好きなわけじゃないよね。きっとハヤテ君だって好きな人くらいいるだろうし……ここは諦めたほうがいいのか……）

自分を納得させるために自問自答する。

（……でもやっぱり……私は……ハヤテ君のこと……!）

真剣すぎて前を見てなかったのだろう。気が付くと人とぶつかっていた。

「いてえ! …!」

「あつ、す、すみません!!」

歩がぶつかつたのはいかにも某世紀末漫画にでてくる人を連想させるモヒカンだった。連れの1人はスキンヘッド。2人とも服装からしてどこかの学校の生徒だった。

(どこの世紀末の人達なのかな……)

「嬢ちゃん何してくれとんじゃ!!」

「おかげでえつちゃんのかわいらしい肩が色々次元のようになってるじゃねえか!!」

(色々次元のつてなになかな!?それにかわいらしい肩って……色々理由がひどすぎる気がするよ……)

これが世の中で言う当たりやというやつである。

「ったくよ。仕方ねえ。ちょっと来てもらおうか?」

「えつ……」

「えつじゃねえよ。とにかく来いって言ってるだろ!!」

そう言つてモヒカンの男は歩の手をつかむ。

(た、助けて……誰か。ハヤテ君……ハヤテ君!!)

その名を呼んでも彼は来ない。それはわかつてても歩は叫ぶ。



「JG……!!」

しびれを切らしたのか。男は右手で歩を殴ろうとする。

（ハヤテ君!!）

目を瞑りさらにまた叫ぶ。

（……あれ？）

いつまでたつても殴られる衝撃がこなかった。目を開けるとそこには一人の青年が男の手を止めていた。

「……なんだ、てめえは」

「僕ですか？僕は……通りすがりの執事です」

その青年、御剣桂馬はにっこりとほほ笑みながら言った。

（きれいな人だな……／＼／＼）

そんなほほ笑みは少し歩には効いていた。

「はあ？執事？なにそれ冗談？」

「……すみませんが冗談ではなく真実です。それにあなたの存在そのものが冗談に見えて仕方がないんですけど」

「なんだよ存在そのものって!？」

「いやだつてその姿をみたらどこの世紀末ですか、ってツッコミたくなりますし」

「あんまりそれ言うな！結構これでも気にしてるんだよ！言われるの覚悟の上の恰好だよ！でも仕方ないじゃん！だって親父に切ってもらったからこうなったんだもん！」

「……それはなんとというか……よかったですね」

「これのどこがよかったんだよ！ちくしょう！むかつくんだよ、この野郎っ！」

「危ない！」

男はそのまま桂馬に殴りつける。渾身の一撃だろう。余計に怒っているせいもあってかそのこぶしは普通のチンピラよりは威力があるようにみえた。

「……力がこもってないですよ、全然」

「な……」

しかしそれは簡単に桂馬の手で止められていた。

「な、なんで……なんでだよっ！！」

「あたりまえでしょう。」

……女の子に手をだす最低な人の拳なんて簡単に止められますよ！  
「！」

「っ!？」

「……どんな理由があったかは知りませんが、ちゃんと話あってください。

そうすればこんなことには

「うるせえ!!俺は弱くねえ!最低でもねえ!!」

桂馬の手から右手の拳を抜き取り、かなり後ろに下がる。

「……わかりました。全力で来てください」

「ははっ!!余裕こいてるつもりか!!」

「……さっさとかかってきてくださいよ。あなたこそそう言って余裕かましてるつもりですか?だとしたら相当自信があるのでしょうね」

「……てめえ、死ね!!」

そのまま突撃してくる男を桂馬は構えずに迎え撃つ。

(というか私の存在忘れられてるような……)

気のせいだ。

(そうかな……)

歩が疑問に思っている間に男は桂馬にだんだん近づいていく。

「見る！！これが俺の必殺技、シャイニング・ファイ」

「そんな中二病まっさかりのパンチ喰らってたまりますかー！！」

言い終わる前に相手をふっとばした桂馬。

(なんだかあっさり終わったー！！しかも最後まで言えずに……)

ひそかに憐れだと思った歩であった。

「……くそっ、俺のビクトリー・パンチが……なぜだ！！」

(さっきと名前変わってるのは気のせいかな？でも名前のセンスは変わらない……)

今度は気のせいではない。

「……それはあなたの思いが原因ですよ」

(いや多分そのネーミングセンスにあると思う……)

ひそかにツッコミをしておく歩。

「意味わかんねえ」

「まあ簡単に言うと、あなたは弱いです。心が。だから自分の一番を發揮できないんですよ」

「……………」

「多分色々あってそうなってしまったんですよね。分かりますよ。だってあなたの目を見てると明らかに動揺してます」

それは男にとっては凶星だったようで驚いた顔を桂馬に向けた。

「……………何があったかは存じませんが、そういうときは周りの友達とかに相談してみるものですよ」

「……………相談して何が変わるんだよ」

「変わりますよ、絶対に。何かはわかりませんが。あなたの周りの世界は変わりますよ。ほらあそこに今まで空気になってたスキンヘッドの世紀末二号君もあなたのお友達ですよね？」

「ひどい言いぐさだなおい!!」

そう言われて少し落ち込んでいるスキンヘッド。  
彼の心は今頃ずたばろだろう。

「とにかくきつと変わりますよ。それでもダメだったら……………」

そう言って桂馬はポケットの中にあるものを取り出す。

「……………携帯番号」

「そこに電話してください。なんでもとはいいませんができる範囲なら相談にのりますから」

「……ふんっ。そんな機会二度とねえよ。  
でもありがとうな。なんだかすつきりした」

「そうですね、それはよかったです」

笑顔でさわやか。それを見るととても男の心の中はすつきりした。  
しかし恥ずかしいから決して顔には出すまいと俯きながら去る。

「おい行くぞ」

「わ、わかった」

「それと、後で相談に乗ってくれ」

「……おう。いいぜ！」

そのまま男達は去って行った。

「ふう〜中二病感丸出しでしたね。……あの、大丈夫でしたか？怪  
我とかしてませんか？」

「は、はい。してません」

心配して見る桂馬に手を振りながら歩は証明する。

「そうですね……よかったです」

(……本当にきれいな笑顔だな〜／／／)

本当にきれいだった。何者にもそまらない、そんな笑顔。いうなれば純粹。

「しかし……お腹すいてしまいました。……よければ一緒に食べませんか？」

もちろん僕のおごりですけど」

「え？大丈夫ですよ、私お腹減ってないですし」

言っている途中で空腹を指す音になる。なったお腹は歩からだった。

（は、恥ずかしい……／＼／＼）

恥ずかしくて歩は顔を赤くしながら俯いた。

「はははっ、では行きましょうか？」

「……はい／＼／」

空腹感には逆らえず、了承し、桂馬の後に付いて行った。

#### ファミレス店内

「ふう〜、おいしいです〜」

あれから2人は近くのファミレスでごはんを食べている。もちろん桂馬のおごりだ。ちなみに彼らはすでに自己紹介済みだ。

「あの、本当によかったんですか？食べてしまっ……」

「全然構いませんよ。じゃんじゃん食べてください。今なら全然お金に余裕あるので」

そう言っただけのまま笑顔で目の前にあるハンバーグを食べる。とてもおいしいそうに食べるように歩には見えた。

「じゃ、じゃあ遠慮なくいただきます！」

自分も目の前においてあるオムライスを一口。

（うまい……。やっぱりお腹減ったから余計にかもしれないけど）

空腹が絶好のスパイスとはこのことだろう。いつもより一口一口がおいしく歩は感じた。

「……そういえばなんだか落ち込んでいましたよね？何かあったんですか？」

「え？」

突然の質問に驚いてしまっただけ言葉を返せなかった。

「えっと……まあ悩んでると言えば悩んでいますね……」

「よかったら相談してください。いやなら別にいいですけど。」

それでも先生をやっているのだから、それなりに頼りになるはずですよ」



まだなり始めたばかりですけどね、と苦笑いで言う桂馬に、歩は言ってみることにした。

「……私、好きな人がいるんです。実はこの前その人に告白したんですけど、断られてしまったんです。

でも私……諦めきれなくて！でも断られてるんだし、もしその人に好きな人がいるなら私は迷惑かかって思っ……」

そう言っている歩は今にも泣きそうな顔をしていた。

「なるほど、そうでしたか？言うなれば恋の悩みですね」

「そうです……変ですよ、私。こんなこと話して」

「いえいえ、全然変じゃないですよ。ただこういう相談は初めてなので少し対応に困ってしまっ……」

これでは相談者として失格ですよ、あはは」

申し訳なさそうな顔をした桂馬は少しコップに入っている水を飲んでから話した。

「……こういうことは僕は疎いのであんまり分かりませんが、西沢さんの思った行動を試してみればどうですか？」

「思ったこと？」

首をかしげる歩はそのまま桂馬の言葉に耳を傾けた。

「つまり自分の気持ちに素直になるということですよ。あなたはその男性を好き、だったら悩まずにそれでいいと思うんです。」

後はそこから考えればいいんです。『好き』という信念自体を迷っているなら、もういつそその人のことを忘れるべきです」

「そ、それはできません!!」

桂馬の言葉に対して強く言う歩。

それを見て桂馬は笑顔になる。

「だったら大丈夫ですね。ダメならもう一度です。迷惑?そんなことありませんよ。その男性がそんなことを言うなら、僕はその人を問答無用で殴ります。」

この世で存在してはいけない人なんていないんですから。だからもつと自信を持つてください。自分に。

そうしないと……誰かに取られてしまいますよ?」

「……なんだろう、そこまで真剣に相談に乗ってくれる人初めてです。変ですね」

「ちょっとひどくないですか!？」

「でもそういう変な人、私は嫌いじゃないですよ。だから……頑張ってみます!!」

「………そうですか。頑張ってください!応援してますから」

「はい!!」

頭を下げてお礼を言う歩を桂馬はうれしそうに答えた。

「あ、じゃあ私こっちなんで……」

「あつ、そうですか」

あの後、桂馬と歩はしばらく散歩をした。そして今に至る。ちなみにその過程の中でアドレス交換を済ませているようだ。あたりはすっかり夕暮れ。空は赤く染まり、それがなんともきれいだ。

「あ、あの、今回は本当にありがとうございました！」

「いえいえ、全然。西沢さんのお力になれたのなら幸いです」

「歩でいいですよ」

「……そうですか。では歩さん。これから頑張ってください。ではこれで。また」

そう言って去っていく桂馬。その後ろ姿はなぜかハヤテと同じように歩には見えた。

まあ、ほんの一瞬だが。

「桂馬さん、また相談に乗ってもらってもいいですか？」

少し大声で桂馬に言う歩に笑顔でうなずく。そして本当に桂馬はそこから去って行った。

「よし、今度から頑張るぞ！！私の思つがままに突き進むぞ！！」

そして彼女は夕日に向かって走っていく。その姿は恋する乙女であった。

ちなみに、

「さて、どうやってハヤテ君を私の元に沈めようかしらね」

「……なんだか姉ちゃん怖い」

家に帰って早速作戦を考えている歩に若干の恐怖を覚えた一樹であった。

「　　」

「どうしたんですか？なんだか帰ってきてから上機嫌ですけど……」

「いえ、なんだか恋する人を見ているのはなんだかいいものですね

」

「は？」

桂馬の発言に疑問を覚えたハヤテであった。

第16話 地味のスキルって意外にいいよね（後書き）

というわけで今回はハムスターこと西沢歩が登場です。

やはりいい動きしてくれますよ、歩は。

個人的に好きなキャラクターですね。

さて、オリキャラ投稿の有効期限が決定したのでいいます。

期限はちょうど区切りのいい20話まで!!

それ以降は断らせていただきます。申し訳ございません。

ではでは、また次回で。

ちなみに感想待ってます!! 質問とかでもいいですよ  
いてみてください。

気軽に書

第17話 有名人はばれると色々きつい……（前書き）

ついにハヤテの映画が公開しましたね。

見に行きたいのですが、行けそうにありません……。

今回はやばいほど駄文だと思いますが、気にせず見てくれればうれしいです。

それではどうぞー！

第17話 有名人はばれると色々きつい……

「じゃあ今日はこれで打ち合わせは終わりでいいわね？」

「はい、構いません」

とある喫茶店で2人の男女が話し合っていた。というか打ち合わせをしていた。桂馬と久しぶりに登場した川島監理である。（分からない人は一話を見てみよう！！）

「本当よ。やっとして感じだわ。私は影が薄いとかそういうわけじゃないのに。だいたいあなた分かったのかしら！そんな括弧で読者はごまかせても私は騙されないわよ」

「あの、誰に言ってるんですか？」

「気にしないで。気にしたらあなたの人生は終わるわ」

「ええ！？そ、そうですか。だったら気にしないでおきます」

「それが適任よ」

何事もなかったように言う監理に桂馬は疑問だけが残った。しかし気にしないことにした。

「……あなた最近変わったわね」

「え？そうですか？」

「ええ、なんだかすつきりした顔をしているわ」

笑みを浮かべながらこちらを見る監理を見て桂馬は考える。

……もしかしたらお嬢様達のおかげかもですね、と。

「？何笑ってるの？」

「……いいえ、感謝しているだけですよ」

「は？……なんだか分からないけど、まあ担当としてはうれしいからいいわ。じゃまた来週ね」

「はい！」

手を振り笑顔で監理を見る桂馬は、監理にとっては前よりも輝いて見えた。それがなんだか嬉しくて、笑顔になる。

「……で私の出番は終わりなのかしら？」

そして桂馬の後姿を見送るのだった……。

「無視しないで答えなさいよ！」



(僕がああやって言われるようになったのも、全てはお嬢様達のおかげ。

これからはもつとお嬢様達のためにも頑張らなければ!!)

あれから桂馬は帰ってきて早速仕事をやり始めた。しかもいつもの倍は張り切っている。

「よお、桂馬」

「あつ、タマ。お久しぶりです」

「いや、確かに出てくるのは久しぶりだけど……一応屋敷にはいるからな？」

そんな桂馬のところにホワイトタイガーのタマがやってきた。

「ところでよ、なんでそんなに張り切ってるんだ？」

四本足から二本足になって壁によっかかりながら言った。

「いや、ちょっと嬉しいことがあります……。でそれがお嬢様達のおかげなのでこれからはもつと頑張らないと思ひまして」

「ほうほう、それはたいそうなこったな」

桂馬の言葉に素直に関心しているタマ。

「でもよ、お前、まだ言っていないことあるだろ？お嬢に」

「え？……小説のことですか？」

そう、あれから言おうか言わないか桂馬は迷っていた。中々言いだせず今に至る。

「お嬢のこと慕ってるなら言ったほうがいいんじゃないか？」

「うう……そう、ですね。分かりました！！今から言っていますね！！」

ありがとうございます、タマー！！」

「お、おう、まあ頑張れや」

そう言っつて掃除用具片手に桂馬はナギの部屋へ向かっていった。

「……あれ、これもしかして俺いいことしたんじゃないかね？ってことは俺の時代が来たってことか！！」

一人テンションが上がるタマを残して……。

### ナギの部屋前

「ふう〜なんだか緊張します」

ドアの前で戸惑っている桂馬が。ドアノブに手をつけては放す、これの繰り返しをしている。

(迷っていても前には進めません！！応援してくれてるタマのためにもここは頑張らなければ！！)

応援してるかどうかは分からないが、とにかく覚悟を決めたようだ。顔を手で叩いて目を見据える。

(当たって砕けるです！！)

そうして少し勢いよくドアを開けた。中に入るとナギが座って漫画を読んでいた。

「あれ、桂馬じゃないか？どうした？というか部屋に入る前にはドアをノックしろといったはずだぞ」

「す、すみません。つい忘れてました」

「まったく、桂馬は妙なところが抜けているな」

ナギはそういつと前を向いていてペンを持っている。どつやら漫画を描いているようだ。

(そういえばお嬢様は漫画を描いているんですけどね)

と思いつながら少しのぞこうとすると、

「ば、バカ！まだ見てはダメだ！まだカイザーフキナが覚醒していないのだ！！」

「す、すみません!!」

「まったく……」

と言って怒鳴られた。

(カイザーフキナって誰のことでしょうか?)

多分知る必要がないと思う。

(ってこんなことをしている場合ではないです!!)

「あの、お嬢様!!」

「なんだ?」

漫画の絵を描きながらナギは桂馬の言葉に耳を傾ける。

「実は僕……小説家なんです!!」

「へえ、そうなのか……」

かなり本気で言ったであろう桂馬に対してナギは普通に返事した。

(え?軽く流されましたよ……)

「あ、あの、なんとも思わないんですか?」

「今更何を驚こうというのだ?お前が小説家であることなど……っ

てええー！？小説家！？」

(あつ時間差ですか……)

平然としていた顔が一瞬にして驚きが変わったナギ。

「なんか、すみません。中々言いだせなくて……」

「ま、まあいい。というか驚いているからそんなことがどうでもよくなる。でも桂馬は素直だな。」

別にわざわざ言わずとも……ま、多分そしたら怒っていたんだろうけど」

「す、すみません」

申し訳なさそうな顔をして桂馬は謝る。

「だからもういいって。別に怒ってないから。これではまるで私が悪者みたいではないか」

「そ、そうですね……すみません。ふふふ、やっぱりお嬢様は優しいですね」

「だからそんなんじゃないってば！！これくらい普通だ！！／／／」

顔を赤らめ、後ろに向いていた体を前に向いてそっぽを向くナギ。そんな姿に桂馬はほほ笑みを見せる。

「ところで桂馬……お前の書いている小説の名前は？」

後ろを向きながらナギが言う。

「えっ？」

「さすがに聞いたんだ。とりあえず読んで評価するよ。で名前は？」

「……『PRIDE』ですけど」

「そうかそうか『PRIDE』か。………つてええーー  
！っ？」

二回目の驚き。

「ど、どうしたんですか？」

「どうしたもくそもあるか！お前『PRIDE』つて今超面白いと絶賛されてネットの中でもあんまり批判がないと有名なひっそりラノベではないか！！」

「な、なんだかすごいんですね」

自分がここまでの評価をされているとは知らなかった桂馬。照れているのか、顔を赤くしながら頭をかく。

「私も凄く気に入ってて一巻からのファンなんだぞ。まさかこんな近くに『イチハラカズト』がいるとは……」

なんだか有名人みたいな扱いである。

「……なあ桂馬、いや『イチハラカズト』」

「は、はい、なんででしょうか？」

本名でなく作者名で呼ばれた桂馬は少し疑問に思いながらも次のナギの言葉を待った。

「……どうやったらそこまでうまくストーリーをかけるのだ？」

「ストーリーですか？」

「そうだ。今あるところで悩んでいてな。それで意見を聞きたい」

「そうですね……」

右手を顎に当てて考える仕草をする。

「お嬢様は普段はどのような感じで書かれているんですか？」

「私の好きなように書いている。思いついたことはすぐに書き込む」

（あゝ、僕も子供のころそんなことやってましたね）

「……お嬢様、それでは自分自身が納得したストーリーは作れませ  
ん」

「なんだと」

若干怒り気味にナギは答えた。

「ご無礼なことを言ってますみません」

「わびはいい。何故駄目なのかを説明してくれ」

「はい。……まず思いついてすぐに書く。いいことですけど、これは本来はすぐには書かず普通の用紙に書くのです。」

「なぜなら後でまた思いついた設定とめちやくちやになってしまいうからです。そう言ったことはないですか？」

「……ある時はある」

「それと……自分が満足して書けるのはとてもいいことなんですが、それで読み手はどうなんでしょうか？」

「読み手？」

「ええ。今お嬢様が書いているものは漫画賞に応募するのかわしないかは分かりませんが、もし応募するならそれを読む審査員、そして読む読者のみなさん。」

「その人達のことを考えたことはありますか？」

「ああ、そのことなら大丈夫だ。なぜなら私の漫画はすでに受け入れられている」

「それならいいです。それなら僕がいうことはありません。」

「でもアドバイスとして……全て終わった時、一回自分の漫画を見直してみる事です。それとストーリーのことですけど、自分も書いていて驚くことをすればいいんじゃないでしょうか？そうすれば受けはいいと思いますよ」

「分かった。しかし驚くこと、か。」



おっ。早速思いついたぞ！！ありがとう、桂馬！！よし、これから伊澄も呼んでストーリーを考えるぞ！！」

ナギは席を立って片手をあげてやる気をだしている。それを見て桂馬はほほ笑む。

「それでは頑張ってください」

「おう、今度見せてやるからな」

「はい、とっても楽しみにしております」

そして桂馬は早速伊澄に電話をしていて熱く語っているナギを残して部屋を出る。

「……これでお嬢様が気づいてくれればよかったですけどね。まあ大丈夫ですかね。」

さてと、気持ちはスッキリしたし、これからはよりいっそうお嬢様達のために頑張るとしますよ！！」

そうして桂馬もやる気をだして、掃除用具を両手に今日も桂馬は掃除を始めた。

その後、ナギの部屋では一日中熱い答弁が繰り広げられた。もちろん内容は我々にとって理解しがたいものだった。

「なあなあ、ハヤテ、俺って天才だよな？」

「なんでそんなにテンション高いの？」

第17話 有名人はばれると色々きつい……（後書き）

久しぶりに藍理の登場です。いや、本当に出せなくてごめんという状態でした。

質問、感想受け付けてます！！皆さん気軽に書いてくださいね。逆に書いてくれないと寂しいです。

それではまた次回で！！

## 第18話 とある教師に対するアンケート第一弾（前書き）

今回は桂馬に対して皆がどう思ってるのかをアンケート方式でまとめてみました。

まあ、見なくても本編には影響ありませんので安心してください。

それではどうぞー!!

## 第18話 とある教師に対するアンケート第一弾

これは私立有名校白皇学院の教師、御剣桂馬に対してアンケートの答えをまとめたものである。

桂ヒナギク

1、この人のことをどう思いますか？

「先生としてとても模範的な人だと思う。生徒に対する接し方も私達と同じ目線で見ってくれるし、教え方もとても分かりやすいし……。プライベートでもしっかりしているんじゃないかしら？どこかのお姉ちゃんにも学んでもらいたい。」

とにかく私もこんな立派な人になりたい、そう思わせる人です」

2、この人の特徴は？

「敬語だと思うわ。誰に対しても敬語使うし……」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「……この質問おかしくないかしら？そう思うのは私だけ？……あえて答えると着せるならメイド服がいい」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことありますか？

「えっと……よければいいですけど生徒会の顧問になってくれね

ばありがたいかな？  
ちよつどいなくて困つてるところだから」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「色々とお世話になってますけど本当に感謝しています。  
これからもよろしくお願いします。それからいつもお姉ちゃんのお  
世話お疲れ様です……」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「えつと途中変な質問があつたけど大体はいい感じじゃないかしら  
？こんな感じで教師に対するアンケートというのは教師に対して自  
分がどう思われてるのが分かつていいと思うわ」

ありがとうございました。

桂雪路

1、この人のことをどう思いますか？

「うーん、凄く完璧な子ね。完璧すぎて見てられないわ。私の後輩  
にしているのかしらつて思う時があるけど……」

2、この人の特徴は？

「よくお金を貸してくれる人」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「結構工口い感じの服。バニーガールとかいいかもしれない。  
でそれを見せ物にしてお金ががっばがっば」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？

「今月生きられるようにお金を貸してもらいたい。それとできれば私の仕事の分を手伝ってもらいたい」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつもお世話になって感謝してるわ。それと今度よかったら私の行きつけの店に連れてってあげるわ。」

でもその時はおごってください、お願いします」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「別にいいんじゃない？こういうのも大事だと思うし。」

「……でさこれ答えるとなんかくれるの？ねえねえ、そのところ詳しく」

ありがとうございました。

1、この人のことをどう思いますか？

「ど、どう思いつて／＼」

えっと……凄くかつこいいよー！男の子女の子隔たりなく優しくしてくれるし、この前なんかはヒナちゃんの仕事を手伝ってたし……。  
そ、それに笑顔が素敵だな／＼」

2、この人の特徴は？

「笑顔かな」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「水色のワンピースとか似合うと思う」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？

「や、やってもらいたいこと！？」

……そ、それならお、お姫様だっこ、とかかな？／＼／＼  
で、でもさすがにキスは恥ずかしくて駄目だし……／＼／＼」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつも勉強手伝ってくれてありがとう これからもよろしくね  
そ、それからね……な、なんでもない／＼」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「別にいいんじゃないかな？色んな人から評価されるっていいことだと思うし。」

でも私のは内緒にしてね？特に2番と4番は公表しないでほしいな……恥ずかしいから／／／」

ありがとうございました。

花菱美希

1、この人のことをどう思いますか？

「いつもお世話しているひと。執事よりメイドが合いそう」

2、この人の特徴は？

「殺人スマイルじゃない？あれ使えばどんなツンデレでも落とせると思う。この私でさえ危険な状況に陥るもの……」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「勿論、チャイナドレス！！これ一択！！」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？



「私の宿題をやってくれればうれしい。それと動画研究部の顧問に是非なつていただきたい。  
ちなみに断れば強行手段で

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつも勉強みてくれてありがとうございます。おかげで毎回なんとか赤点だけはさけられているわ。」

それと、動画の素材に関してはいつもありがとうございます。おかげで桂馬さんのあんなあらぬ姿やこんなやばい姿が

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「普通」

ありがとうございます。それとその動画、あとで詳しく見せてください。

朝風理沙

1、この人のことをどう思いますか？

「いつか苦勞が重なって死んでしまつとたまに心配している私がいる。」

なんでもやらせればできると思つ

2、この人の特徴は？

「勿論、あの白衣だろう。一回だけでいいからバツ、って悪役がマントをひらりってやるやつをやってもraitaitai」

3、もしこの人が女性ならばどういふ服を着させますか？

「愚問だな。勿論ゴスロリだろう!!」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？

「私の代わりに生徒になっていたきたい。そうすれば私が色々と楽になる」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつも勉強見てくれてありがとうございます。おかげでぎりぎり赤点ラインは守っている。

それと動画ではよくお世話になります。おかげで桂馬さんの人には見せられない姿とかこれ以上は限界の姿が

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「特になし」

ありがとうございます。それとその動画あとでコピーしてください。マジでお願いします。

三千院ナギ

1、この人のことをどう思いますか？

「お節介だと思つこともあるが、とつてもいいやつだ。なんでもできるし、私とは違った天才型だ」

2、この人の特徴は？

「白衣と笑顔」

3、もしこの人が女性ならばどういふ服を着させますか？

「セーラー服だな！！これだけは譲れない！！」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？

「できれば白衣を着たままドクペを飲んでもらい、中二発言をしてもらいたい（例えば俺の邪気眼が、とか、北欧神話とかを作戦名にするとか、機関に追われているとか）」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「うむ。お屋敷ではとつてもお世話になってる。口では言えないが感謝しているぞ

それからまた漫画のアドバイスを頼む」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「正直言って答えるのがめんどくさい」

ありがとうございます。

綾崎ハヤテ

1、この人のことをどう思いますか？

「僕のあこがれの人です。一流の執事という言葉はまさにこの人に合っていると思います」

2、この人の特徴は？

「僕達生徒に対する接し方ですかね。他の先生とは違うので」

3、もしこの人が女性ならばどういふ服を着させますか？

「……この質問に関してはノーコメントで」

4、何かこの人にやってもらいたいこと、または教えてもらいたいことってありますか？

「料理を教えてくださいたいです。あとはどうすればそんなに万能になれるかも教えてほしいです」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつもお世話になってます。これからも同じ執事として頑張っていきたいです。」

そしていっぱい学ばせてもらいますね」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「こういった感じのアンケートは教師の方達がどのような評価をもらっているのかが分かるのでいいと思います」

ただし、ある質問だけはこれ以上はやめたほうがいいのかと思います」

ありがとうございました。

橋ワタル

1、この人のことをどう思いますか？

「なんだか見ていて飽きない奴だな。それに話やすい」

2、この人の特徴は？

「その頭の中にある膨大な知識量」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「悪い。これに関してはノーコメントだ」

4、何かこの人にやってもらいたい、または教えてもらいたいこと  
ってありますか？

「できればまたいっぱいレンタルしてもらいたい」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつも商売のためになる話ありがとう。それと今度特撮の映画  
一緒に見に行こうぜ。」

後、勉強の方も見てくれてありがとうな」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「いいんじゃないの？こういうのがあっても」

ありがとうございました。

### 鷺ノ宮伊澄

1、この人のことをどう思いますか？

「とっても優しい方です。いつも迷子になる私を学校まで連れて  
つてくれたりしてくれます」

2、この人の特徴は？

「どんなことでも跳ね返す強い心」

3、もしこの人が女性ならばどういう服を着させますか？

「和服とか似合うんじゃないでしょうか？」

4、何かこの人にやってもらいたい、または教えてもらいたいこと  
つてありますか？

「携帯電話の操作方法を教えてくださいできれば嬉しいです」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつもお世話になってます。それとナギと遊んでくれてありがとう  
ございます。」

……で、できれば今度は私とも遊んでくださいね？／／／

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「いいと思います」

ありがとうございました。

薫京ノ介

1、この人のことをどう思いますか？

「かなりできる奴だと思う。というかうらやましい。なんだか教師

をしてるなって感じだな。全教科対応できるし

あと、あの雪路を疲れも見せることなくお世話できること」

2、この人の特徴は？

「そうだな、なぜか着ている白衣かな？それと雪路のお世話係」

3、もしこの人が女性ならばどういふ服を着させますか？

「……ノーコメントだ」

4、何かこの人にやってもらいたい、または教えてもらいたいこと  
つてありますか？

「雪路とどうやって接していくのか、その方法を伝授してもらいた  
い」

5、この人に対するメッセージをお願いします。

「いつも教科のことで手伝ってくれてありがとう。たまには休んで  
いいんだぞ？」

それから雪路のことはだいぶお世話になってるな。今度なんかおこ  
つてやるから。それと……今度一緒にガンブラを買いに行こう」

6、最後にこのアンケートに対する感想をお願いします。

「こつこつといった感じのアンケートも面白くていいと思う」

ありがとうございました。



以上、御剣桂馬に対してのアンケートでした。

## 第18話 とある教師に対するアンケート第一弾（後書き）

どうだったでしょうか？今回はキャラの答え方はあんまり自信ありません。

このキャラはこんな答え方はしなかった方はすぐに言ってくださいね。

次回はちゃんと本編書きますのでよろしくお願いします。

ちなみに第二弾もやります。

感想、質問等受け付けております。

それでは次回で！！

第19話 特色ある白皇の執事達（前書き）

どうも、ついに八月も終わり、九月に入りましたね。

……受験勉強やばす。頑張らないと。

そんな作者の呟きを無視してどうぞ!!

## 第19話 特色ある白皇の執事達

白皇学院にはお嬢様やお坊ちやま達がたくさんいる。それは周知の事実。

しかし……執事やメイドも忘れてはいけないであろう。彼らのおかげで主である人達は色々と正しい生活をして学べるのだから。

今日はそんな主達を支える白皇の執事達を見ていこう。

「お嬢様、学校に行くお時間ですよ」

トントンと主である三千院ナギの部屋の扉を叩いているのは綾崎八ヤテ。白皇通う執事である。

今日は彼を中心に『色々』と見ていこうと思う。

「色々つてところを強調したのは何か理由があるんですか？」

現在の時間は良い子なら友達と一緒に学校に通っている時間だ。

「華麗にスルーするなよ」

しかし彼の主、ナギは引きこもりの自宅警備員。所謂ニートというやつだ。だから普段は学校に行きたくない。

それは執事からしてみればなんともだらしのない主の姿。そんなだらしのない主を全うな人間にするために八ヤテは今日も頑張つてナギを

起こしているのだ。

「ここまでですががしいスルーは初めてですよ。……まあいいや。お嬢様、入りますよ」

そう言つて扉を開けると布団を抱いてパジャマ姿で寝ているナギの姿。そんな姿を見てため息をだすハヤテ。

「お嬢様」

「ん……あ、ハヤテか？どうした？」

「どうしたではありませんよ。学校に通う時間です」

「学校？ああ、あつたなそんなところが。だがしかし最近学校禁止令が発令されたはずだ。だから今日からは学校に通わなくていいはずだぞ」

「そんなでたらめに嘘を積み重ねても駄目ですよ。ほら、早く着替えてください」

そう言つてさっきまで抱きついていた布団をハヤテがとつてしまう。

「むく、めんどくさいのだ！！大体何故私が学校なんぞに！！悟だつて通つてないんだぞ！！あの地球を何度も救っている悟 見え学校に通つていないんだぞ！！」

だから私も学校に通わずとも……！！」

「悟 は特別なんですよ。だからいいんです。さ、着替えてください」

「くっ……仕方ないな」

しびしび了解したナギはそのまま服のボタンに手をかけてはずついていく、がそれを止めてしまふ。

「?どうしたんですか?お嬢様」

「……おいハヤテ。お前、私が着替えるまで私の部屋にいるつもりか?」

「ええ、まあそうですね……それが何か問題でもありますか?」

「バカモノー!!私が着替えようとしているのに部屋にいるんじゃないー!!」

「ええ!?!なんでですか!?!」

「なんでってそれは……!?!」

顔が赤くなっていくナギ。それをハヤテは不振に思う。

「あの……何か具合が悪いとかですか?」

「は、ハヤテの……ハヤテのバカーー!!!!//  
さっさと出てけー!!!!」

「うわぁ!?!わ、分かりました!?!」

ナギの大きな声にハヤテはすぐに外に出る。

「ふう、びつくりした。なんであんなに怒ったんだろっ？とりあえずお嬢様を玄関で待つてるか」

「まったく！ハヤテはまったく！！デリカシーというものがないのか？」

そのつぶやきはハヤテには聞こえなかった。

これが三千院ナギの執事綾崎ハヤテである。

## 白皇学院

「それにしても相変わらずの光景だな」

「それはそうですよ、いきなり周りの環境が変わったらおかしいですよ」

周りを見て少しつまらなそうにナギが言った。それに対してハヤテがツツコム。

「刺激がないのだ。刺激が。私の心を震撼させるものが。だから学校は嫌いなんだ」

「ほう……。三千院のお嬢様は刺激がほしいのかね？」

不意に大人びた男の声が聞こえた。声に反応して聞こえてきたほうを向くと木にもたれかかりながら、黒髪で茶色いコートを羽織っている美形の男がいた。

「あなたは確か……大河内家の」

「そう、僕が大河坊ちゃんの執事、さえきひむろ 冴木氷室だよ」

そういうと、季節外れの桜が彼の周りを舞う。……もつともその桜は彼の頭上の何者かがまいているだけだが。

「氷室、いつまでまいてればいいの？」

「彼らが『なんでそんなところにいるんですか？』って質問するまですよ」

緑色の髪の毛の男の子が桜の入ったかごをせっせとまいている。彼こそこの氷室の主、おおこうちたいが 大河内大河である。

「ほら、君たち早く質問してくれ。そうしないと大河坊ちゃんの手が疲れてしまっじゃないか」

( (そんなこと言われても……) )

と2人は心の中で思う。まあまず主を使っている時点でこいつは執事なのかと疑うことが正しいのだろうが、大河が気にしていない以上、周りの人間も気にしていないようだ。とりあえず大河のためにも先ほど述べていた質問をする。



「あの、なんでそんなところにいるんですか？」

「もうやめていいですよ。大河坊ちゃん」

桜が舞うのが終わる。そしてこちらに氷室がやってくる。

「なんでってそれはそこに木があるからだよ」

「いや、意味が分からないぞ」

「それはそうだ。だって意味が分からないで言っているのだから」

「ハヤテ、こいつ頭がおかしいようだ」

話がかみ合わず腹がたつナギに苦笑いしかできないハヤテ。

「冗談だよ」

フツと笑う氷室は正直に理由を話す。

「偶然だよ、偶然にも君たちの声が聞こえてね。それで話してみようと思っただけさ」

「それにしては準備がよかったですけど」

「そうだよ。だって氷室が準備しろって」

「それ以上言うときついお仕置きがありますよ？大河坊ちゃん？」

「偶然だよ、偶然！！本当だよ、氷室？」

「ええ、その通りですよ。大河坊ちゃん」

（ やっぱり逆だよな、立場が ）

まったくもってその通りである。よく執事になれたものだ。

「ところで三千院のお嬢様は刺激がほしいみたいだが」

「何か文句があるのか？」

「いや、少し面白くてね。お金に困らない君でも悩むことがあるの  
かってね」

「そりゃ私だって人間だ。悩むことだってある」

氷室に対してナギは腕を組みながら話す。

「そうでしたね。おっとそろそろ大河坊ちゃんが木から下りれなく  
て泣きそうだから助けてきますね。ではこれで」

その美形を崩すことなくゆっくりと木の方向に歩いて行った。

「まったく勝手に話しかけてきて勝手に帰って行ったぞ」

「まあ氷室さんらしいですよ。さ、僕らも行きましょうお嬢様。  
桂馬さんが待ってますよ」

「そつだな」

ハヤテ達も教室に向かった校舎に向かい始めた。

『ねえ氷室？僕頑張ったよね？』

『ええ、読者にもかなりの印象を与えられたと思いますよ、大河坊ちゃん』

『じゃあさ、ご褒美くれる？』

『勿論ですよ。……僕に後でお金をくれるならさらにご褒美をあげましょう』

『ホントに！？じゃああげちゃうよ！！』

『まったく、大河坊ちゃんはお優しいですね』

後ろの方から何か聞こえてきたが2人は何も聞こえないことにした。

### 放課後

「えっとではこれで今日はおしまい。解散！！」

教室内に雪路の音が響き渡る。それと同時にチャイムがなり生徒が席を立ちそれぞれ動いていく。

時が過ぎ今は放課後。ハヤテとナギは帰る用意をしていた。とそんな時だった。

「綾崎！！今日こそ勝負だ！！」

茶色の髪の毛の男の子、東宮康太郎あずまみや こうたろうがハヤテに向かって叫んだ。

「あの……なんですか？藪から棒に……」

「この前の決闘では運悪く負けたが次はそうはいかないぞ！！」

「いやだから人の話を聞いてください」

ちなみにこの前の決闘とはナギのために剣道部をハヤテが見学したとき起こったことだ。

「そうですよ、お坊ちやま」

「あ、野々原さん」

「またお坊ちやまが迷惑をかけてすみません……」

東宮の隣に来たこちらも大人びた顔立ちの男がやってきた。彼の名前は野々原ののはら楓かえで。東宮家に仕える執事だ。

「いえ、別に僕はいいんですけど」

「いえ、それではこちらの腹の虫がおさまりません。せめてお坊ちやまが土下座して謝らないと……」

「野々原！？なんで僕がそんなことを！！」

「当然です。綾崎君に迷惑をかけた以上詫びを入れなければなりません。それが東宮家の礼儀でしょう?」

「し、しかし……」

「それ以上駄々をこねるといふなら……」

「い、言うなら?」

不安そうに楓に聞く康太郎。

「今日の特訓メニューを更に厳しいものを追加して五時間それをぶっ通しでやってもらいます」

「綾崎、ごめん。僕が悪かった」

楓の声を聞いた瞬間、一秒にも満たない早さでハヤテの前に土下座をした。

( ) ( やつぱりここのところも逆だよな、立場が…… ) ( )

とつかまずどんな特訓をさせられているところに疑問を持つところだ。

「い、いえ。もう大丈夫ですよ?だから東宮君も顔をあげてください」

「まあ、別にそこまで怒ってないしな……」

「そ、そうか。ありがとう!」

勝負を挑まれた相手に感謝される、それは複雑な心境だったと後のハヤテは語る。

「とにかくお坊ちゃま。今日は部活もないことですし、早く帰って私と特訓をしますよ」

「うん。じゃあな、三千院のちびっこと綾崎!!」

「おい、なんで私だけ罵倒されてるんだ？」

「さあ、よくわかりません」

そのまま手を振りながら康太郎は帰って行った。

「そういえば綾崎君、必殺技はもう覚えましたか？」

先程まで康太郎と帰ったと思われていた楓が突然とハヤテの隣にいた。

「うわっ!?!びっくりさせないでくださいよ!!」

「そうだぞ!!心臓に悪い!!」

「ははは、すみません。ですが執事である以上突然現れるのはデフォルメです。……でどうなんですか？」

「それがまだ、一応努力はしているんですが……」

「そうですか。それは楽しみですね」

「絶対に完成させますから、その時は一戦よろしくお願いします」

「ええ、その時を楽しみにさせていただくよ。では私はこれで……。ちなみに綾崎君」

「はい、なんですか？」

扉の前で止まって声をかけてきた楓はハヤテのほうを向く。

「必殺技を手に入れる方法は……。想いですよ」

「え？」

「それでは、私はこれで」

丁寧に辞儀をしながら帰っていく楓に何一つ聞けずにそのまま立ちつくしてしまった。

(想いつて心のことだよ……。何か関係あるんだろうか？)

「まったく変なのに絡まれたせいで帰るのが遅くなってしまったぞ、ほらそんなところに立ちつくしてないで早く帰るぞ、ハヤテ」

「あ、はい！待ってくださいお嬢様！！」

(……ま、後で考えればいいか)

『これでだいぶ印象でたかな？野々原？』

『はい、これで二話分は読者のみなさんは忘れられないようになり  
ましたね』

『そうか、二話分が……ってたったそれだけ!? あんまり意味が  
ないんじゃないの!?』

『ええ、だって本編でさえ忘れられている状態ですからね。お坊ち  
やまの熱狂的ファンならともかく、覚えているひとは少ないでしょ  
うし。』

そんなことよりお坊ちやま? 人に迷惑をかけるなどあれほど教えて  
いるのに……』

『へ? あれはその……印象に残る出かたをしたかっただけであつて  
……』

『今すぐそこになおれやア!』

『い、ごめんなさいー!』

どこからかそんな会話が聞こえてきたが、2人は何事もなかったよ  
うに帰った。

### 三千院家

「とまあ、色々と今日あったわけですが」



「本当に色々とありすぎですね。」

台所でそんな話をしている男女がいた。マリアとハヤテである。

「ところでマリアさんは……必殺技ってどういうものなんでしょうかね？」

「えっとどうしたんですか？いきなり……」

「いえ、今日必殺技について言われてですね。一人で全然悩んでいてもわからないのですが……必殺技を持っているマリアさんなら聞いてもわかるんじゃないかと思うんですが」

「勝つてに人のことを必殺技持ちにしないでください」

ハヤテに対して冷静にツツコムマリア。

「えっ、必殺技持ってなかったんですか？」

「元々持っていません！！」

「でも実際は持ってるんじゃないですか。僕の勘がそう言ってます」

「そんな勘はいますぐ捨ててください。まったく、ハヤテ君は」

「す、すみません……」

腰に手を当てて困った顔をするマリアにハヤテは謝った。

「でもそうですね……桂馬君に聞いてみたらどうですか？桂馬君は

持ってそうですし」

「そうですね」

確かにあの完全無欠の桂馬なら多分何かしらの必殺技を持ってるかもしれない。その可能性を考えてハヤテは台所をマリアに任せて桂馬の部屋に向かうことにした。

『必殺技ですか……。持っていたらカッコいいですかね？』

台所から聞こえた咳きをハヤテはあえて無視した。

### 桂馬の部屋

「必殺技、ですか？」

「ええ、桂馬さんなら持っているんじゃないかと思って」

時は変わって桂馬の部屋。ハヤテが入る頃は桂馬は小説の執筆をしていた。

「あの、忙しかったらいいんですよ？」

「いえいえ、ちょうど煮詰まっていたところですし休憩にもちょうどいいので」

席を立ち、屈伸する。

「すみません、必殺技とかそんな中二センスあふれるものは持っていません」

「そうですか……」

期待していた分、がっかり感が否めないが、少し仕方ないと思ったハヤテであった。

「でもきつと努力しては必殺技は得られません。そしてそれを達成させるには自身の思いが必要になるかと」

「自身の思い、ですか……」

今日、楓が言っていたことはそれなのだろうかとハヤテは考える。

「まずは実行に移して見ることです。悩んで考えても出ないときは一度何も考えずにつっぱしってみるものです」

優しく諭すように言う桂馬はまるで聖母マリアのような感じだった。

「そうですね。分かりました！！なんだかスッキリしました。ありがとうございます！！桂馬さん！！」

「いえいえ、ハヤテ君も頑張ってくださいね？」

「はい、ではそれでは！！」

今は分からなくても何かきっかけにはなるはず。そ信じてハヤテは

努力しようとすることにした。

『それにしても必殺技ですか……。でもこれって必殺技になるんでしょうかね……。』

何か呟いているようだったが、ハヤテには聞こえなかった。

皆さん、どうだっただろうか？これが白皇の執事達である。かなり特徴的ではなかっただろうか？今日こんにちに至るまで彼らは血もにじむ努力をしてきた。

そしてそれは今も変わらない。

『お嬢様、起きてください。そろそろ学校に通う時間ですよ』

『氷室、起きてよ。学校に間に合わない』

『お坊ちゃん？早く起きないと特訓メニューを』

『さっ、野々原！早く学校に行こう！』

『そろそろ会議なので起きてください、雪路さん』

主をまっとうな人間に導くため今日も彼らは奮闘する。

## 第19話 特色ある白皇の執事達（後書き）

今回は執事達のお話でした。もっと出番を増やせられたらいいな  
と思いました。

意外と好きなんですよ、彼ら。

さて、オリキャラ募集がついに次の話で締切ります!!  
まだ投稿していない人はお早めに。……まあいいと思いますけど。

20話記念に何かやろうかな?と考えているデビルです。

次回の更新は早めに行いたいと思います。

ではでは、また次回で!!

第20話 黒い物体……それはあなたの後にいる（ちなみにホラーではありません）

こんばんは。デビルマンです。

ついにこれで第一章終了です。ここまで長かったです。

今回戦闘シーンは入っていますが、最初に言うておきます。かなり下手です。

伝わるかどうか不安です。

……それではみなさん、どうぞ！！

第20話 黒い物体……それはあなたの後にいる（ちなみにホラーではありません）

皆さんは知っているだろうか……。台所に住んでいる黒い存在を……。  
いや、他の所にも存在するが、私が確認したところ台所に多いことが判明している。

その黒い存在は見ていただけで人を恐怖に陥れることが可能。つまり人間にとっては天敵ともいえる存在なのだ。

その恐ろしい黒い物体は『G』と人間達の中では呼ばれている。

これはとある台所で起こった、『G』と人間達の出来事である……。

三千院家台所

「今日はこれでおしまい。今日は軽く作ったから片づけも簡単でしたわ」

一人のメイド女性が昼間の台所で片づけをしていた。その女性の名前はマリア。

三千院に仕える17歳のメイドである。

「桂馬君帰ってくるのが遅いですわね……」

今現在三千院家にいるのはベッドのタマとマリアだけである。

しかもタマはお昼寝中なので、実質はマリアだけとなる。  
主であるナギと執事で後輩のハヤテはワタルのレンタル屋に。クラ  
ウスは……どこかに出張中、多分。  
そして桂馬はお茶っぱの買い出しである。

「また不幸な目にあっているのでしょうか」

ちなみに今回は前回の失敗を踏まえて、桂馬にはカシミヤのコート  
は着させなかった。

「……一人で怖いとかそういうの私はありませんからね、ナギでは  
ないので」

誰に話しているのかは分からないのだがこれではまるでシンデレレの  
ような感じになっている。

「別にシンデレレじゃありません！！ナギとは違うんですから！！」

とまあ、彼女の変な主張は置いてとにかくこの屋敷にはマリア  
ただ一人なのである。

「あなた、あとで覚悟してくださいね？」

……とまあそんな感じでマリアは片づけを続行しているとなんだか  
妙に後ろに気配で感じた。

後ろを振り返るが何もいなかった。

「？よく分かりませんが……まあいいですわね」

気にせずにそのまま片づけを続ける。しかしその後も後ろを振り返



る。

(……………変ですわね……………もしかして……………人がいるのかしら)

しかしそれなら妙である、とマリアは考える。

まず、誰かしら入ったならばベルが鳴るし、それ以前にSPメンバーが確認してマリアの方に連絡が回るはずなのだ。

それなのに、その連絡すらないということは……………もしかしたらSPメンバーもやられてしまうほどの人が家に侵入してきていることになる。

その場合、女性であるマリアはどうすることもできない。

(……………それでも戦わないといけませんね)

たとえ戦えなくても、たとえ相手に手すら触れることすらできなくてもマリアは抗う。

それがメイドとしての……………務め。

(次気配があつたら……………すぐに振り向いて犯人をびっくりさせてあげますわ!!)

覚悟を決めたマリア。そして……………来た、気配が。

(今です!!)

さっきとはくらべものにならない早さで後ろに振り向き、気配の正体を見る。

そこには……………黒い輝きを見せるなぜか普通の銅像と同じくらい巨大な『G』……………所謂ゴブリ(あえて隠しました)がいた。

「きゃあああー！ー！ー！」

「ちょっと遅くなってしまいました……マリアさん怒ってますかね……」

所変わってここは三千院家に続く一本の道。そこを急ぎ足で桂馬が歩いていった。

マリアに頼まれていたお茶っぱを買っていたところ、その道中で前回と同じような目にあい、ものすごく帰るのが遅くなってしまった。

『きゃあああー！ー！ー！』

「！？」

ドアの前まで来た瞬間、突然の悲鳴が。その声を聞き、一瞬立ち止まってしまいが、マリアの声ということは分かった。

すぐにドアを開け、マリアの聲がしたほうにすすんでいく。

(くそっ！ー！僕が遅くなってせいで、マリアさんが……！ー！早く助けないとー！)

確か声は……台所からだったはず……)

そのまま台所の方向へと向かっていく桂馬。

「マリアさん！！大丈夫ですか！！一体何が」

「あっ、桂馬君！！」

台所に入って桂馬が見た光景は、泣いていて腰が抜けたのか、座り込んでいるマリアと、人間の倍以上は見える超巨大ゴブリであった。

（でかすぎます！！でかすぎてすぐにツッコミできませんでした！  
！ってそんなことを考えている場合ではありません！！）

「マリアさん、伏せて！！」

「えっあっ、はい！」

「この……どきなさ……い……」

『ぎゃおおお……！！』

マリアに指示をして、確認をしたのち桂馬はものすごい勢いでゴブリ……Gに対して蹴りを放った。

後ろからの状態だったので防御もできなかったGはマリアの上空を飛び、そのまま台所の調理場に衝突した。

「マリアさん、大丈夫ですか！！」

「は、はい……ですが腰が抜けてしまつて……」

「そうですか、とにかくここから離れないといけませんね。

では、失礼しますよ……よっと！」

「え、きゃ」

なんと桂馬は今現在、マリアをお姫様だっこしている状態である。

「あ、あの桂馬君！！／／／」

「？どうしたんですか？マリアさん？」

「こ、これでは……桂馬君に負担をかけて……！！／／／」

「全然負担なんかじゃないのでご安心を。」

とにかく安全なところまではこの状態ですから我慢していただけると嬉しいのですが」

「わ、分かりました」

「では、とにかく逃げ　　っ！！」

逃げようとした瞬間後ろから何かが飛んできた。

それは何か液体みたいなものだった。

それを出したのは、勿論G。

『ぐおおおおー！！！！』

「くそっ！！一昔前の怪獣みたいな奇声をあげないでください！！」

「こんなときでもツッコまないでください！！」

そんなやり取りの間にも奴は迫ってきている。

「マリアさん、しっかりと掴まっけていてください。このまま外に逃げます」

「は、はい」

いつもの黒服の襟の部分をマリアはしっかりと握りしめ、それを確認した桂馬はすぐに台所を出て先程の玄関まで走る。しかし後ろからは奴がもの凄い速さで追いかけてきていた。

(なんて速さだ!! Gのレベルを超えています!!)

しかし追いつかれてたらアウト。

桂馬はそれに追いつかれないようにさらに速く走る。そしてついに……外にでた。

「よしっ、マリアさんはここにいてください」

「え、でも桂馬君はどうするんですか?」

「僕は勿論……アイツを倒します」

「そんな危険すぎます!! 第一もし怪我でもしたら!!」

心配のまなざしで見つめるマリア。

その姿は何とも乙女である。

「執事は主を守ることがそうですが、その周りの人達も守る使命がある、僕はそう思っています。」

それに僕は困った人を見捨てることはできないので……」

桂馬が前を向くと、すでに奴がいた。しかも戦う準備済みだ。

「『困る人見捨てることなし』。これおじいちゃんの教えです。そして……僕の掟ルレです。これだけは例え誰であろうと譲れません」

「あつ……」

その時、マリアの目にはこちらを見ながら優しい笑顔でいる桂馬の姿があった。

たたずまい、そして風で揺れる黒髪がなんとも幻想的に見え、輝いてみえた。

そんな姿に反論することもできず、見とれてしまった。

「では行つてきます」

見惚れている間に行ってしまった桂馬に、マリアは心の中で呟いた。

(桂馬君……頑張ってください!!)

「さて、それでは始めましょうか」

『ぎゃおおおー!!』

すでに戦闘状態に入っていたGは攻撃をすぐに仕掛けた。先程のことを怒っているのかその勢いはさつきと比べ物にならない。しかしそんなGの攻撃も桂馬はスラリとよけていく。

「そんな攻撃、子供でも避けられますよ!!」

『ぐるうううー！ー！』

当たらなくて悔しいのか、とても悔しそうに声を上げるG。

「では、今度はこっちからいきますよ！ー！」

『ぎゅう！？』

よけていた攻撃を流れるように流し、そのまま相手の懐に。そのままパンチを決めようとする。しかし、

「っ！？ガードですか！ー！」

そう、奴の手は何本もある。それでガードをして桂馬のパンチを防いだ。

そして隙をつきそのまま手で叩きつけるG。後ろにかわし、なんとか桂馬は避けた。

「なかなかやりますね。」

では、これはどうですか！ー！」

『！？』

今、Gは驚愕している。

なぜなら、今さっきまで桂馬が目の前にいたのに、いないからだ。

（桂馬君は何処に？）

勿論マリアも突然いなくなった桂馬に驚きを隠せないでいる。

『がつっ?』

「こっちです!!!」

『ぎゅほ!?!』

その時突然声がしたかと思うと、すでにGが吹き飛ばされていた。そして桂馬が蹴りの恰好をしたまました。

(いつの間に!?!)

速い。速すぎる。マリアは現在そう感じていた。

人間がこんな速く動けるはずがない。ハヤテもそうだが、執事になる人間はもはや人間の枠を超えているのではないか。しかし桂馬はその中でも群を抜いている。

「さすがにこれだけでは終わりませんよね」

煙が立つ方を向くとGが何事もなかったように立ち上がり再びこちらに迫ってきた。

しかもさっきより速く。

「っ!!!」

『ぎゃおおおおー!!!』

さすがに速いのか、桂馬もガードで対処するだけになった。そしてついにガードが薄くなり、桂馬の体にGの手が当たる。当たった衝撃が強いのか、桂馬はそのまま吹き飛ばされる。



「桂馬君!!」

マリアが叫ぶ。

桂馬は衝突しそうになった木を足場に使って逆に相手にそのまま向かってキックを繰り返した。

意表を突かれたGは逆に吹き飛んで行った。

(危ない……こいつ、強い。でもなんで急に強さが)

考える時間に奴はすぐに立ち上がった。そして何かまがまがしい黒いオーラみたいなのがGの体からでていいる。

(!?!?あれは……もしかして……)

何かを思ったのか、それとも見たことがあるのか、桂馬は考えだしたが途中でそれをやめて目の前のことに集中した。

「とにかく早く決着をつけないと」

「そうですね、早く決着をつけないと大変なことに……」

そして奴に向かおうとした瞬間に誰かの声が聞こえてきた。隣を桂馬が見ると、なぜかそこには伊澄がいた。

「……あの、伊澄さん?なんでここに?」

「ワタル君の家に行こうとしたら、なぜかナギの家に……」

「そうですね」

結論は迷子になってしまっただけにきてしまったということですよ。

「ち、違います!!!」

パタパタと袖を振りながら激しく怒る伊澄。

それを苦笑いで見つける桂馬だがすぐに前を向いた。

「伊澄さん、あれって……」

「桂馬さん、ご存知なんですか？」

「ええ、まあちょっとあういづのはわけありですね。でもあのタイプは会ったことありませんね。」

それに伊澄さんあなたももしかしてそういうお仕事？」

「……そこまで知っているなら隠す必要もありませんね。」

はい、基本は妖怪退治なのですが、こういうった仕事もしています」

「そうですね……。では、あいつはどうすれば倒せますかね。多分このままだとあの黒い力で何度も回復して永遠に倒せないと思うのですが」

「私もそう思いました。ですから私が奴を消滅させる言葉を唱えます。」

結構時間がかかるのでその間は桂馬さんが引きつけてください。危険な仕事を頼みますが……」

「いえ、それで倒せるなら、構いません」

「では、行きます」

「ええ!!」

2人の声と同時にやつが突撃を開始した。  
目標は勿論、桂馬だった。作戦成功である。

『ぐおおおおー!!』

(また力が増大している。もはやこれではGの体ではもちませんよ。  
とりあえず、一回吹き飛ばしておきましょうか)

「はああー!!」

『ぎゆう!?!』

距離をとり攻撃している一瞬の隙について回し蹴りを披露する。  
吹き飛んだが、それほどのダメージは与えられていないようだ。

(ちつ。体も強化されてるんですか……)

平然と立ち上がったGを見て、桂馬は苦い顔になる。

すると突然やつは手を伸ばしてきた。

(伸ばす!?!もしかして狙いは!?!)

「きゃあああー!!」

「しまった!!マリアさん!!」

奴の狙いは MARIA だった。そのまま MARIA を手に持ち、伸ばした腕を元に伸ばす。

「これでは術を発動することができません!!  
相手もよく考えたものです」

「僕がちゃんとしていなかったばかりに……!!」

「けい、ま、くん……」

目の前では凄く涙目で嫌そうな MARIA の姿があった。  
それはそうだろう、彼女は G が大の苦手。それなのに見ただけでも  
気持ち悪いのにそいつの手に掴まっているのだから耐えられないだ  
ろう。

( MARIA さん!! あいつ絶対に許しません…… )

桂馬の周りがとても静かになる。なんだか知らないが今桂馬に話し  
かけてはいけない。

そんなオーラがかかっていた。

伊澄も隣でそう思っていた。

「伊澄さん、術をと覚えてください」

「え!?! で、でも MARIA さんが」

「 MARIA さんのことなら安心してください。僕が必ず助けます。  
だから、お願いします」

「……分かりました。桂馬さん信じていますからね」

「はい、任せてください」

桂馬の声が聞こえたと同時に伊澄は術を唱える。

すると伊澄の周りを変なもの飛び交う。そしてそれはやつの足元に囲むようにして地面に溶けていった。

そしてそれと同時に桂馬はやつのところまで突然のダッシュ。やつは先程と同じように速く見て見ることができずに首をおろおろしていた。

しかし次の瞬間体のお腹の部分に衝撃が。そこには連続でしかも高速でGに蹴りをいれている桂馬の姿が。

「いくらあなたでも、同じところを攻撃していれば喰らうでしょう  
!!!」

『ぎゃああああー!!!!』

桂馬の言うとおり、Gには耐えられないほどの苦痛だった。思わず腕の中にいたマリアを放した。それを桂馬が捕まえる。

「桂馬君!!!!」

「うわわ。大丈夫ですよ、マリアさん」

またもやお姫様だつこの状態で桂馬の胸に顔を埋めるマリア。よほど怖かったのだろう。

「とりあえず、また上に上がるので、掴まっけてください」

「は、はい」

ぎゅと先程より力強く握ったマリアを見て桂馬はそのままやつの体を利用して上に飛ぶ。

「伊澄さん今です!!」

「もう完了済みです」

見ると先程の蹴りでうずくまっているGの体を光るものが包んでいく。

そして、それはG全体を包んで、その時だった。

やつが決死の覚悟で羽を使い空をとんだ。

(いけませんわ!!あのままだったら術は失敗してしまう!!)

まさか飛ぶなんて思っていなかった伊澄はそのまままずい顔をする。その間にも光はさらなる輝きを見せる。そしてGは上空に行った桂馬達を追いかける。

(でも桂馬さんならこのことに気付いたはず。

それになん得上に飛んだのか……もしかして!!)

「やっぱり追ってきましたか。上に飛んで正解ですね」

『!?!』

そう彼は予測していたのだ。Gの行動を。

必死に追いかけてくることも。

「これで……終わりです!!」

『!!!』

桂馬は降下してそのまま両足で勢いよくGの頭にぶつけた。

勿論、降下による負荷も与えられているためそのまま地面に叩きつけられる。

桂馬はそのままGの頭に降りた後、術に巻き込まれないようにその場を後にする。

煙が上がり、Gが起き上がろうとした時にはすでに完全に術が発生し瞬く間に光がGを包む。

『ぎゃあおおおー!!!!』

その雄たけびとともにGは消えた。

「ふう、なんとか終わりました。それにしてもマリアさん静かでした」

「すう……すう……」

マリアを見ると、寝ていた。どのあたりだろうか分からないが、桂馬はそんなマリアを見て、執事としての責任を全うできたと思った。

「よかったです。これでは私が術を使ったこととかは全て夢とかになりますね」

安心して少し楽になる伊澄。

「やっぱり秘密なんですか?その力は」

「ええ。あんまり人には見せられませんが。だからこれからも内緒にしていたけるとありがたいのですが……特にナギには見られたくないのよ」

「そうですね。分かりました。今日のことは僕と伊澄さんだけの秘密ということにしておきましょう」

「そうですね。うふふ」

「?どうしたんですか?伊澄さん」

突然ほほ笑んだ伊澄。

桂馬はその理由が分からずに聞き出す。

すると、伊澄は袖を口に当てながら答えた。

「だって、秘密ってなんだか素敵じゃないですか?世界で2人だけしか知らないんですよ」

「……そうですね。確かに」

桂馬も伊澄につられて笑顔になった。

「さてと、僕はマリアさんを部屋に運ぶとしますかね」

「では私もワタル君のところに行きますね」

「あっ、伊澄さん、待ってください!!また迷子に」

しかし時すでに遅く、もうそこに伊澄の姿はなかった。



「……とにかく、マリアさんを部屋に」

家の中に入り、とりあえずマリアの部屋に。そのまま寝かせる。

「よし、まずは台所をかたづけないといけませんね」

そのまま行こうとしたが、胸元のマリアの握った手がそれをよしと  
しなかった。

その手は強く握られていた。

「いか……ない……で」

途切れ途切れだったが、桂馬の耳にはしっかりとマリアの寂しい声  
が聞こえた。

「……大丈夫ですよ。僕は何処にも行きませんから」

そつと優しくマリアに言い、桂馬はマリアの手をしばらくの間、握  
り続けていた。

「あれれ？ここは一体どこでしょうか？」

ちなみに、当然彼女は迷子になっていた。しかしなんとか奇跡的に  
辿りつけたらしい。（しかしその時には夜になっていた）

三千院家

「よし、桂馬！今日はこのシユタ を見るぞ！！オカ ンがどうするのかが凄く楽しみだ！！」

「そうですね、お嬢様。僕も興奮して待ち遠しかったですよ」

「さすが桂馬だ。よし時間だな。やはりこのOPはいいな！！歌詞にも意味があるとは」

「ゲームの方のやつもそうでしたね。よければ原作の方もプレイしてみればいかがでしょうか？僕も感動しました」

「勿論だとも。あとでa m a o nで頼んでおこう。その前にアニメを見なければな！！」

「そうですね」

（それにしても昼間のG……誰かにあの力を貰って。いや、強制的に持たせられた？

……一体誰が……）

TVの前で桂馬はナギと一緒に楽しみながら思案顔になる桂馬であった。

???

「ちっ、やはりあの程度のものでは私の力は操れなかったか……。まあよい。まだ次がある。私をせいぜい楽しませてくださいよ？三  
千院」

見えないところで歯車は動きだす。

第20話 黒い物体……それはあなたの後にいる（ちなみにホラーではありません）

どうでしたか？やはち下手だったでしょう。ですが、これが僕、デビルマンの限界です。

今度書くときはもっと頑張ってみたいです。

そしてついに第一章終了です。とにかく長かったです。

これで当初の目標は越えました。

そしてオリキャラの締切りですが、明日の終わりまでにしたいと思います。

ですので明日の9月12日（月）の深夜0時までが締切りです。

それ以降は受け付けないので、気を付けてください。

そして次は第二章に突入するのですが、オリジナルです。

作者が考えた唯一の女性キャラが登場します。勿論、ハヤテ達も活躍します。楽しみにしてくださいと幸いです。

それではまた次回でお会いしましょう。

長文失礼しました。

ちなみに……Gには気を付けてください。

第21話 出会いは突然やってくる(前書き)

ついに第二章始まりです。

ではではどうぞ、楽しんでいらしてください。

## 第21話 出会いは突然やってくる

「うむ、ネタが思いつかん……」

漫画を描くペンを止めてナギは頭を手で抱える。  
今彼女はネタ切れという最悪の壁に悩んでいた。

「もうこの屋敷ではネタは見つからないしな。」

「一体どうすればいいのか……。あつ、そうだ。こんな時こそ」

ナギはペンを置き、ポケットにある携帯電話を取り出す。  
どうやら誰かに電話する模様だ。

「……もしもし、ハヤテか？」

『あつ、お嬢様。どうしましたか？もしかして買ってきてほしいものとかですか？』

「いや、ちょっと違うんだけど。」

……ハヤテ、今私はネタ切れという漫画家として極限の立場に立たされている」

『はあ、そうですか』

電話越しに聞こえるハヤテの声は、疑問を抱いているような声が聞こえる。

「それでだ、今現在久しぶりに外出しているハヤテに……ネタになるような出来事をしてきてほしいのだ。」

またはそういうことに遭遇してほしい」

『そうですか……ってそんな簡単にうまくいきませんよ』

「いや、大丈夫だ。お前ならやれる。なぜならハヤテは私の執事。どこかの探偵よろしく毎日何かの出来事に巻き込まれているからな。きつと今日も何かの出来事に遭遇してしまうに違いない。いやきつとそうなってほしい!!」

『別に好きでそういうことにあるわけではないですけど』

「とにかくなんでもいい。何か見つけてきてくれ。じゃ」

『あ、ちよつとお嬢様!?!』

携帯の電源ボタンを押して会話を終える。

ハヤテが何か待ってといわんばかりに声を出していたが、気のせいだろう、そう心の中で思い、再びペンを持ち用紙を見る。

「……はあ、何かないかな?こつ……私の心を刺激させる出来事が」

### 負け犬公園

『とにかくなんでもいい。何か見つけてきてくれ。じゃ』

「あ、ちよつとお嬢様!?!」

プツン……。

耳にはそんな無常な音が響く。

ハヤテは、今日はやることがなかったので気分転換も兼ねて外に出かけていた。

そろそろ戻ろっかなと思っていただけ矢先、ナギから電話がかかってきた。

内容は……ネタ探し。

結構な無茶振りなうえに強制的に電話を切られてしまったので、今更何も言えない。

(でも、これも執事としての仕事か。

よし、お嬢様が納得するような、素晴らしいネタ……出来事に遭遇してやる!!)

拳を握りしめて覚悟を決める。

「しかし……そんな簡単に遭遇することは」

と前をみた瞬間、綺麗な桃色のロングヘアで少し黄色い着物の和服を着ているの女性が倒れていた。

(いきなりきましたよ!! っでとりあえず助けないと!!)

ネタとかは後回しにして、とりあえずは女性を助けるために女性に向かう。とりあえずうつ伏せにいる女性をひっくり返し、腕は背中を支えるようにしておく。

「あの、大丈夫ですか!!」



「……うん。……」

(気絶してるのかな?でもそれにしても違つような……。  
とりあえず危険な状態じゃなくてよかった)

緊迫していた状態から解放されたハヤテは安堵の意味も兼ねて息を吐き出す。

「あれ?私どうして……」

そうこうしているうちに女性が目を覚ましていた。

「あつ、気付きましたか?」

その女性にハヤテは優しく話す。

「あの、あなたは?」

「僕は綾崎ハヤテと言います。

つい先程、倒れているあなたを見てびっくりして……それで今の状態です」

「そうなんですか。ありがとうございます」

にっこりと笑った女性はとても美しかった。  
ドキッとしたハヤテでもあった。

「もう大丈夫ですから」

「そうですか?でも」

「いいえ、これ以上、綾崎様に迷惑はかけられないですから」

そういうと女性はハヤテの腕の中から出て立った。

その姿から見て本当に大丈夫なようだ。

「……あのとりあえずベンチでも座りませんか？」

「そうですね」

2人はそのままベンチに腰を下ろした。

「いきなりで悪いのですが、何故あそこで倒れていたんですか？」

まあ誰もが当然の疑問をハヤテがした。

「……多分、寝てしまったんでしょう」

「……え？」

その女性は少し目元をこすりながら答えた。

「あの、寝てしまったって……」

「私何処でも寝てしまう癖がありました……よくああやってなると  
きがあるんです。」

おかげで色んな人に迷惑をかけています」

「そ、それは色々とかいいな癖ですね」

苦笑いでハヤテは女性のほうを見る。  
女性は少し落ち込んでいた。

「そ、そんなに落ち込まないください！そういうことだって人間  
ありますよ！！」

むしろ、ないなんて人はいませんよ」

「そ、そうですか？」

「ええ」

頷くハヤテに女性は元氣を取り戻した。その証拠にさっきより元氣  
なように見えた。

「そうですよね。いますよね、そういう人も。

……… なんだか元氣ができました。ありがとうございます」

「いいえ、こちらこそ」

にっこりとほほ笑みながらお礼をする女性にハヤテは応答する。

「よければお名前を教えてくださいませんか？」

「いいですよ。僕の名前は綾崎ハヤテです。あなたは？」

「私は………まつのかた松乃片癒ゆめ々子といます。

よろしく願いますね、ハヤテ様」

「はい、こちらこそ」

(あつ、今のここの流れの出来事……お嬢様の漫画のネタにできるかもしれない……)

癒々子との自己紹介を終えた瞬間に八ヤテは考えた。何もなかったとかよりはました。

「あつ、いけない。私そろそろ帰らなければいけませんでした……」

「そうですか？なら送って」

あげましようか？という前に癒々子が手をだしてそれを止める。

「大丈夫です。すでに迎えの者が着ているようですので」

「え？……あつほんとですね」

癒々子の見ているほうを見ると、公園の入り口のちょうど道のとりに黒い車がきていた。おそらくあれのことだろう。

「ではこれで……」

今日は本当にありがとございました

「いいえ、別に僕は」

「ではまたあいましょう」

癒々子

そのまま髪を揺らし入り口のほうへ向かっていった癒々子は公園の入り口でこちらを向き手を振ったあと、黒い車に乗って行ってしまった。

「よし、僕も帰ってお嬢様に早速今あったことを全部話すとしますか」

ハヤテもそのままお屋敷の方向に歩いて行った。その足取りは軽かった。

この時は誰もわからなかっただろう。

この2人の出会いからまさかあんなことになるなんて……。

?????

「ついに癒々子が三千院の執事と接触したか……」

「はい。ひとまずはこれでいいですね。後は我々が……」

「ああ、仕込みは頼んだぞ。さてと、俺も準備するか……。待っているよ、癒々子。それと、三千院の執事よ」

「またも歯車は動きだす。」

「誰にも気づかれないます……」。

ちなみに、

「で、お嬢様、僕は癒々子さんと運命の女性と出会ったような感じ  
でって、何怒っているんですか？」

「知るか！？ハヤテのバカ！！（私の前で女の子の話をだらだらと  
……そんな魅力がないのか私は！！）」

（せっかくネタ持ってきたのに、どうして怒っているんだろう……）  
そんなやりとりがナギの部屋で行われてたり……。

（まったく……この2人は……）

そしてそれをドアからこっそりと覗きながら見ていた桂馬とマリア  
もいたそう。

## 第21話 出会は突然やってくる（後書き）

というわけですがどうでしょうか。

というか出会の部分が若干適当に……。うまく書けなくて自分でも納得できないのですが、これ以上いいものが書けないのでこれにしました。おかしかったら言うてください。

作者は明日は文化祭です。……はあ、だるだるですよ。色々やることいっぱいです。

感想、そして質問等はいつでも歓迎ですので、気軽に書いてくれると嬉しいです。

というか元気です。

それではまた次回で！！

第22話 人が嬉しい気分の方はこちらも嬉しい気分になるのはなぜだろう？

お久しぶりです。

遅れてしまい申し訳ございません。

今回は色々あったので遅れてしまいましたと言いつきみですが、  
うしか言えません。

それでも楽しんでいただけたら幸いです。

それではどうぞー!!



## 第22話 人が嬉しい気分の方はこちらも嬉しい気分になるのはなぜだろう？

「あの……昨日のこと、まだ怒ってるんですか？」

三千院から白皇学院に続く通学路で、かばんを片手に持ちながら隣でふてくされているナギにハヤテが質問する。

昨日の出来事とは、癒々子との出会いのことである。

「……」

そんなハヤテの質問にナギは無視する。

「……すみません、お嬢様。……では僕はお嬢様を怒らせてしまった罰として死にます！！」

「おおい！！なんで死ぬ必要なんてあるのだ！？」

「必要とされていない僕なんて存在していないと同じです！！だったらいつそのことここで潔く……！！」

「だから……あゝもう！！ハヤテにはいいところがたくさんあるのだ！！」

「しかもいないと私を起こしてくれるのは誰になるのだ！！私はハヤテ以外に起こしてもらうなんてことはごめんだぞ？」

「……お嬢様」

「だから、その……悪かった。もう怒ってないから。」

勝手に怒ったりしてごめん。だから居なくなるとか、そういうこと

は言つな」

「はいっ!!!お嬢様——!!!」

嬉しかったのか、ナギの手をとってハヤテは涙を流していた。

「お、おい、こんなところでそんな強く手を握るな／＼」

「す、すみません!!!」

「とにかく学校行くぞ?このままじゃ遅刻してしまう」

「はい、分かりました」

顔を赤くしながら照れ隠しにさっさと行くナギに、ハヤテは服の袖で涙を拭きながらナギについて行った。

### 昼休み白皇学院内、とある広場

「まったく相変わらず桂馬さんのお弁当はうまいな」

「ああ、何を食べてもまったく新しい味が生まれ続けていくから、こちらも飽きることがない……最高だ。

これでは料理界の法則が乱れる!!!」

「いや、そんな法則ないと思うのですが」

広場のベンチで座りながら生徒会三人娘と桂馬は今日も昼飯を食べ  
ている。

「それにしても今日は僕に用ですか？」

桂馬は四時間目が終わった瞬間に美希に呼ばれたのを思い出す。

「ああ、私達ではないがな」

「え？では誰が……」

「ほら、泉、出番だぞ？」

「やっと登場だよ」

理沙と美希が泉に目を合わせる。

泉はそれに呼応して桂馬のところまで来る。何か後ろに手で隠して  
いる。

「せっかく作ってきたのだから食べてもらわないとな？」

「うむ、まったくもってその通り」

「うう、リサちゃんと美希ちゃんいじわるっ……」

少し恨めしい目で2人を見る泉だが、そんなのは2人は無視した。  
ただニヤニヤと泉を見ている。

「あの、どうかしましたか？泉さん」

「あつ、えつと、その……きよ、今日ね私その／／」

顔を赤らめてもじもじとしている泉は広場を通っている通行人達を死に追いやるのは簡単だった。

「お弁当、作ってみたんだけど……た、食べてみない、かな？／／」

泉が桂馬の目の前に出したのは、ピンク色の容器、お弁当だった。

「ちなみにこれを朝早く泉は作ってましたー」

「しかも作ってる時、かなり幸せそうでしたー」

「だから2人とも余計なこといわないでよお！？／／／」

2人の言葉に反応して声を上げる泉だが、それとは反対に顔が赤くなっていく。

「そうですか……苦勞をかけてすみません」

「え、いいよ、私が勝手にやったことだし……」。

あと、いやなら無理して食べなくていいから」

「いえ、そういうわけにはいきません。せつかく泉さんが作ってくれたんですから。」

それに……こういう人に何か作ってもらったの初めてですから……嬉しいんです。」

そう言つて、泉の持っている弁当を取り、蓋を取る。そこには色とりどりの食べ物置かれていた。

「では、いただきます」

箸を持ち、桂馬はおかずの中からハンバーグを取り出し、そのまま口に入れる。

桂馬はじっくりと味を確認するように噛んでいる間、誰もしゃべることはなかった。

その時間が少し長く感じた三人だが、少しして桂馬が口を開いた。

「凄くおいしいです、このハンバーグ。なんというか、言葉では言い表せないですね」

「ほ、ほんと！？よかった〜……」

安心したのか、ほっと息をつき両手を胸の前で合わせて喜ぶ泉。

「よかつたじゃないか、泉。では私達もいただきますか」

「そうだな、どれどれ……」

そのまま箸を持ち、軽くお弁当から2人は取っていく。とつたのは美希が玉子焼き理沙が野菜炒めの人参だ。

「もぐもぐ、ふむ。……うまい!!」

「ああ、めちゃくちゃうまい!!」

「ありがとう……って勝手に取らないでよー!!」

そんなことはおかまいなしにそのまま箸をお弁当箱に向ける。それを必死に止める泉。

「それにしても……ハヤテ君とお嬢様遅いですね」

3人の騒ぎをよそに桂馬はそんなことを考えていた。

#### 白皇学院廊下

「急ぐぞ、ハヤテ。速くお昼が終わってしまおう」

「ちょっと待ってくださいとお嬢様!!」

桂馬達がご飯を食べ始めていた頃、ナギとハヤテはまだ白皇内にいた。

自分の担任である雪路に手伝わされて、集合場所である広場に行けないでいた。今、それが終わり、でかいお弁当を持ちながら2人は広場に向かっていた。

「ハヤテ様？」

「え？つて癒々子さん!？」

「昨日以来ですね」

ふと自分の名前を呼ぶ声が聞こえたので振り向くと、そこには昨日運命(?)的な出会いをした癒々子がいた。

「癒々子さん、白皇だったんですか」

「ええ。まあ気付かないのも無理ないです。私小さい頃から体が弱いので中々学校にこれないのです。それにクラス違いますし……」

「そうだったんですか」

「おい、ハヤテ。なんなのだその女は？知り合いみたいだが」

不機嫌な顔をしてナギが聞いてきた。

いささかそれに疑問が残ったハヤテだが、気にしないようにして紹介した。

「昨日知り合ってますね、松乃片癒々子さんです。」

癒々子さん、こちらは僕の主の三千院ナギお嬢様です」

「松乃片？確か前にじじいが話していたな。」

綺麗な美人さんばっかの家柄だと……」

昔、じじいこと祖父の三千院帝が話していたことを思い出しているナギの一方で、癒々子が少し驚いていた顔をしていた。

「あなたが、三千院家の。」

噂は聞いています。なんでも三千院きつての天才だと」

「な、なんか照れるな／＼」

癒々子の言葉に嬉しかったのか、顔を赤くして頭をかく。

「三千院様、私のことは癒々子とお呼びください」

「だったら私のこともナギでいい。これからもよろしく」

「はい、ナギちゃん」

2人とも嬉しそうに手を出して握手している。

（よかった。お嬢様ただでさえ人との交流がないからこういうことは大事だよな）

心の中で失礼なことを言っているハヤテだが、まあ事実なので仕方ない。

「ってこんなことしている場合ではなかった。速く広場に行かなければ」

「何か用事ですか？」

「ええ、桂馬さん……御剣先生とお弁当を食べる約束をしながら今向かっている途中です。」

その、よかつたら癒々子さんもどうですか？」

ハヤテの誘いに嬉しそうな顔をした癒々子だが、首を横に振った。

「いえ、私今日はお弁当を忘れてしまつて。」

それにこれから今日は帰らなければいけないのです」



「そうなのか？何か用事か？」

「ええ」

少し暗い顔をしたがすぐにいつも通りの顔に戻した。

「だったら……今度は一緒に食べましょう」

「え？い、いいんですか？こんな私が」

「別に関係ない。癒々子は私の友達だからな」

「そうですよ。それに自分のことは悪く言つのはよくないですよ」

「皆さん……」

こんなに優しくしてくれた人に癒々子は会ったことはなかった。  
だから今のナギとハヤテの言葉には心に響いた。

「では、今度はお邪魔させていただきます。では」

「またな、癒々子」

「はい。またねナギちゃん」

そう言って優雅にだが、嬉しそうに帰って行った癒々子。

「それにしても綺麗だな。さすが松乃片家だな」

「え？松乃片の人って皆癒々子さんみたいに綺麗なんですか？」

「ああ。パーティとかだとすぐにわかる。綺麗だしな。

よく私達の中では話題になる家系だから。

しかし最近の後継者が決まってなくて兄弟でもめているって聞いたな」

「そうなんですか……。じゃあ癒々子さんはもしかしてそれに巻き込まれてるじゃ」

「分からない。だが何かしらあるのは間違いないな。さ、ハヤテ行くぞ」

「あ、はい」

先に行くナギを見た後にハヤテが振り返ると、もうすでに癒々子の姿は見えなくなっていた。

ちなみに昼食にはなんとか間に合った。

「癒々子様、何かいいことでもありましたか？」

「はい！！とびきりいいことがありました」

リムジンの中で、癒々子はSPの質問にはつきりと嬉しそうに答え

第22話 人が嬉しい気分の方はこちらも嬉しい気分になるのはなぜだろう？

今回はあんまりギャグがないと思います。

なぜなら最近、ギャグ成分が書けなくなっているからです。

ギャグ書ける人がうらやまします……。

次回は遅くなるかもしれませんが。でも気分によっては早く執筆できるかもしれません。

よろしく願います。

さてさて次回もよろしく願います。

あ、質問と感想も待っていますよ。

第23話 いい人そうなのは大抵裏でなにか考えている（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ございません。

待っていただいている皆さんに本当にありがとうございます。

そのため今回は前回よりも長くしたつもりです。

さてでは久しぶりにどうぞー！

### 第23話 いい人そうなのは大抵裏でなにか考えている

夕暮れ時。それは数時間しかみることのできない空の輝く瞬間。空が一色に統一されて輝きをみせる。

その中でもこの時間は特別だ。まるで幻想を見ているかのような感覚。

雲ひとつないそんな夕暮れ時、癒々子は一人で歩いていた。いつもはSPがついているのだが今日は一人で歩きたかったのではない。ちなみに息抜きの散歩。彼女は散歩が大好きで週末はよく外に散歩をする。

しかし大抵はどこでも眠れる癖のせいで公園のベンチに座ると眠ってしまうためいつの間にか夜になって全然散歩していなかったことが多い。

しかし今日は公園によらないコースで歩いていた。

「やっぱり歩くことは素晴らしいです。それにこんな綺麗な夕暮れ時に歩けるなんて……夢のようです」

独り言をつぶやきながら上を見上げる。

しばらく上を見上げると、

「?」

不意に後ろから気配を感じた。先程までなかった視線。しかし後ろを向いても誰もいなかった。

「気のせいかしら?」

そのまま進んでいく癒々子。  
そしてしばらくすると電柱から一人の男が姿を現した。

「……」

灰色なスーツに身を包んだ男は癒々子とは反対方向に歩いていく。  
そしてその男の胸の部分には、『松乃片』と漢字で書かれていた。

それから五日後

「えっ、最近誰かに見られている?」

「はい……」

癒々子は今、ナギの家に来ている。何故ナギの家に来ているかというと、この前出会ったのをきっかけに遊ぶようになったからだ。

最近ではよくナギの漫画講座に参加している。理解できるらしい。その過程で伊澄とも仲良くなった。

今日も漫画のことについて話すつもりでここに来たのだが、ふとこの前のことが気になってハヤテに相談した。

「最近になって増えてきて……。ちょっと怖くて。  
でもSPの方達にはこんなこと言えなくて」

「どうしてですか?」

「私よく迷惑かけてて、それで私の言うことってあんまり信用されてなくて……。」  
それに普段はお兄様の屋敷で働いているSPだから数人の使用人しかいなくて」

現在松乃片家では後継者争いが起こっている。

癒々子の父でもある松乃片昭二しゅうじが後継者を言う前に他界し、今は臨時で兄である康成やすなりが当主になっているが、そのまま当主になるのは時間の問題だった。それをよしとしない癒々子派の連中が現在猛抗議している。そして逆に兄派のほうも妹派である奴らがうっとうしくて仕方がないため、どちらも争い状態が続いている。ちなみにそういうこともあってか、兄の家の周りは防備が固く、ところどころにSPがいる。  
もっとも癒々子自体は兄のことに反対していないので勝手に争っているということになる。

「しかも今日は使用人の人達もお兄様の家に呼ばれてしまっているのは執事の中井だけなのです」

「そうですか……」

「そうなのか」

「っってお嬢様いつの間……」

隣を見ると、そこにはいつの間にか話を聞いていたナギがいた。

「え？いや、まあ部屋入ったらなんか話してたからちょっと聞いてみようかな、と思って」

「それにしてもいきなりで驚きましたよ。どこぞの瞬間移動じゃないんですから」

「でもハヤテだっていきなり現れるじゃないか」

「あれは執事としての能力だから仕方ないんです」

「いや、執事全員ができるわけじゃないから」

「ほんと、2人とも面白いですわ」

2人のやり取りを笑顔で見る癒々子に本題に戻ろうとする。

「それより、そんなだったらハヤテを連れていけ」

「え？いいんですか？」

「ああ、私には桂馬もいるんだし。それにハヤテは癒々子とも仲がいい。某主人公的にT.O.L.O.V. 的なことは起こさないから心配はしなくてもいい」

「タイトルですでに丸わかりですよ、お嬢様」

「だから安心してハヤテを連れていくといい」

「でも、ナギちゃん。それでいいの？普段はハヤテ様が近くにいないと人生が終わるとか言ってる」

「だあああー！とにかく、連れていけ！これは命令だ！」



いいな!!」

( (命令になっちゃってるよ……) )

顔を赤くしているナギはそのまま漫画をもって部屋から出て行った。  
恥ずかしかったようだ。

まあ、当の本人には聞こえていなかったから、大丈夫だったのだが。

「とういわけで今日はよろしく願います」

「こ、こちらこそ、よろしく願いますわ」

若干戸惑いながらも癒々子は頭を下げた返事をした。

その後、帰るまでナギの漫画講座を聞いた。

それを見ながらハヤテは思った。

( やっぱり、お金持ちのお嬢様達って格が違うな )  
と。

### 帰り道

「すっかり暗くなりましたね」

「そうですね。街頭の明かりがないと見えませんね」

現在、帰宅途中の癒々子とそれに付き添うハヤテ。ナギの命令通り、ハヤテはそのまま癒々子と一緒に家に向かうことに。

「気配は今のところありません」

「そうですか……。やっぱり気のせいなんでしょうか？」

「分かりません、でももしかしたら今日はいないのかもしれないかもしれません」

そのまましばらく歩いてても怪しい視線はなかった。

そしてついに、到着してしまった。

癒々子の家は三千院の屋敷よりかはかくはないが、それでも近所の一軒家よりはかなり大きい。

さすがにもう慣れたのか、ハヤテもそのことについては口にしなかった。

「結局出てきませんでしたね」

「ええ、でも明日も油断はしないようにしませんと」

「そうですね。」

中村、帰りました」

インターホンを押して中村という男の名前を呼ぶ。

すると、灰色のスーツを身にまとった黒髪で眼鏡をかけている男が出て来た。

見た目から見て歳は二十代前半といったところか。

「おかえりなさいませ、お嬢様。今日は大丈夫でしたか？」

「ええ。今日はハヤテ様……お友達が一緒だったので」

「そうですか。すみません、本当は私が付いていなければいけないのですが……」

「仕方ないですわ。中村は家のことで精一杯だし、それにお兄様にも取り合っていたいただいているから……だからそんなに自分を責めないで」

「ありがとうございます……」。

「あなたが最近お嬢様から聞く三千院の執事の方ですか？」

「え、ええ、そうですけど……」。

綾崎ハヤテです」

そういうと中村はほほ笑み、

「そうですか……。今日はありがとうございます。」

「私はお嬢様専属の執事中村でございます」

感謝の言葉をハヤテに伝えた中村は深く頭を下げると、そのまま自己紹介した。

「こちらもよろしく願います。」

……さて、では癒々子さん。僕はこれで」

「といきましたが、そうはいきませんよ」

「え？」

帰ろうとしたハヤテを呼びとめる中村。  
疑問に思うハヤテは中村に質問した。

「どうして、ですか？」

「それは私が説明します」

中村の代わりに答えたのは癒々子。

「今日、中村以外の使用人さん達がないのは話しましたよね？」

「はい、聞きましたけど」

「だから、その、もしなにかあった時に中村だけでは対処できないのです。

ですから……今晚だけでも、一緒に泊まっていただけないでしょうか？」

「ええ！？」

ハヤテは驚愕の色を隠せなかった。

それりゃこんな美人さんからこんなこと言われれば誰だって動揺するだろう。

もしかしたらT O L O V E 的なることになるかもしれない……。そしてもしかしたら、その先でさえも……、

（作者さんはこの小説を何処に持って行きたいんですか！？それよりまたT O L O V E するネタですか！！  
ってそんなことよりも……！！！！）

「そ、その……癒々子さんは平気なんですか？  
僕と泊まるの」

「？どうしてですか？」

お友達ならそういう交流もある、と聞いたことがあるのですが……」

(……それりやそうだよな。そこまで深く考える必要ないよな)

どうやら癒々子は別に男だからと言って恥ずかしがっていない様子である。まあハヤテなら何も起こさないと信じているのか、それともそんなことにはちっとも気付いてないのか……。それにしてもハヤテ君……純粹だな……。

(うるさいですね！いいでしょ！？何事にも純粹であり続けることはいいいことです……！)

……ま、そういうことにしときましようかね。

(なんで間が空いたんですか？信用してませんよね、完全に)

「どうしたんですか？何か考えごとですか？」

と癒々子は上目づかいで覗いてくる。

「い、いいえ。なんでもないです。」

……ではよかったらお邪魔させていただきます」

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますね」

こうして癒々子とお泊まり会が始まった。

癒々子が住んでいる家は松乃片家の別荘にあたる場所である。元々は実家のほうに住んでいたのだが後継者問題の件がありこちらに移された。

とはいえ本家とはそれほど遠い距離ではない。また大きさも本家や三千院家と比較すると小さく見えるが充分な広さであり、大勢人が来れるようになっていたりする。

なお、こちらは和風の部屋や洋風の部屋など様々である。これは癒々子や兄である康成や父である康成の趣味が色々取り入れた結果である。

現在、ハヤテ達はリビングで紅茶をすすりながら雑談をしていた。

「へえ、じゃあ中村さんは癒々子さんに助けてもらったんですね」

「はい。……親に捨てられて道端で死にそうなところを助けていただきました。お嬢様は私にとって命の恩人なのです」

「もう、私はそんな大した人間じゃないのに中村つたら…… / / /  
照れ隠しなのか顔に両手をあてているが赤くなっているのは丸見えである。」

「なんだか中村さんは僕と似ていますね」

「とうとうとハヤテ君も？」

「ええ、僕も親に捨てられました。しかも多額の借金付きで」

「ひどいですね……」

「ええ。一度は諦めかけたのですが、お嬢様のおかげで今は希望に満ちた生活をできています」

「それはよかったです」

「ハヤテ君、私達はいい主に出会えたね」

「はい！！」

そしてそのまま雑談は深まり、夜になった。

「おっと話しすぎましたね。では私は夕食の準備をしなければ」

「あつ、僕も手伝います」

「いいや、君は今日はお客さんなんだ。それに君にはお嬢様を守るという大事な使命を負わせている。」

そんな人にこの家の手伝いなどをさせるなんて、とんでもないよ。だからここは不本意でも従ってくれないかな？」

「そこまでいうなら……分かりました。」

でも何か困ったことがあったら言うてください。これでも執事のはしくれなので」

「分かった。」

ではお嬢様、夕食の準備をしますので、その間お部屋にハヤテ君でも連れて遊んでいてください」

「分かったわ、中村。」

ではハヤテ様こちらです」

キッチンに行く中村を見送った後、ハヤテは癒々子の部屋に行くために癒々子の後をついて行った。

階段を上り二階に行くと、部屋が色々あるが癒々子は階段から少し離れた廊下から左の部屋のドアを開けた。

「さあ、こちらです」

「す、す「じい……」

遠慮しながらハヤテが部屋の中に入ると、そこには想像と少し違った光景が広がっていた。

漫画やラノベ、そして普通の小説がいたるところに置いてあった。しかもちゃんと棚に綺麗に納められていた。

まるで小さい図書館にいるようだった。

ちなみに窓際にベットが置いてあり、そこには可愛いくまさんのぬいぐるみが置いてあったりする。

「本がいっぱいですね」

「はい、私読書が好きで、昔から色々読んでいたんです。

ひどい時には一週間どこにもいかず部屋ですっと本を読んでいたことも」



「それはまた凄い集中っぷりですね」

「ほんと、自分でも驚くくらいです」

癒々子はそのまま棚に行き、取り出す。見たところ漫画のようだ。

「でも普通の小説はそこそこで普段は漫画とかライトノベルを読んでいますね。ちなみに小さいころから私はジャプをお父様と一緒に読んでいました」

「お父さんも漫画とか好きだったんですか？」

「私よりも好きでした。新作の漫画は全部チェックしてましたし」

「そうですか……。あつ、それ最近出た漫画ですよね」

「ええ、すぐに本屋に行って買ってきました。この漫画の限定版はどうしてもほしかったから……」

その漫画は『僕が勇者にされる物語』と書かれていた。ちなみに十巻目。作者は『イチハラカズト』。表紙の女の子がまた可愛いのが印象だ。

（あの人、漫画も描いていたんですか）

もうなんとも凄い人間である。いや人間の部類には入らないのかも  
しれない。

「この人に一度会ってみたいです。小説のほうもですが、とっても  
面白いし絵も可愛いし……」。

どういった考え事しているのか聞きたいです」

「案外癒々子さんのすぐ近くにいますよ」

「え！？そうなのですか？」

「ええ、なんだったら今度都合がいい時にでも会える機会を設けましょうか？」

「ええ、お願いします！！」

目をキラキラさせる癒々子は今まで見たことないのでハヤテは驚きながらも分かりました、と答えた。

（ってそうか……今考えたら、癒々子さんと二人つきり……）

改めて癒々子を見る。かなりいいスタイル出るところは出てて締まっているところはちゃんと締まっている。しかも優しくて大人しい。

まさに理想の女性像である。

「？どうしたのですか？ハヤテ様？私の顔に何かついていませんか？」

じっと見たいいたハヤテに気になったのか癒々子が顔をのぞく。

「い、いや、なんでもありませんよ」

「それならいいですけど……」

すると癒々子は取り出した漫画を棚にしまいに行った。

(まさか癒々子さんのこと考えていた、なんて言えないよ……)

いつの時代でも男という生き物はそういうものである。

そんな感じでしたらしく雑談していると、中村が呼びに来た。どうやら夕食が出来上がったようである。二階にいてもすでにいいにおいがする。

「今日はお嬢様の好きなシチューにしました」

「昨日仕込んでおいたのはそれね。それにしてもいい匂い。やっぱり中村は料理が上手ね」

「そんなことはありませんよ」

「いやでもこれは凄いですよ。こんな見るからに食欲をそそるシチューは見たこともありません」

「そこまで言うほどかね？でもありがたく受け取らせていただくよ。さっ、冷めないうちに……」

すでにシチューはお皿の中に入れておりそこからは湯気が出ていた。その湯気がなんとまた暖かい。

「「いただきます」」

2人そろって口にし、シチューをスプーンでとり口の中に運んだ。すると今まで冷えていた体が温かくなってきた。

「「うふふ、どうです？自慢の中村料理は？」」

「至高の一言ですよ……」

「至高とまで言われるとは。しかしこれで作ったかいがあったよ」

少し安心していている中村をよそに2人はシチューを食べていた。そして先程のように三人で雑談する。

そこはまるで、家族のような、そんな感じに見えた。

「では今日はゆっくりお休みください」

「はい。ハヤテ様も」

すでに十一時を回ったところ。ハヤテと癒々子は部屋の前にいた。

「今日はありがとうございました」

「え？」

突然言われた感謝の言葉にハヤテは疑問に思った。

「久しぶりなんです。こんなに楽しい夕食は。いつもの夕食は私人がほとんどでこんなに話せなかったですから……」

「あっ……」

癒々子が寂しそうな顔をして初めて気付いた。

最近の後継者争いで不安になっていたのだと。そして一人でいるという孤独さを。それはどんなにつらいことだろう。

「今後ですけど、僕でよかつたらなんでも話してください。力になれないかもしれませんが……僕は癒々子さんの友達ですから」

だから言った。何回目かもしれないがそれでも言葉を噛みしめて真剣に言った。ハヤテも一人のつらさは知っている。だからこそ分かる。

僕のようになってほしくないと。ハヤテは心の中でそう思った。

「……はい！！では遠慮なく相談させていただきますね」

「ええ、どんとこいですよ！！」

力強く笑顔で答えた癒々子にハヤテは胸を張って答える。

「では、お休みなさい」

「はい、お休みなさい」

そうして癒々子は扉を閉めた。ハヤテも自分の部屋に行こうとしたが、先程中村にリビングに呼ばれたので行くことにした。

リビングにつくとそこには中村の姿はいなかった。しかし机の上には手紙と飲み物が置いてあった。

『明日に使う料理の材料が切れたので買ってきます。』

そこにあるのは僕が入れたお茶なので、ゆっくり飲んでください。

ちなみにコーヒーです』

なんともまあ中村さんらしい文体だな、とハヤテは思った。まあ知り合って一日だが。

「って暖かいつてことはさっき出かけたばかりなのかな？  
まあいいや。ここはお言葉に甘えていただく」

だからゆえに気が付かなかった。

それは普段のハヤテなら気付くはずだった。そう普段なら……、

「っ！？……なんだ……こ……れ」

コーヒーを飲んだ瞬間、急に目眩がハヤテを襲った。それは目眩とかのものを超えていた。

体を踏ん張ってないと立っていられない状態。すでにコーヒーが入ったカップは落としている。

限界が来たのかついに体が倒れてしまった。

「い、一体……誰が……」

いやそんなこと言わなくても分かる。いや普通に分かる。

犯人はこのコーヒーを入れた人物。つまり、

「な、中村……さ……ん」

「しばらく眠ってるといいよ。ハヤテ君。大丈夫、死なないから安心なさい」

不意にそんな言葉が聞こえて来た。そしてその瞬間ハヤテの意識は

途絶えた。

「さて、一人目はこれで終わった。あとはお嬢様を連れていくだけだ。

例の『アレ』は手に入れたし……」

目の前で倒れているハヤテを無視して二階に上がる。  
そして癒々子の部屋の前に立つ。

「申し訳ありません、お嬢様。

でもこれも……松乃片家のため。そしてお嬢様のためなのです」

申し訳なさそうに言葉を吐いた後、中村は起こさないようにそっとドアを開けた。

第23話 いい人そうなのは大抵裏でなにか考えている（後書き）

ついに物語が動き出しますよ。というかなんり展開が急すぎて自分でも笑えるレベル。

自分に才能がないとおらためて実感しました。

あと……桂馬君出てきてねえ……。ごめん。

次回は出すからね。なるべく早く更新したいです。

感想、質問待ってます。ではまた次回でお会いしましょう。



**第24話 姫様を助けるのは勇者の仕事（前書き）**

お久しぶりです。

今回は前回にくらべてかなり短くなっておりましてご注意を。

ではではごじやー…

## 第24話 姫様を助けるのは勇者の仕事

「う、ううん……」

朝日が窓から入り、その光でハヤテは目を覚ました。

「あれ……ここは」

見渡すと何もない質素な部屋。しかしどこか昔ながらの匂いを感じさせる部屋だった。

「……そうだ。僕は癒々子さんの家に泊まることになって……」

ハヤテはすぐに昨日のことを思い出した。

「それで確か最後に……っ!?!?」

そう、ハヤテは思いだした。最後に何があったのかを。

「どうして中村さんが……」

なぜか分からなかった。あの優しい中村がどうしてこんなことをしたのかハヤテには理解しがたかった。

「……とりあえずこの部屋から出ないと」

布団をどかしベットから下りて部屋から出る。

部屋から出ると廊下が階段のほうまで一直線に続いていた。

「昨日きた二階の廊下か。」

……そういえば癒々子さんはどうしているんでしょうか?」

そつだ。昨日あれから癒々子には会っていないため気になってしま  
う。

「……もしかして中村さん……癒々子さんを誘拐するために僕を眠  
らせたんじゃない?」

ふと頭に浮かんだことをハヤテは言った。

「ま、まさかそんなことはない……はず。だって中村さんは癒々子  
さんの執事ですよ?」

執事は主を守るのが仕事。その執事がお嬢様を誘拐するなんて……」  
信じられないと言った口調で話すハヤテだが、その心の中ではそれ  
を否定している自分がいた。

「あつ、綾崎さん!!」

ふと女性の声が聞こえた。声がる方向を向くとメイドさんがいた。

「目が覚めたんですね。よかったです……」

「えっと……あなたは……?」

「あつ、す、すみません。いきなり話しかけてしまって……。  
わ、私は竹原美野里たけなみのりです。癒々子様のメイドをさせていただいて  
るものです」

丁寧に美野里は頭をさげて自己紹介する。

「ぼ、僕の名前は」

「知ってます。話は聞いております。こうして実際に会って話すのは初めてですけど」

「そういえば僕のこと知ってるみたいですけど……」

「癒々子様からよくお話を聞いていました。一日に必ず一回は綾崎さんと三千院様の名前ができましたよ」

と少し嬉しそうに話しているあたりこの人も癒々子のメイドだと思わされる。

「そうですか……」

あの、それで癒々子さんは？」

今自分が一番気になっていることを聞いた。

「癒々子様は……いません」

「え？」

「いないんです。この家には……」

……誘拐されたから」

美野里の言葉に驚きながら、ハヤテは先程の考えが当たって複雑だった。

「やっぱりそうですか……。ということは連れて行ったのは中村さんしかない」

「えっ、それってどういうことですか？」

ハヤテの言ったことがいまいち理解できていない美野里にハヤテは事情を伝える。

「そんなことが……。中村さんが……」

「やっぱり中村さんは信頼されていたんですね」

「はい……。癒々子様の面倒は勿論のこと対立関係にある康成様の監視もしておられましたし、それに私達メイドにも優しくしてれるいい人でした。

「……どうして……」

「あの、それで中村さんが何処に言ったか分かりますか？」

「……多分、本館だと思います」

「本館？もしかして松乃片のですか？」

「はい、その通りです。というかそこに行くしかありません……。それに私達が本館に呼ばれていた時に康成様が『もうすぐあれが手に入る。あとは癒々子をなんとかすれば』とか言っていましたし、明らかです」

（お兄さん重要なところで失敗してますね……）

何事にも人は一度は失敗するものである。例えそれがどんなにアホなことであろうとも。

「そうですと竹原さんたちを本館に呼びつけたのは、誘拐をスムーズにするためとみて間違いはありませんね」

「そうですね。まったくこんなことではメイド失格ですね。こんな簡単な罠に気付かずに……」

罰の悪い顔をする美野里。

「それは仕方ないですよ。それよりも本館の場所を教えてください」

「え？本館ですか？どうして……。まさか……行くつもりですか？」

「ええ、当たり前じゃありませんか」

当然のごとく口にするハヤテに美野里は驚きを隠せなかった。というか理解できなかった。

本来ならばこれは私の責任。それにこの問題は松乃片家の問題で他人が突っ込むべきではない。それは危険だから。

臨時とはいえ今は兄の康成が当主。何をしてもおかしくはない。もしかしたら命の危険さえあるかもしれない。

そんな状況でこの目の前にいる執事は何事もないように自然とこたえたのである。

「ど、どうして……」

「だって僕、癒々子さんの友達ですから。友達の危機にはかけつけ

るものです」

「あっ……」

それは簡単な言葉だったが、なんとも響きのいい言葉である。

(なるほど、癒々子様が気にいったわけです……)

聞いただけでは分からなかったことが分かって納得した美野里は笑顔になった。

「それでは……すみませんがお願いします……。私もここでの処理が終わったらすぐに駆けつけます」

「いえ、大丈夫です」

「それじゃ本館の場所をいいますね」

そして口頭で本館のある場所を伝えるとダッシュでハヤテは駆け出しました。

ところ変わって三千院家では

「ぬ?」

「どうしたんです?お嬢様」

漫画を読んでいたナギが突然立ち上がったのを不思議に思った桂馬は聞いてみる。

「うむ、なにやらわからんが、私の愛しのハヤテに何か起こってるみたいなのだ」

「……どうしてそんなことわかるんです？」

「何って決まってるだろう。私は主だ。執事に何が起こったなどバトル漫画みたいに虫の知らせで私の元に伝わる。

ちなみにお前もだぞ、桂馬」

「そ、そうだったんですか……執事を雇う主にもそんなの保有スキルを持ち合わせてるとは……これでまた勉強になりました」

「勉強になったのはいいことだ。ちなみにF a eで言うとB +くらいの能力だな」

（桂馬君完全に騙されてます……。しかもスキルのランク意外に高い）

こうしてまた新たな嘘知識を桂馬は無駄に覚えていくのだった。

「というかマリアそこにいたのか？」

「いましたよ！！というかこちら側の視点になってからはずっと部屋の前にはいましたー！！」

「そうか。まあそんなことはともかくこのままじゃハヤテが大変な



ことになるかもしれない」

（そうかで私のことはすませるんですか……いいですよ、私はどうせ存在感が薄いメイドさんなんですから）

すみつこで体育座りを初めて落ち込んでしまっているマリアをよそにナギは続けてしゃべる。

それをかなり気になる桂馬だが今はナギの言葉に耳を傾けることにした。

「それでだ、桂馬、頼みがあるのだが」

「はい、ハヤテ君のところに行け、ですね」

「うむ。それだけ分かってくればいい。」

ちなみに多分、ハヤテはなんらかの行動を起こしていると思われるからこれを桂馬にやろう」

ナギが桂馬に渡したのはスマートフォンみたいな、というかそのまままだった。真ん中には小型の人間型ドット絵が映し出されており、上のところには目的地までの距離や時計などが出ている。他は地図が表示されている。ちなみに目的の表示は緑の点が点滅している。

「これはハヤテの居場所が分かる道具だ。まあ使い方は一般的なスマートフォンと変わらないからな。」

ちなみに暇つぶし用としてフォルダーには私のお気に入りのアニメが入ってるからそれを鑑賞するといい」

「はい、分かりました。暇な時にでも拝見させておきます。では行つてきます」

そして桂馬もハヤテを追って動き始めた。

「……おいマリア、いつまでそこで落ち込んでいる気だ？」

「ふんっ、知りませんっ！私なんて地味なメイドさんで存在感が薄い17歳なんです！！」

今日もメイドは悩む。

「くしゅん！！風邪かな？でもなんだろう私の気になるところをどこかで言われてる気がする……」

とある場所では地味で普通の女の子がくしゃみをしていたそうなの。

## 第24話 姫様を助けるのは勇者の仕事（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？  
今日も楽しんでいただけましたか？

桂馬「いや、それ以前に短いです。どういづことですか？」

えっと、簡単に言うと最近、なんだかうまく長く書けなくてですね。  
若干スランプ中だったりします。

その証拠に今回も笑える要素ないし内容意味分からんし……自分で  
書いていて最悪です。

咲夜「ま、簡単に言うとただの言い訳やな」

桂馬「その通りですね」

咲夜さん、なんでいるんですか？

咲夜「それは次の話して私が出るからに決まってるやないか。  
というか最近本編に出てなかったからここででることさえ久しぶ  
りなんやから」

ごめん、僕のせいです。でも後悔はしてないよ

咲夜「笑顔でさらりといいおったでこの作者。まあええけど」

というか伊澄は？彼女も次に出るから次回予告言ってもらったために  
呼んだんだけど。

咲夜「伊澄さんは……まあいつものあれや」

桂馬「……なるほど」

これで伝わるってすごいよね。まあそれほど彼女が迷子癖が凄いつてことだろうけど。

じゃあ仕方ない、2人で次回予告よろしく。

咲夜「分かったで。

ほな。次回、ついに借金執事が松乃片家本館に突入するで!!」

桂馬「それを追いかける僕ですが……なんと途中で頼りになる助っ人に出会います!!」

咲夜「松乃片家兄、康成の目的、そして癒々子さんは!？」

次回を

伊澄「見逃したらいけませんよ?」

咲夜「また取られてもうたああ!!」

桂馬「じ、次回も皆さんよろしく願います」

ちなみに彼らが言った通りにはなるかどうかわかりません……。

では次回をお楽しみに!!

第25話 作戦はしっかりと隙のないように練って考えよう(前書き)

11月の最後に投稿できてよかったです。

今回ダジャレがありますが多分ダジャレになってないんじゃないか  
と思います。

そのところは作者のセンスのなさというところですみません……。  
なのであんまり気にしないでくれると嬉しいです。

それではござい。。。

## 第25話 作戦はしっかりと隙のないように練って考えよう

「ここか……」

水色の髪の毛をした男が目の前にある大きな館を見つめていた。その男の名は綾崎ハヤテ。三千院家の執事である。

「待っていてください、癒々子さん。必ず救ってみせます」

そう彼は今、友達を救出する任務を行っている。

「でもどうやってあの中に入りましょうか……」

ハヤテは顎に手を当てながら目の前にある館をじっと見つめる。

（おそらくかなりの警戒態勢に入ってるはずだから……はあ、これはめんどくさいですね）

悩むハヤテだがこれは当然である。しかも味方はいない。いるのは自分一人だけ。

「はあ、困りました」

「お困りでしょうか？」

「それはそうですよ……って桂馬さん!？」

声が聞こえた方に反応するとそこには自分と同じ三千院の執事の御剣桂馬が立っていた。

「ど、どつして……?」

「えつとですね、お嬢様がなにやらハヤテ君が危ない電波を受信してそれで僕にハヤテを助けてやれ、ということだ」

「お嬢様つて時折よく分からなくなります……」

そしてそれができるであろうと心の中で思っていたハヤテはまたさらに複雑になる。

「ちなみにこの装置、色々な機能が付いていてですね。例えば……ドラゴンレー　ーにできたりガ　ダムの探索レーダーにできたりと。しかも音までちゃんとあの音なので臨場感ありますよ」

「無駄に凝ってますか、それ」

「それからあの機能は今日の不幸占いとか今日会いたくない人の占いかウントダウンとか……」

「それは絶対にいららないと思います。というか全部マイナス関連じゃないですか!」

「2人とも、漫才やってんのもええけど、そろそろウチらをださせてや」

雑草の中から出てくる2人の影、それは咲夜と伊澄であった。

「久しぶりの登場やな。なんというか地に足つけるのも久しぶりやな」

「私もようやく出れたわ。これも作者さんの陰謀のせいね」

「いや、伊澄さんは迷子スキルのせいやと思うけど」

「迷子じゃありません。……ちょっとした観光に出かけてただけです」

「そこまで迷子と認めん気がいな」

「あの、それよりどうして伊澄さんと咲夜さんがここに？」

当然とも思えるハヤテの質問に桂馬が答えた。

「実は……」

「あ、回想ですね。わざわざありがとうございます」

ここに来る少し前

「あともう少しで近づきますね」

桂馬は住宅街をレーダー装置をみながら走っていた。

「……こういう時、トランザとかそういう急激に早くなる能力がほしいですね」



「あんたは何になりたいんか」

「あ、咲夜さん。なんだかお久しぶりです」

声のした方に立ち止まるとそこには私腹姿の咲夜があきれ顔で立っていた。

またまたチェックのスカートと上着のパーカーが彼女の可愛さを引き出していた。

「桂馬も久しぶりやな。確か最後にでてきたのは9話やからあれから16話ぶりの登場ってことになるな」

「そうですね、ってそんなに出ていませんでしたっけ……」

「まあ描写には出てなかったんやけどな、実は結構の頻度でナギの家に着てたりするで？」

「確かにそうですね。でもじゃあなんで描写には一切出てこなかったんですか？」

「多分それは作者の凡ミスや。というかこの話書いているときに気付いたらしいで」

「相変わらずの駄目作者ですね。さすがと言いたいところです」

そういうことを言っではいけない。駄目でもいいからそういうことは心の中で言ってください……。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして、なんで咲夜さんがここ

に？」

扱いがひどいがもう気にしてはいけない。

咲夜がここにいることが気になった桂馬は咲夜に質問した。

「まあ散歩つてやつや。で歩いてたらたまたま……。」

桂馬は？」

「僕はですね、任務の途中でして……。」

「任務？」

「ええ、事情を説明しますとですね……。」

（青年説明中）（決して説明の描写がめんどくさくなったわけではない。断じて!!）

「なるほどな。で今追いかけていると」

「はい、そうなんです」

「ふう〜ん。だったらウチも連れてつてくれんかな？」

「え？で、でも危ないですよ？」

「ちょっとやそつとの危険、ウチには関係ない!!それにたまには刺激のあることがあってもええと思つてな。お願いや」

「でもやっぱり……。」

と桂馬が頭を悩ませていると、

「あら、桂馬さんに咲夜。こんなところで出会うなんて……」

「え？あ、伊澄さん」

なぜか伊澄がいた。

「なんでこんなところにおるん？伊澄さんも散歩かいな？」

「……まあそのようなものです」

（（今の間は一体……））

「咲夜達こそこんなところで何をしてるの？」

「ああ、実は」

（少女説明中）（だから描写がめんどくさくなったわけじゃない）

「ってわけなんですけど……」

「そうですね……。」

「すみません、私も連れて行ってもらえませんか？」

「え？」

「なんだかやな予感がするので……それに味方は多いほうがいいと思います」

(確かに伊澄さんは強いから頼もしいけど、こんなことで巻き込んでもいいのでしょうか?)

中々承諾できずに悩んでいると、

「……桂馬さん、私達はナギのお友達です。そしてハヤテ様も大切な人です。

だから協力したいのです。そこに危険があらうと」

「ウチだって怖いけど。でもウチもなんかできるかもしれへん。それにどうもあの借金執事は心配なんや」

「2人とも……」

桂馬はその真剣な2人の眼差しに今までのことは失礼だと感じた。

「分かりました。行きましょう。

でもこれも忘れないでください。僕が必ずあなた達を危険から守ります。だから心配しないでください」

(桂馬 (さん)らしい答え)

でもだからこそ色んな人が慕うのだろう。改めて2人は御剣桂馬という人間を感じた。

「とうわけです」

「回想お疲れ様です」

「ところで借金執事はこんなところに何の用なん？見るところこの家、松乃片家の本館みたいやけど」

「ええ、私も気になってました」

「それはですね……」

簡潔にハヤテは今まで起こったことを説明した。

「なんだかまた複雑なことになったとるな。こういうことに巻き込まれるのは相変わらずの執事やな」

「まあ、ハヤテ様ですし。行くところで何かが起こっても不思議ではありません」

「なんですか、そのコナ 君みたいな感じは」

「ところで事情は分かりましたけど、どうやってあそこに侵入します？見るところ門番は2人居るようですが」

館の扉を見ると、2人の黒服が立っていた。

「それに壁から上ることはできないですね。そんな簡単に入れるとは思いませんし……」

「話に聞いたところ、警備レベルは全国でも一、二を争うくらいで

すしね。ですから悩んでいるのですが……」

「あいにくのところダンボールは手元にありません。くそっ、持つてくるべきでした」

「いや、なんでそんなに悔しがるんですか？それにそんなのでは絶対にはれませよ」

桂馬に対してハヤテが的確なツッコミをする。

「……なあ、これなんかどうや？結構いい案と思うんやけど」

「」「？」」「」

ここで咲夜が何か思いついたようである。

皆は耳を傾ける。そして咲夜の話した作戦とは……、

「……無理じゃないですか？」

「いや、いける……！というか成功間違いなしや……！」

「どこからその自身は出てくるのかしら？」

ハヤテと伊澄は作戦の内容を聞いて否定きみである。しかし咲夜は自身たっぷりにしている。

よほどのものなのだろう。

「とりあえず、次の作戦でも考えましようかね」

「それがいいですね」

「ちょ、2人ともひどいで!？」

そのまま流れると思ったら、

「……行けるかもしれませんね、その作戦」

一人黙っていた桂馬が咲夜の作戦に賛成した。何を根拠にそんなことを言っているのか分からないが。

「「ええ!？」」

当然2人は驚く。

「さすが桂馬やな!!」

咲夜は賛成してくれて大喜びだ。

「いやいやいやいや、無理ですよ!!というか大丈夫なんですか!？」

「桂馬さんはまともだと思っていたのですが……」

「僕はいつでも真面目ですよ。大丈夫です。絶対に成功します。間違ありません。」

いやだったら僕と咲夜さんの2人でやりますので……」

そこまで言ったら信じてみたくなるのが人間だ。2人はそのまま桂馬のことを信じることにした。

しばらくして2人は黒服の男達に行った。

「なあ、おっちゃん達？」

「ん？なんだね？というかおっちゃん言うな。くそっ、確かにおっさん臭はするかもしれんが……」

「いや、おっさん臭ってなんだよ。というかお前まだ30歳だろ……」

隣の確なツッコミはそのまま流される。

「いや流すなよ!？」

「今日、松乃片の人に呼ばれて来たんやけど……そこ通してくれへんか？」

「何事もなかったかのように進めるなよ!？」

そしてまた無視。話を円滑に進ませるために敢て桂馬と咲夜はつつこまない。

「悪いが今は入れるわけにはいかん」

「ウチらかなり重要な話って聞かされてきたんや。お願いや入れてくれへん？そうせんとウチら怒られてしまっ」



「しかし……」

咲夜の言葉に悩んでいる男。

「断われよ」

「……ならば俺の前で何かしてみる。そしてそれで俺を見事感服させたら通してやる」

「ほんまか。ありがとな」

「っておい！？駄目だって言われてるだろ！？」

「うるさい！！断るのはかわいそうだと思ったただけだ！！それにこうしないと後悔する気がするんだ！！」

「いやしねえよ！！」

「ツッコミがやけにお上手ですね。特訓したんですか？」

「特訓しとらんわ！！普通の反応だ！！」

「なら桂馬。頼むで」

「了解です」

咲夜は少し後ろに下がる。逆に桂馬は前に出て構える。

「ではジャンルはダジャレでいいですか？」

「ほう、ダジャレか。俺が好きな部類のやつだ。俺はダジャレに関して結構厳しいぞ」

「ならなおさら気合が入りますね……」

桂馬は一回深呼吸をしたあと構えた。

「じゃあ行きます……ダジャレを言うのはおじゃれ（お洒落）」

「」「」「」

（笑えません。最高に笑えない寒いダジャレです……）

本当にそういうほど寒かった。故に今、誰も笑うものはいな

「ぷっ、あはははは！ーやべえ、面白すぎる。というか至高のダジャレだ」

どうやら笑っているのは先程のおっさん臭が漂う男。げらげらとバカでかい声でお腹を手で抱えながら笑っていた。

「そこまで！？というかお前浅すぎだろ！？」

「まあさすが桂馬やな。ダジャレ王になると決めて五年……伊達に修行してきたわけやないな」

「いや五年ってそんなにダジャレって修行するものか！？それにどこかのゴム人間の発言パクるな……」

「お前氣にいったよ。俺をダジャレで笑わすとはな……いいだろう。中に入るがいい」

「あんがとな、おっちゃん あとあそこにいる2人も入れてやってや」

「勿論だ」

「ってちよつとまで勝手に」

「貴様は黙っている!!」

「ぶはっ!!」

男にツッコミをしていた男は殴られてそのまま気絶してしまった。左頬に鋭いパンチが入った。

「ありがとうございます。でもいいんですか？」

「ああ、別に構わねえ。約束は約束だ。それにあんたなら許してもいい。なんsねダジャレを愛する人だからな」

「ダジャレを愛する人に悪い人はいない、ですね」

「その通りだ」

（（変な友情が芽生えている……））

そう思っているのはハヤテと咲夜だけではないはず。とにかくこうして変な形で侵入作戦は成功した。

「とうかこれ俺理不尽すぎないか？」

名前もないツッコミ男の眩きはとてむなしく響き渡った。

第25話 作戦はしっかりと隙のないように練って考えよう（後書き）

とまあ今回は久しぶりに咲夜と伊澄が登場しました。というか後半伊澄さんしゃべってないよな……気のせいだと信じたいです。

さて次回から終盤に入っていきますのでよろしくおねがいします。

それではまた次回でお会いしましょう。

第26話 執事VS兄とその他もろもろ 前編(前書き)

というわけで今年最後の投稿になりそうなデビルマンです。

クリスマスですね。ま、しつたこつちやないですけど。

それではどしどしー！

## 第26話 執事VS兄とその他もろもろ 前編

前回のあらすじ

「ダジャレを言うのはおしゃれ（お洒落）……！」

「ぐはぁ……く、くそっ、なんてダジャレパワーだ。この俺がこれほどまでに簡単にやられるとは」

「僕は行かなきゃいけないところがあるんです。こんなことで立ち止まることなんてできません」

「ふっ、それもダジャレ王になるため、か。中々の覚悟だな。だが、忘れるな。これからはさらに苦しくなるということを」

「そんな苦しみ、僕には関係ありません。ダジャレ王になると決めたからにはどんな道でも突き進んでいきます」

「へっ、そこまで言うなら止めはしねえ。さっさと行きやがれ……俺は……ここで眠ることにする」

「ええ好きだけ眠っていてください。……いい夢見れるといいですね」

「ああ、最高のダジャレの夢を見て、く、るぜ……」

そう言って男は安らかに眠りについた。

「……あれが」

そびえるのは大きな城。その中にいるのは現ダジャレ王、ダジャレリータ三世。そのそばにはダジャレ四天王も控えている。だがそんな彼の目の前にはなんの障害にもなりはしない。ダジャレ王を倒し、新しくダジャレ王になるために彼は挑む。

「さ、行きますよ!!」

来週ついにラストバトル!! 御剣桂馬は新ダジャレ王になり世界を救うことができるのか!? そしてついに桂馬の本当の出生が明らかになる!?

こうご期待!! 次週を見逃すな!!

「いや、前回こんなにもバトルチックな感じじゃなかったですよね!?! それにあらすじ内で終わらないでください!!」

だがなかなか締めもいい感じだし。

「いやだから本編忘れてくださいよ!! 本編のできに自信がないからって勝手に終わらせないでください!!」

ちえ、仕方ないな。ではいつものをどうぞ。

本当の前のあらすじ



ハヤテは松乃片の本館を見つけ出すことに成功。  
桂馬達の助力もあり見事侵入に成功した。

「普通にそれしてればいいんですよ」

「ハヤテ様はいつたい誰に話してるのかしら？」

「もうほつといたほうがええで。関わるだけ無駄や」

「そつ？ならいいけど……」

扱いがひどいハヤテだが本人には聞こえていない。本人が聞いたら落ち込むだろう。

「さて、じゃあ癒々子さんを探すけど……どないする？」

広い庭見たいなところで四人が茂みに隠れて話あう。隠れているのは見つからないようにするためである。

「そうですね、四人行動はあまりよろしくないのて二手に分かれましよう。ちよつど携帯電話はそれぞれありますし、見つけたほうから連絡を入れればよろしいかと」

「それがいいと思います」

「私もそれに賛成や」

「私もその提案で構いません」

順にハヤテ、咲夜、伊澄が承諾する。  
そしてチームを決めた。

ちなみにチームは、

ハヤテ&伊澄と咲夜&桂馬に分かれた。

「何もなかったらひとまずここに戻ってきましょう。ではそれぞれ行動開始です！！」

桂馬の声とともに二つのチームは行動を開始した。

#### ハヤテ&伊澄チーム

「やっぱり広いですね。本館だけあって」

「昔に一回だけ来たことありますけど、あんまり変わっていないようですね」

ハヤテと伊澄は長い廊下を人に見つからないように歩いていた。側面には肖像画や花瓶などが置いてある。その一つ一つが美しく、豪華なものだと分かる。

「あれ？ここは」

「どうしました？ハヤテ様？」

歩るいて横をみたときにふと大きな広間があるのを見つけた。そこはやけに明るく声もぼそぼそと聞こえた。どうやら人がいるようだ。

「少しのぞいてみましょう」

「はい」

伊澄の了解もとってハヤテは中をみる。

中は少し広いリビングみたいになっていてダンスパーティーの会場みたいところだった。

真ん中に誰か座っているようだ。

「まったく……いつまで寝ているのだ。妹は？」

「少し薬が強すぎたようです。適量にしたはずでしたが」

「そんな言いわけをするなら少しは反省でもしたらどうなのだ？中村よ」

「……すみません」

（癒々子さん！！こんなところに……それに中村さんも。一体誰と話しているのでしょうか？）

（おそらくは癒々子さんのお兄様である昭二さんでしょう）

（つまりあの人が犯人ですね……どうして妹を誘拐なんて）

どうしてもその理由が分からなかったハヤテは耳を彼らの会話に傾ける。

「まったくそれにしてもここまで時間がかったな。あのメイドの護衛力といったら……俺のSPじゃ何の意味もなさないからな」

「私も随分と苦勞をしました……最初はかなり警戒されて癒々子様に話すことすら禁止されていましたからね」

「だが、それもだんだんと打ち解けるうちに薄れていく。

しかも自分の主がその警戒している奴を受け入れてるのだから余計に追いやることもできない。

そして極めつけなのは……」

「はい、三千院家の執事との出会い、ですね」

「ああ、奴の予言通り本当に会おうことになるとはな、これは予想外だった。

だがそのおかげであいつらを別館から本館に引き寄せることができた。三千院家にはさまさまだな」

（そ、そんな僕のせいだ……！！）

まさか自分のせいで誘拐されたなんて思いもしなかったハヤテは自分に怒りを感じていた。

その証拠に拳を握りしめている。

（落ち着いてください、ハヤテ様）

（でも……！！）

(今はばれるわけにはいきません。それに今悔しがるよりもあとでちゃんと癒々子さんに謝ればいいと思います。そのためにも今はこらえて、癒々子さんを奪還するチャンスを待ちましょう)

(……そうですね。すみません……)

(いえ、ハヤテ様らしくていいと思います)

笑顔で答えてくれた伊澄に感謝しようとしたその時、

「……さて一体いつまでそこに隠れているつもりだ、三千院の執事よ」

( (?!? ) )

「バレていないとでも思っていたか？隠れなくてもいいぞ。さ、おとなしくたまえ」

ま、いやならそれなりのことはさせてもらうがな」

(仕方ありません。おとなしくすることにしましょう)

(そうですね……)

2人で小さく呟いた後、2人は物陰から出た。

「初めましてだな、三千院の執事よ。俺の名は松乃片昭二だ。

ま、立ち話もなんだ。そこに座れ。勿論そちらのお嬢様も座るといい」

そして2人に座るように促した。

咲夜&桂馬チーム

「ここの庭綺麗やな」

「中々風情のある庭ですね。それにしても広いですね」

話は少し戻って、咲夜と桂馬は外側の庭を歩いていた。

「それにしてもなんで伊澄さんと組まなくてウチと組んだん？」

「え？なぜそれを？」

「だってウチってこのメンツの中じゃ明らかに劣ってるし、迷惑しかかけんやろ？それに桂馬は自分からウチと組む言っただやん。だから気になって……」

「ああ、それはですね……特にないですよ」

「ないんかい」

と咲夜のツツコミが入る。

「ま、あるにはあるんですが……」

「あるならいつてみてや」

「えっと、ただ単純に咲夜さんを守りたい、からですね」

「ふえ！？な、なに言つとるんか自分は！！／／／」

突然の発言により咲夜は顔を真っ赤にさせる。

「だって、ここに来る前に約束したではないですか。必ず守るって」

確かにそんな約束したなあ、と咲夜は思い出す。

「それに今回は伊澄さんはハヤテ君につけたほうがいいと思ったんです」

「な、なんでや？」

「伊澄さんはハヤテ君をよく理解しているし逆にハヤテ君も伊澄さんをよく理解している。」

だから何かがあった時にすぐにお互いに気遣うことなく対応できるんです」

「でもウチもある程度ならあの執事のこととは理解しとるつもりやで？」

「確かに咲夜さんもそうですが、ハヤテ君の場合、咲夜さんに気を使ってしまったて自分のことに気を回せないですから。」

それに今回はハヤテ君は癒々子さんのことに関して責任を感じているようですしね。だからこそ僕はハヤテ君と伊澄さんをチームにさ

せたんです」

「なるほどな。」

「っていうか結局自分が足手まといみたいになつとるやないか……。ま、自分でも自覚はしとるけど」

「そんなことないですよ。咲夜さんはいるだけで心があつたまりますよ。あれですよ、ムードメーカーってやつです」

「そんなんやつたらええけど……」

少し納得しがたい感じで咲夜が呟くと、不意と桂馬が歩みをとめた。その顔つきが真剣そのものだった。

「ん？どないしたん？桂馬」

「……咲夜さん、僕から離れないでください」

「え？」

その瞬間、突然どこからか矢が飛んできた。そしてそれは咲夜を狙っていた。

「！！」

桂馬はとっさに反応し、咲夜の手をとり、腕の中に引き寄せた。矢はそのまま地面にささった。

とっさのことで何が起こったか分からない咲矢だったが、自分の今の状況を考えると顔が真っ赤になっていた。



「な、なんなんや、一体、松乃片のSP達かなんかが攻撃を？／／」

「いや、いくらなんでもそんなことはありません。それにこの気配は……人間の気配ではありません」

「じゃ、じゃあ一体誰が……」

「よく気付いたのう。さすがは三千院家の執事。いや、ここは御剣桂馬と言ったほうがええかの」

声のした方向を見ると、そこに一人の綺麗な紫が特徴な和服を着た、青い髪の毛の女が立っていた。手に扇子を持ちながら不敵に笑っていた。

「……あなたは一体」

「わらわか？わらわの名は荒宮美鈴。あらかみやみすず

ま、お主が聞きたいのはそのようなことではないようだよ」

「何故僕の名前を？」

「三千院家の執事と言えば今やかなりの有名になつてるので。でもわらわは昔からお主のことを知っておったぞ？

そう……御剣家にいた時のこともある程度はしつとる」

(そういえば御剣つてどっかで聞いたことあると思つてたけど……)

桂馬の腕の中で咲夜は頭に何かひかかっているものを思い出そうとしたが、思い出せずにいた。

「ところでいつまでおなごを抱きつかせておるのじゃ、お主は？」

「え？あ、すみません、咲夜さん……」

「そ、そんな謝らなくてもええで／＼／」

少しぎこちない2人。そして離れた時、少し残念な顔をしていた咲夜の顔は誰にも見られなかった。

「……あなた一体なんですか。御剣家のことを何処まで」

「そうさのう。お主があの家でどんなことをしていたのか、くらいじゃの。」

ま、そんなことはどうでもよくて、とにかくお主に会いたかった」

「僕に？」

「ああ、御剣家最強と謳われているお主に会いたかった。会ってどれほど強いのか確かめたかった。」

すでに試したものの、あの程度の魔物じゃお主をはかれなかった……

「…」

「まさか、あのゴキブリは……」

「お主が今思っている通り、わらわが強化してやったやつじゃ」

「そうですか……。もしかして今回の松乃片のことにも絡んでいるんじゃ」

桂馬は予想した。自分と戦いたい。ならば今回の松乃片の後継者争いを利用して自分を誘い出すことくらい考えにつくのは容易であった。

「そうじゃ、ま、利害の一致というやつじゃ。」

「わらわはお主と会う代わりに奴にはいいことをしてやったからのう」

「いいこと？……まさか！！」

「ふふふ、そう。そのまさかじゃ」

「桂馬？何かまずいことなん？」

「……まずいというより、少しこれでやっかいになりましたかね」

「やっかい？」

「ええ」

(ハヤテ君なら大丈夫だと思えますけど……気を付けてください。彼の強さは今、尋常なものではないはず)

別のところにいるハヤテの心配をしながら桂馬は目の前にいる美鈴に警戒を解かない。

「で僕に用はそれだけですか？」

「わらわの場合は、じゃ。とにかくお主と戦いたくてじじいじじいじじいじじい」といってさういふと「」

「……分かりました。でもその前に咲夜さんを安全なところに避難させても？」

「ええじゃろう。その女子おんなは関係ないしの。興味はない」

「では咲夜さん。そこら辺の安全なところに隠れていてください」

「わかった。……気いつけてな。桂馬」

「はい」

返事をする咲夜はそこらにあった少し大き目な岩のところに隠れた。

そして両者はお互いに睨みあう。

「武器はないのかの？」

「今回は何も持ってこなかったもので。でも、これで充分です」

「そうか。」

ではさっそくわらわは呼び出すとするかの「

美鈴は何かを唱えるとたくさんの陣がでてきた。それは美鈴の周りにできてその中から何かがでてきた。見るからに妖怪だ。

「自分で戦わないんですか」

「まずは力量試しじゃ。」

心配せずともこやつらを倒した後にでもわらわと戦うから安心せい」  
そういつと美鈴は扇子を閉じて桂馬に指す。すると妖怪達は桂馬を  
見る。

「さ、わらわのかわいい息子達よ。あやつを倒してまいれ」

『『『ぐおおおおおー!!』』』

雄たけびとともに桂馬に突進していく数十体の妖怪。  
そしてそれを黙って見つめる桂馬。

(あかん!!)

咲夜は思わず目をつぶってしまった。  
少しして目を開けると、桂馬が何事もなく立っていた。

「な、何が起きたん？」

「まさか数十体の妖怪が一瞬で消されるとは……」

そう、咲夜が目をつぶっている時、桂馬は己の拳だけで妖怪を倒し  
た。それもかなりの速さで。

咲夜にとってそのようなことはとても信じられなかったが、今まで  
のことを考えると頷くしかなかった。

それにしてもかなり妖怪との戦いに慣れているように見えた。

「さて、これだけですか？それとももう終わりですか？」

「試しはもうやめじや。」

ならばわらわが戦うことにしようかの」

美鈴が前に出る。

（この人、相当の術師だ。しかも伊澄さんと同じ、いや、それ以上の……！）

「では参るとするか?!」

「かかってきなさいっ!!」

こうして2人の戦いは幕を開けた。

### ハヤテ&伊澄チーム

「どうだ？中村が入れた紅茶は濃くがあつてかなりおいしいだろう？」

「え、ええとつても」

少し戻つてここは本館の中。

広間でハヤテと伊澄は椅子に座つて紅茶を飲んでいる。最初は警戒していたが、

『その紅茶には何も入ってはいない。そんなことは俺はしない主義でね』

と言われ自分で飲んでる姿をみて一口飲むと、うまかったのでもまおいしくいただいている。

「さて……何か聞きたいことでもあるのか？」

「あ、はい。……なんで癒々子さんを誘拐なんて」

「ああそのことか。」

妹の奴はあるものを持っているのだ。それは後継者に必要なものな。それがどうしても欲しくて」

癒々子を見ながら話す昭二はあまり面白そうな感じではなかった。

「だったらちゃんと話し合えば」

「話し合ってもくれそうにないものでね。」

実は彼女の大切にしている腕時計の中にそれがあるのだが。ま、証明の印鑑みたいなものだ。それがあれば俺は晴れて松乃片家の当主になることができる」

少し嬉しそうに話す昭二。

「ま、これは父が死んでから毎回毎回言い続けて来たのだが中々言うことを聞いてくれなくてな。ま、彼女はそのことを知らないようだが。」

だから強硬手段をとらせてもらったまでのことよ」

「そんな勝手なこと……！！」

ハヤテは怒って席を立つ。

「ハヤテ様、落ち着いて……」

「くっ……」

伊澄に促されてそのまま座る。

みると彼女も震えていた。怒っているのはハヤテだけではなかった。

（伊澄さんも耐えているというのに。自分が落ち着かなくてどうする！！）

心の中で自分を叱咤して席を座る。

「勝手なこと？大いに関係あるではないか。

妹がさつさと時計を渡していればこんなことは起きなかったのだから」

「でもそれでもやりすぎですよ」

「……何故そこまであいつのことに口出しするのだ、お前は」

「え？」

眼差しはしつかりとハヤテの目を見ながら昭二は言った。

「これは俺ら兄妹の問題。お前は関係ないはずだ。しかし何故そこまであいつのことを気にかけるのだ」

そう聞かれたハヤテは昭二の目をしつかりと見つめてしゃべりだす。



「……友達だからです」

「……は？」

意味が分からないと言った表情をしている昭二にハヤテは言葉を吐き出した。

「友達のことを気にかけるのは当然です。友達はお互いを助け合う。それは男も女も関係ありません。」

癒々子さんと僕は友達です。それだけで理由になるでしょうか？」

「そんな理由でお前は俺達の問題に突っかかるというのか？」

「はい」

(ハヤテ様らしい答え方。これではナギが好きになるのも無理はないわ)

伊澄はハヤテの凄さを再確認した。そして何故彼がああなのかがままた三千院の執事をやっているのかも。

「……くっくっく。ふはははは！！」

「「！？」」

それを聞いて何かおかしかったのか、昭二はいきなり笑い出した。

「実に愉快だ。お前、興味がわいた。面白い。まさかこんな奴が三千院家の執事をしているとは……。」

中村よ、なぜこの執事のことをちゃんと教えなかった？」

「必要ないかと思ひ……」

「……そうか。まあよい。

で、貴様、名はなんというのだ？」

「え？は、ハヤテです。綾崎ハヤテ」

「そうか。ハヤテか。……まあまあいい名ではないか」

そういうと紅茶の入ったティーカップを飲み干し、昭二は席を立つ。

「綾崎ハヤテよ。お前は癒々子を助けたいか？」

「は、はい。そのために来たんですから」

「そうだったな。ならこうしないか」

「？」

「俺と戦え」

「え？」

先程とは変わって今度はハヤテが驚いた。

「それはどういつ」

「つまりだ。決闘というやつだよ。それでお前が勝てたらあいつを

返してやる。しかももう誘拐もしないし、俺はあいつに干渉したりしない。

お前にとってもあいつにとってもかなりいい条件だと思うが」

「……僕が負けたら、どうするんですか？」

「そつだな……」

顎に手を当てて昭二は考える。自分が勝った時の報酬を。

「……お前は二度と癒々子に近づくな。そして二度としゃべるな。そしてこの件から手を引け」

「……」

これは一度受けた後戻りできない、ハヤテはそう考えた。

もし自分が負けた時のことを考えると……癒々子はおびえた日々を過ごすことになってしまう。

そして……彼女との……友達との約束も破ることになってしまう。だが勝てば、彼女を友達を長年続いたこの兄からの呪縛から解放することができる。

勝つしかないのだ。もはや引き返すことはできやしない。

(癒々子さん。待っていてください。必ず勝ちます!!)

寝ている彼女の顔を見ながら、ハヤテは誓った。

「……分かりました。受けます。その決闘」

「ふっ、そうでなくては面白くない」

(……ハヤテ様、気をつけてください。その人……強いです)

伊澄は感じていた。彼の言い知れない力に。

「ここなら広いし何も壊さなくてすむ……」

「ここは……」

先程の場所から移動して外に出て来た。そこは気も石も何も無い平原みたいところだった。確かにここではうたってつけである。

2人はその中心にいる。

伊澄と中村は巻き込まれないように端にいる。

「さて、では始めようか」

「そうですね。……後悔しないでくださいよ」

「ふん、強気だな。その言葉そっくりそのまま返してやろう」

ハヤテはいつもの構えで相手を見る。昭二も同じようにして構える。

一瞬の静寂がその場に訪れる。聞こえるのは風の音と2人の息だけ。

「……行くぞ!!」

「!!」

先にしかけたのは昭二だった。構えをそのままにし、前かがみになりながら突っ込んでくる。

(速い!!)

ハヤテの予想外にも昭二は速かった。自分と同じくらいに。

「っは!!」

その勢いで彼は右足で下から上に蹴りをあげる。それを見切りながらハヤテはかわす。だが、

「っふ!!」

「っ!？」

その上にある足をかかとかから下に叩きつけるようにして下げた。ハヤテはそれにいち早く気付いて横に飛んでかわした。

(は、速すぎる。2人とも、なんという速さだ……)

中村は先程の戦闘を見ていて驚愕していた。2人のあまりにも速さに。自分では一瞬でやられてしまうだろう。

「……速いですね」

「ふっ、貴様こそ、随分と素早くよけるじゃないか。正直驚いたぞ」  
そんな中2人は笑っていた。ハヤテの場合は無自覚だろうが、久しぶりの強敵と会えて楽しくなっているのだろう。

「ではこれはどうだ!！」

再び構え、こんどは両手を使って昭二は攻撃する。  
それを左右によけるハヤテ。

「はあああああ!！」

「っ!！」

その両手による攻撃の速さはさらに増してきた。

(速くなってる!！)

どんどんとハヤテはその速さに気付き始めた。こっとなっては中々抜けることができない。  
このままだといずれやられる。

(そういつわけにはっ!！こっちにだって考えはありますよ!！)

そしてハヤテは昭二の一瞬放った右手の手を抱えるようにして両手でつかみ、そのまま昭二を投げつけた。  
昭二は受け身をとる。

「くっ!！やるな!！」

(じ、次元が違いすぎる!!)

中村は信じられないといった表情をしていた。

今起こっているのは漫画の中の世界ではないのか？そう疑うほどに一方の伊澄は静かに戦いを見つめていた。彼女にとってこんなものは当たり前前の光景なのだろう。故に驚愕もしない。

「まったく少し侮っていました。まさかこんなにもやる人なんて…」

それはこちらのセリフだ。三千院の執事はみな強いと言ったがここまでとはな……」

そして2人は再び対峙する。

(この勝負、どうなるか分かりませんね)

ハヤテは汗を垂らしながら心の中で呟く。

そうこの勝負の結果は誰にも分かりはしない。

「今度はこっちから!!」

「ぬっ!!」

今度はハヤテから攻撃を仕掛けた。お得意のとび蹴りをかますがそれを昭二は上によけてかわす。

しかしそんなことは分かっていたハヤテは、そのとび蹴りを利用して右足をばねのようにして空に飛んだ。

「ふつ。それくらい分かっている!!」

だが昭二はその行動パターンを見越していたようで、空中にいる状態で両手を体の前にだした。相手の攻撃を防ぐ体制に。

ハヤテはそのまま昭二につっこみ、右手で昭二に攻撃した。そしてそれは普通に防がれた。

(よし!!このままだと俺のほうが先に降りる。それを利用してあいつに一発入れる!!)

そのまま吸い寄せられるように地面に着地した昭二はその衝撃でいったん下を向いてしまったがすぐに上をむいて、着地しようとするハヤテを見て構える準備を、

(何!?!いない……だと……!!)

上を見上げてハヤテがいなかった。先程自分に拳をぶつけた奴がいなくなっている。

(どこだ!!どこにいる!!)

「はあああああ!!」

「!?!」

気づいた時には遅かった。昭二はそのまま吹き飛ばされて壁に激突していた。壁に激突した昭二は壁に当たって崩れた拍子に出た煙で隠れてしまった。

そして先程の昭二が立っていたところにはハヤテの姿があった。



(……)

そのままハヤテは壁の方を見ていた。

(……これでやられてくれれば嬉しいんですけどね)

だが世界はそんな思い通りにはなっていない。

その証拠に崩れた壁から昭二は出て来た。頭からは血が出ていた。だが、なんともない顔をしていた。

「今のは結構効いたぞ？」

さあ、また俺を楽しませてくれ！！綾崎ハヤテよ！！」

どちらかが朽ち果てるまで、この戦いは続く。

第26話 執事VS兄とその他もろもろ 前編（後書き）

どうも。いかがでしたでしょうか？

いつもの出来のなさに皆さん驚きましたか？

え？もともと知ってますって？そうですか……。

もしかしたらこれが今年最後になるかもしれません。そうなった場合のためにいまのうちに皆さんにお礼を。

今年は僕なんかの小説を楽しみにしていただいていたありがとうございます。ありがとうございました。

来年も頑張りますのでよろしくおねがいします！！

来年はif編でもやろうかなと考えています。そのまえに二章終わらせないとですね。

それでは感想等お待ちしております。

次回もよろしく願います！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3334s/>

---

ハヤテのごとく!～超不幸な青年の物語～

2011年12月24日23時53分発行